
セクストス・エンペリコスにおける 懐疑の諸形態

（課題番号 05801001）

平成7年度科学研究費補助金（一般研究（C））研究成果報告書

平成8年3月

研究代表者 金山 弥平
（名古屋大学文学部助教授）

セクストス・エンペイリコスにおける

懐疑の諸形態

*

エリスのピュロン資料集

— その人と思想と伝承 —

*

金山 弥平

(名古屋大学文学部)

名古屋大学図書	
和B	89318

本研究課題は「セクストス・エンペイリコスにおける懐疑の諸形態」である。しかしこの題名は、プラトン哲学がかつて存在し、今日、われわれがプラトンの内にかれ独自の思想を捉えようとするような意味において、セクストス哲学なるものが存在したことを意味するものではない。セクストスがその著作（本文〔一二〕への註1を参照）において表わそうとしたのは、かれ自身の思想ではなかった。むしろ、エリスのピュロン（前365/0頃-270頃）が、幸福に通ずる積極的な価値を無判断の生活の内に認めて以来、セクストス（200年頃）に至るまでの約500年の歴史の中で、ピュロンという人物に一つの範型的理想を認め、考察(skepsis)の生に自らを投じてきた哲学者たちが、論敵、ドグマティストたちとの論戦の中で方法的に整備し、鍛え上げていった一つの懐疑(skepsis)的哲学体系、それをセクストスは、自らの著作の中で示そうとしたのである。

しかし、このピュロンを祖とする哲学の懐疑のあり方を求めて、われわれが探求に乗り出すとき、われわれの前に立ちはだかる問題がある。この哲学、Purrhōneios philosophiaを、われわれは日本語で「ピュロン哲学」と呼ぶべきなのか、あるいは「ピュロン主義哲学」と呼ぶべきなのか。つまり、セクストスの著作に現われた哲学を、かれに先立つ半世紀の哲学者たちの手が加わったものであるとして「セクストス哲学」と呼んではならないとするならば、まさにその同じ理由によって、これを「ピュロン哲学」と呼んでもならないのである。むしろ、プラトンの伝統を受け継ぎつつ、新たな発展を遂げた思想を、今日「プラトン主義」と一般に呼ぶように、セクストスに現われた哲学も「ピュロン主義哲学」と呼ぶのがふさわしいことになるだろう。

しかし、われわれがこの呼び名を採用するとしても、なお次の問題が残る。いったい、「ピュロン主義哲学」のどこまでがピュロンその人の思想で、どこからが後世の人の創意に基づくものであろうか。さらにまた、この問いに対処すべく、われわれが接近を試みるとき、その手前で別の問題がわれわれを待ち受けている。つまり、ピュロンは何も書き表わさなかった。そしてまた、かれの思想を書き記したティモンの証言も、他の人々の証言も、断片的にしか残っていないのである。

しかし、この第2の問題はどうしても乗り越えられない障壁とはならない。むしろ断片的にもせよ、今に残る証言をもとに、われわれは第1の問題に立ち向かうことができるのである。この研究成果報告書に、以下に示すのは、まさにそのための重要な道具、「エリスのピュロン資料集」である。この資料の内に、ピュロンその人に関する古代の証言の現存資料はすべて収められている。たとえ困難ではあっても、限られた資料をもとにわれわれがピュロンの実像に近づこうとするとき、われわれは、ピュロンを手本とする考察（懐疑、skepsis）に生涯を捧げた人たちの群れの中に共に加わることになる。その時、懐疑（考察）主義の祖、ピュロンは、われわれの考察の深まりに応じて、かれの生の秘密（本文Ⅱを参照）を明らかに示してくれることであろう。

研究組織

研究代表者： 金山 弥平 （名古屋大学文学部助教授）

研究経費

平成5年度	800千円
平成6年度	600千円
平成7年度	500千円
計	1,900千円

研究発表

（1）学会誌等

金山 弥平 「実体（ousia）探求におけるアリストテレスの照準 — 『形而上学』Z巻
1章における《ti esti》の問い — 」

『名古屋大学文学部研究論集』第120号，1994年．

「理論と経験 — 古代医学における経験派の方法論 — 」

『名古屋大学文学部研究論集』第123号，1995年．

「理性と古代懐疑主義 — 人間と非理性的なもの」

『アルケー』第3号，1995年．

「ピュロン主義，経験主義，方法主義 — ガレノス『入門者のために
諸学派を論ずる』（序論および翻訳と訳注） — 」

『名古屋大学文学部研究論集』第126号，1996年．

（2）口頭発表

金山 弥平 「理性と古代懐疑主義 — 人間と非理性的なもの — 」

関西哲学会：シンポジウム「理性」1994年11月13日．

エリスのピュロン資料集
— その人と思想と伝承 —

目次

I. デイオゲネス・ラエルティオスの説明と他の関連証言（その一）	4 頁
— 懐疑の生涯と系譜 —	
II. デイオゲネス・ラエルティオスの説明と他の関連証言（その二）	9 頁
— ピュロンの生の秘密 —	
III. デイオゲネス・ラエルティオスの説明と他の関連証言（その三）	12 頁
— エピソード（1） —	
IV. アリストクレス『哲学について』と関連証言より	14 頁
V. エピソード（2）	22 頁
VI. 原子論との関係	24 頁
VII. アルケシラオスとの関係	26 頁
VIII. ピュロンの弟子たち	29 頁
IX. ピュロンとピュロン主義	30 頁
X. ピュロンとティモン	32 頁
XI. キケロの評価 — ピュロン哲学の終焉 —	35 頁
XII. 前 1 世紀以降の証言 — ピュロン哲学の復興と再度の沈黙 —	39 頁
註	49 頁
事項索引	91 頁
固有名詞索引（年代順）	93 頁
Caizzi との対照表	95 頁
Long & Sedley との対照表	95 頁
文献・略号表	95 頁

エリスのピュロン資料集
— その人と思想と伝承 —

I. ディオゲネス・ラエルティオスの説明と他の関連証言（その一）

— 懐疑の生涯と系譜 —

[一] DL¹⁾ 9.61 (Caizzi 1A; Long & Sedley 1Aの一部)

エリス²⁾の人ピュロンは、ディオクレソス³⁾も記しているように、プレイスタルコスの息子であった。アポドロソス⁴⁾が『年代記』で語っているところでは、最初、画家であったが、アレクサンドロソス⁵⁾が『系譜』の中で語っているように、スティルポソ⁶⁾の息子（弟子？）のブリュソソの弟子となり（ブリュソソ、あるいはスティルポソの弟子になり？）⁷⁾、その後、アナクサルコソ⁸⁾の弟子になって、どこへでもついて行き、その結果、インド⁹⁾では裸のソフィスト（行者）やマゴソ僧と交わるようになった。そしてそこからして、哲学をこの上なく高貴なやり方で¹⁰⁾で行なうようになったと思われる

— 無把握（把握不可能）と判断保留という形式のものを、アブデラのアスカニオソ¹¹⁾が言っているように導入することによって。というのも、かれは、美しい物事も、醜い物事も、正しいことも、不正なことも何もないと主張していたのである。また、同様にして、すべての物事について、何ものも真実にこれこれであるということではなく、人々はただ法と習慣によってすべてのことを行なっているだけだ、と主張していたが、その理由は、それぞれのものは、何かであるよりもよりいっそう多く別の何かであることはないから¹²⁾、ということであった。（[八]に続く）

[二] Suda¹⁾ s. v. Πύρρων (Caizzi 1B)

ピュロン、プレイスタルコソの息子、エリスの人、哲学者。マケドニア王ピリッポソの治世²⁾、第111回オリンピック大会期³⁾とそれを越えて生きた人。最初は画家であったが、後に哲学に転向し、クレイノマコソ⁴⁾の弟子であったブリュソソ⁵⁾の弟子になり、それから、メトロドロソ⁶⁾の弟子であったアレクサンドロソ⁷⁾の弟子になった。このメトロドロソはキオソの人であり、その師はアブデラのメトロドロソ⁸⁾であった。ピュロンは、自然のあり方においては醜い物事とか、美しい物事は何もなく、ただ習慣と法によって醜かったり、美しかったりするのだと考えた。

[三] Suda s. v. ἐπιρρων (Caizzi 1C)

ピュロンが、無把握（把握不可能）と判断保留という形式のものを導入した最初の人である¹⁾。

[四] Suda s. v. Σωκράτης (Caizzi 2)

ある人々は、ブリュソソはソクラテソ¹⁾の弟子ではなく、エウクレイデソ²⁾の弟子で

あったと記している。ピュロンもまたこのブリュソンの弟子であった。そしてこのピュロンに因んで、ピュロン主義者たちはその名を得たのである。

[五] Strabo¹⁾, Geographica 9.1.8 (Caizzi 3)

かつてエリスには、メガラ派と呼ばれた哲学者たちのサークルもあった。かれらは、エウクレイデス — ソクラテスの仲間、メガラ生まれ — を継承する人たちであった。エリス派は、エリス出身のパイドン²⁾の思想も継承していたが、同じようにしてかれらは — その中にはピュロンも属していた³⁾ — 、ソクラテスの徒であるエウクレイデスをも受け入れ、その後を継いだのである。他方、エレクトリア派は、エレクトリア出身のメネデモス⁴⁾の後を継ぐ人たちであった。

[六] Suda s.v. Σωκράτης (Caizzi 4)

(ソクラテスのお陰で哲学者になった人には) エリスのパイドンもいる。かれも自分の学派を立てたが、その学派はかれに因んでエリス学派と呼ばれ、後には、メネデモスがエレクトリアに持ち込んで教えたことにより、エレクトリア学派と呼ばれた。またこの師から¹⁾ピュロンも生まれることになった。

[七] Scholia in Lucia., Bis acc. 25¹⁾ (Caizzi 5)

ピュロンは最初は画家であったが、後に哲学者になり、およそ有るものすべてを否認することを目的にした。

[八] Antigonos apud DL 9.62 (Caizzi 6; Long & Sedley 1Aの一部)

([一]の続き) またかれは、実生活でもその立場を守り通し、何であれ避けることなく、身を守ることもしないで、例えば、車であろうが、崖であろうが、犬であろうが、すべてを我が身に引き受け、感覚をまったく信用することがなかった。しかし、カリュストスのアンティゴノス一派の人たち¹⁾が語っているところでは、仲間が同伴してくれたから安全でいられたということである。([九]に続く)

[九] Aenesidemus apud. DL 9.62 (Caizzi 7; Long & Sedley 1Aの一部)

([八]の続き) しかしアイネシデモス¹⁾の主張では、ピュロンは、哲学(愛知)の営みにおいては判断保留の議論に従ったものの、それぞれの行為に際しては先のことを見ていないわけではなかったとされる。([一一]に続く)

[一〇] Aenesidemus apud. DL 9.106 7 (Caizzi 8を含む; Long & Sedley 71A)

(106)アイネシデモスもまた、『ピュロン主義の議論』第一巻において、ピュロンは、対立する議論のゆえに何ごともドグマティスト流に規定することをしないで、諸々の現われに従ったと伝えている。また同じことを、かれは『知恵を駁する』と『探求について』でも述べている。・・・(中略)・・・したがってアイネシデモスも言っているよ

うに、懐疑派によれば、現われが規準になるのである。・・・（中略）・・・(107)また懐疑派は、判断保留が目的である、と言っている。そして、ティモン¹⁾やアイネシデモスの一派が言っているところでは、この判断保留に、無動揺（平静さ、アトラクシア）が、影の形に伴うがごとくに随伴するのである。

[一一] DL 9.104-105 (Caizzi 55, 63Aを含む; Long & Sedley 1H)

さらにドグマティストたちは、懐疑派は、生活がそこから成り立っている物事すべてを抛擲する点において、まさに生活までも否認していると主張する。これに対する懐疑派の答えは、ドグマティストたちは間違っている、というものである。というのも、懐疑派が言うところでは、かれらが否認するのは、見るということではなく、むしろ、いかにして見るか、を知らないのである。「というのも、われわれは現われを立てるが、そのとおりのあり方をしてもいる、とは考えない。また、火が燃やす（熱くする）ことを、われわれは感覚する。しかし、ものを燃やす（熱くする）自然のあり方が火に備わっているかどうかについては、われわれは判断を保留する。また、だれかが動いているのをわれわれは目にするし、だれかが滅びるのも目にする。しかし、これらのことがいかにして起こるかを、われわれは知らない。われわれは（と、かれらは言う）、諸々の現われに並べ立てられた不明瞭な物事に対してのみ、反対の立場をとる。というのも、われわれがその絵は立体的であると言う場合にも、われわれは、現われを明示しているにすぎず、これに対して、その絵は立体的でないと言う場合には、もはや現われるところを語っているのではなく、別のことを語っていることになるからである。ここからしてティモンもまた『ピュトン』において、

習慣から外れることはなかった¹⁾、

と語っているし、『インダルモイ』²⁾の中でも次のように語っている。

しかし、どこに行こうとも³⁾、あらゆるところで現われが力をもつ。

また『諸感覚について』の中では

わたしは蜜が甘くあるとは考えないが、そう現われているということには同意する⁴⁾

と言っている。

[一二] セクストス¹⁾『論駁』第7巻29-30節 (Caizzi 63Bを含む)

二つの規準の内、最初の規準（行為の規準）については、懐疑的な生き方を扱った箇所ですでにわれわれが説明したとおりである²⁾。というのも、行き詰まり主義的に哲学に携わる者も、完全に活動を止めてしまい、実生活における諸々の行為において何もな

することができなくなってしまうのでなければ、選択と回避の両方の何らかの規準をもつことが、必然的に要求されたのである。つまり、その規準とは現われであり、それはまさに、ティモンも次のような言葉で証言しているとおりである。

しかし、どこに行こうとも、あらゆるところで現われが力をもつ。

[一三] Galenus¹⁾, De dignoscendis pulsibus, 1.2

(Kühn, VIII 780.14ff.; Deichgräber fr.74; Caizzi 63Cを含む)

ところで、課題となっていたこと — つまり、だれに対しても勝ちを収めようと欲する経験派が主張するように²⁾、動脈の振動しか触覚に感取されない、ということではなく、動脈の拡張もまた触覚に明瞭に感取されるということ — は、いまや結論として導かれたものとしよう。そうすると、かれらが、恐るべくして、説得力を有するソフィストの類いであるという評判を得ようと熱心に願うのでなければ、かれらは、先に語られていた事柄と反対のことを現在主張するわたしの言葉に聞き従い、動脈の拡張がともかく触覚に現われる、ということに同意しなければならない(しかしその場合でも、かれらは、自然的にもそのとおりであるかどうか、知っているとは同意することにはならない)。というのも実際、そうするのが、この人たちが選択した方針にはふさわしいことだったのであろうから。それとも、いったい何の影響のもとに、かれらは他のすべての議論では、現われを認め、自然のあり方については行き詰まりの態度を取りながら、今この場合には、もはやそうしないのであろうか。いや、かれらが普段どおりにするのであれば、もはや「おそらく動脈は拡張するであろうが、しかし少なくともそうは現われない」と言うてはならないのであり、むしろ逆に「おそらく動脈は拡張しないだろうが、しかし拡張するように現われる」と言うべきなのである。というのも、これが、現われだけを認め、その現われに加えて思いなされる事柄を認めない人が、当然とるべき態度だからである。少なくとも、ティモンが言っているように、

どこに行こうとも、あらゆるところで現われが力をもつ

のであれば、そうすべきなのである。それともいったいどうして、今、抱かれたところの現われは力をもたないのだろうか。いや、あらゆるところで力をもつなら、ここでも力をもつはずのものだったのだ。

[一四] DL 9.62 (Caizzi 9; Long & Sedley 1Aの一部)

([九]の続き)かれは九十歳近くまで生きた。([一四]に続く)

[一五] Pausanias¹⁾ 6.24.5 (Caizzi 12)

広場に通ずる柱廊の下に、ピストクラテス²⁾の息子のピュロンの像が立っていた。ピュ

ロンはソフィスト³⁾であって、いかなる議論においても確固たる同意に至ることはなかった。エリスの町から遠からぬところには、ピュロンの墓もある。その地の名前はペトラと言ひ、このペトラは古くはエリスの一地区（デーモス）であったと言われている。

[一六] Antigonus apud DL 9.62-64 (Caizzi 10; Long & Sedley 1Bの一部)

([一四]の続き) カリュストスのアンティゴノスは「ピュロン伝」の中で、ピュロンについて次のように語っている —

(63)最初、かれは無名で貧しく、画家をして暮らしていた。エリスの体育場には、かれが描いたまづまづの作品「松明競争の走者たち」が今でも残っている。かれは世間から身を引いて孤独に暮らし、血縁の者に姿を現わすこともごく稀にしかなかった。しかし、そのようにかれが振る舞うようになったのには、あるインド人がアナクサルコスを非難して、この者は自分では王の宮廷の世話をしているだけであり、他のだれひとり善き者に教育することはできない、と語っているのを耳にしたという事情がある。かれは、つねに同じ心の状態を保ち、それゆえ、かれが語っている最中にだれかがかれの許を立ち去ったとしても、最後まで自分に向かって議論を語り通した。とはいえ、若いときには、かれにも心を動かされることや〈***〉¹⁾はあった。かれはしばしば、— アンティゴノスが伝えるところでは — だれにも告げないで家を留守にして、だれであれ自分の気に入った人たちと徘徊した、ということである。またある時には、アナクサルコスが泥沼に落ちたとき、助けの手を差し伸べないで過ぎ去っていった。ある人たちは、このことでかれを非難したが、当のアナクサルコスは、かれの無差別（アディアポロン）と無感情（アストルゴン）を称賛した。(64)またある時には、自分に向かってお喋りしているところを見つけられ、その理由を尋ねられると、よき人になるように練習しているのだ、と答えた。([一七]に続く)

[一七] Antigonus? ¹⁾ apud DL 9.64 (Caizzi 28; Long & Sedley 1Bの一部)

([一六]の続き) また探求においては、最初から最後まで続けて語ることもできたし、質問に答えて語ることもできたから²⁾、だれからも軽んじられることはなかった。ナウシパネス³⁾もこのゆえに、すでに若いときからピュロンの虜になっていた。ともかくナウシパネスは、ピュロンの状態に達しなければならない、ただし議論（学説）においては、自分のそれを採用しなければならない、と主張していたのである。またかれはしばしば、エピクロス⁴⁾もピュロンの振る舞いに驚嘆し、ピュロンについてたえず質問していたと言っていた。([一八]に続く)

[一八] Antigonus? ¹⁾ apud DL 9.64 (Caizzi 11)

([一七]の続き) さらにピュロンは、祖国の人たちからたいへん尊敬されていたため、神官長²⁾の位に任ぜられたし、またかれのお陰ですべての哲学者への税金の免除が可決された。([一九]に続く)

Ⅱ. ディオゲネス・ラエルティオスの説明と他の関連証言（その二）

— ピュロンの生の秘密 —

[一九] DL 9.64-5 (Wachsmuth fr.38; Diels fr.48; Lloyd-Jones & Parsons fr.822;
Caizzi 60; Long & Sedley 2C)

（[一八]の続き）実際かれには、その無苦勞（アプラーグモシュネー）¹⁾を見習おうとする多くの称賛者たちがいた。ティモンもまたそれゆえに、『ピュトン』において²⁾、また『シロイ』においても、ピュロンについて次のように語っている。

ご老人よ、ピュロンよ、あなたはどのようにして、またどこから、
諸々の思いなしへの奉仕と、ソフィストたちの空しい知恵から逃れる術³⁾を発見し、
あらゆる欺きと説得の枷から自由になられたのですか。

いかなる流れ（風）がギリシアを包み、

それぞれの物事がどこから出て、どこに落ち着くか⁴⁾を調べてみる気さえも、

あなたは起こされなかったのです。

（[二〇]に続く）

[二〇] DL 9.65 (Caizzi 61B)

（[一九]の続き）また『インダルモイ』の中では次のように述べている。

ピュロンよ、わたしの心は次のことを聞きたいと願っています —

いったいどのようにして、あなたは人の身にして、

やすやすと、静かに過ごしていける¹⁾のですか。

ただ一人、人間たちの間で神のごとき導き手となりながら。

（[二六]に続く）

[二一] Lloyd Jones & Parsons fr.841¹⁾ (Wachsmuth, p.21,i; Diels fr.67;

Caizzi 61A; Long & Sedley 2D)

ピュロンよ、わたしの心は次のことを聞きたいと願っています —

いったいどのようにして、あなたは人の身にして、やすやすと、静かに過ごしていけるのですか。

いついかなる時も、あれこれと思いをいたすことなく²⁾、同じ状態で動かされることなく³⁾、

快き言論の知恵の渦巻き⁴⁾に目をむけもせず。

ただ一人あなただけが、人間たちのために神のごとき導き手でいらせられる。

全大地をぐりと駆り立てながら⁵⁾、丸く整った球体の、火に燃える円を現わしつつ、
回帰して行く神⁶⁾のように。

〔二二〕セクストス『論駁』第11巻1節 (Caizzi 61C)

懐疑派が、哲学の論理学的部分と自然学的部分にもたらす諸々の行き詰まりについては、先にわれわれが論じたとおりである。そこで次には、倫理的な部分に対して持ち出すことのできる行き詰まりを、さらに付け加えて示す仕事が残っている。というのも、そうすることによって、われわれ各自は、完成した、懐疑主義的な心の状態を獲得し、ティモンの言うとおり、

やすやすと、静かに、
いついかなる時も、あれこれと思いをいたすことなく、同じ状態で動かされることなく、
快き言論の知恵の渦巻きに目をむけもせず、

生きて行けるであろうから。

〔二三〕セクストス『論駁』第1巻299-300節、305-306節

(305-306節がCaizzi 61Dに相当)

(299)詩人たちや、散文作家が語っている事柄を弁別しうる文法技術を、自分たちこそは物にしていると主張する人たちに対して、われわれは別のやり方で反論することにしてしよう。(300)散文著作にしても、詩にしても、それらはすべて、表示するところの言葉と、表示されるところの物事から構成されているから、文法家が、散文作家や詩人の間で語られている事柄を分別しうる技術を所持している場合には、かれは言葉だけを認識しているか、存在する物事だけを認識しているか、あるいは両方とも認識しているかのいずれかであるだろう。ところでかれらは、——われわれが口に出してそうは言わないとしても——物事の認識はもっていないように思われる。・・・(301)というのも、かの横柄な文法家たちのだれにせよ、ヘラクレイトス¹⁾をいかにして理解できるのだろうか・・・(305)また、プレイウスのティモンが、ピュロンを太陽にたとえて、

ただ一人あなただけが、人間たちのために神のごとき導き手でいさせられる。
全大地をぐるりと駆け回り立てながら、丸く整った球体の、火に燃える円を現わしつつ、
回帰して行く神のように

と記しているとき、文法家たちには、これが、ティモンが賛辞の意味を込めて、かの哲学者が呈している輝かしい現われのゆえに語った言葉である、と思われることであろう。しかしまた、だれか他の人は、ピュロンに向かって語られたこのプレイウス出身者の言葉はひょっとして懐疑主義の企図と抵触するのではないか、と考えるかもしれない——とにかく太陽は、先には見られていなかったものを、光によって照らし出し、はっきりと示すのであるが、ピュロンの方は、われわれが自明のこととして捉えていた物事でさえも、それを引き戻して不明瞭なものとするべく力を奮うのであるから。(306)そし

てさらに、より哲学的に考察を加える人には、そのようには現われてこない（思われな
い）。つまり、ティモンが語っていることは、太陽なる神が、その神ご自身を正確にじっ
と見詰める者の視覚を鈍くしてしまわれるように、それと同じ仕方で、懷疑主義の議論
も、より注意を払ってその議論に心に向ける者たちの、思考の目を攪乱し、結果として、
ドグマティストの向こうみずゆえに指定される物事のそれぞれを、その人が把握できな
いようにする、——その限りにおいて、ピュロンは太陽のような仕方で判断保留を遂行
する、ということであると、かれは受け取るのである。

〔二四〕セクストス『論駁』第11巻18 20節

(Wachsmuth, p. 22, II; Diels fr. 68; Lloyd Jones & Parsons fr. 842;

Caizzi 62; Long & Sedley 2Eを含む)

(18)「ある」というのは二つの意味をもっている。一つは「存立する」といった意味
であり、われわれが今このときに、「昼が存立する」と言わないで、その代わりに「昼
である」というようなものである。もう一つは「現われている」といった意味であり、
しばしばある数学者たちが、ある二つの星の間の距離は1ペーキュスであると言いはす
るものの、実際に意味しているのは「現われている」ということであり、必ずしもその
とおりに存立しているわけでないような場合である。・・・(19)・・・すなわち、諸々の
善き物事と、悪しき物事と、どちらでもない物事の自然的な成り立ちに関しては、われ
われはドグマティストたちと十二分なほど論争を行なっている。(20)しかし、われわれ
は習慣的に、それらのそれぞれを、それらが現われているところに即して、善きもの、
悪しきもの、無差別のものと呼ぶのである。それはまさに、ティモンも『インデルモイ』
の中で次のように語るとき、明らかにしている点であるように思われる。

さあ、わたし¹⁾は語ろう、真理の物語りを²⁾、

正しい基準³⁾を手にして、その話がわたしに現われるままに⁴⁾。

神的なる物事と善なる物事の自然のあり方というものは、いついかなる時にも、
人にとってこの上なく均衡のとれた生活が生まれるその元の物事に由来する⁵⁾、と
いうことを。

〔二五〕セクストス『論駁』第11巻140 141節

(Caizzi 64 (=Long & Sedley 11)、およびCaizzi 59を含む)

(140)すなわち、煩いを逃れる道は一つしかないのであって、悪しき物事を避け、善
き物事を追い求めることで動揺する者に対して、われわれが、自然的に善きものとか自
然的に悪しきものは何ひとつなく、ティモンの言うように、

人間たちのもとではそれらは習わしによって¹⁾決定されている²⁾、

ことを示してやるなら、その道は可能となるであろう。しかるに、そうしたことを教え

るのは懷疑主義に固有の仕事である。したがって、幸福な生活を確保するのも懷疑主義の仕事なのである。

(141)³⁾ところで、一貫して無動揺(平静さ)の生活を送り、ティモンが語っていたように、静けさと静穏のうちにいる人は、幸福である。

すなわち、あらゆる方面で静穏が支配していたのである⁴⁾。

また、

わたしが、静穏な風の内に入れられるその人を認めたように・・・⁵⁾。

しかし、存立すると言われる諸々の善き物事と悪しき物事の内の或るものは、思いなしのゆえにもたらされるものであり、別のものは必然によってもたらされるものである。

[二五(補足)] DL 9.60 (Long & Sedley 1E)

この人(アナクサルコス)は、その無情態と、実生活における満足のゆえに「幸福なるもの(エウダイモニコス)」と呼ばれていた。またかれは、この上なく易々と、分別を弁えさせることができた。実際かれは、自分を神と思っていたアレクサンドロス¹⁾を引き戻したのである。

Ⅲ. ディオゲネス・ラエルティオスの説明と他の関連証言(その三)

— エピソード(1) —

[二六] DL 9.65 (Caizzi 13)

([二〇]の続き)またディオクレス¹⁾が述べているところでは、アテナイ人は、かれがトラキアのコテュスを殺害したことでかれを称え²⁾、市民権も与えた。([二七]に続く)

[二七] Eratosthenes¹⁾ apud DL 9.66 (Caizzi 14)

([二六]からの続き)かれはまた、エラステネスが『富と貧困について』の中で語っているところでは、産婆であった姉妹と一緒に敬虔に暮らし、時にはかれ自らも、例えば、鶏とか子豚を広場に連れて行って売ることもあったし、家の片付けも無差別の態度で行なった。また無差別のゆえにかれ自身、豚を洗うことさえ行なったと言われている²⁾。([二八]に続く)

[二八] DL 9.66 (Caizzi 15A; Long and Sedley 1C)¹⁾

([二七]の続き)また姉妹 — その名はピリスタであった — のことで²⁾、ピュロ

ンが何か腹を立てたときに、その点をとらえて攻撃する人に向かって、弱い女に関しては無差別の態度を示すことはない、と言ったとされる。またある時、一匹の犬が飛びかかってきたため、びっくりして逃げ出した際、それを非難する人に向かって、完全に人間を脱却するのは困難である、と言ったということである。しかしできるかぎり — まずは行ないによって、それができなければ言論（議論）によって、— 物事に対抗して戦うこと³⁾。（〔三〇〕に続く）

〔二九〕Aristocles¹⁾ in Eus²⁾., Praep. ev., 14.18.26

(Heiland fr.6; Caizzi 15B)

というのも、カリュストスのアンティゴノスは同じ頃に生き、かれらの伝記を記した人であるが、そのかれが語っているところでは、ピュロンは犬に追いかけて木の上に逃げ、そこに居合わせた人たちによってからかわれた時に、人間を脱却するのは困難であると語ったのである。また、かれの姉妹のピリスタが犠牲を捧げることになっていたとき、友人のうちのだれかが、犠牲のために必要なものをもってくと約束しておきながら、もってきてくれなかったため、ピュロンがそれを買うことになって腹を立てたところ、その友人が、ピュロンの行動は言っていることと一致していないし、無情態にもふさわしくない、と言ったので、ピュロンは、女性に関してどうして³⁾無情態の態度を証明しなければならないのか、と答えたということである。

〔三〇〕DL 9.67 (Caizzi 16; Long and Sedley 1C)

（〔二八〕の続き）かれら¹⁾はまた、ピュロンが、何か傷を負ったときにその手当として、腐敗性の薬剤や、切開や、焼灼処置を施されたけれども、眉をしかめることもしなかったと伝えている。（〔三一〕に続く）

〔三一〕DL 9.67 (Wachsmuth, p.28; Diels fr.79; Caizzi 51)

（〔三〇〕の続き）ティモンもまた、ピュトン¹⁾に向かって語るその説明の中で、ピュロンの状態を明らかに描き出している。（〔三二〕に続く）

〔三二〕DL 9.67 (Caizzi 20; Long and Sedley 1Cの一部を含む)

（〔三一〕の続き）さらに、ピュロンの弟子となったアテナイのピロン¹⁾も、ピュロンが一番好んで言及したのはデモクリトスであったが、しかしそれに次いでホメロス²⁾のことも取り上げ、この詩人のことで大いに驚いて、

人々が産まれ生きる様は、木の葉のそれと似たようなもの³⁾、

いうホメロスの詩句を常々口にしていた、と語っていた。また人間をスズメバチやハエや鳥に譬えた、ということである⁴⁾。さらに次の詩句も引用していた。

しかし友よ、おぬしもまた死ぬのだ。どうしてそのように嘆き悲しむのか。
おぬしよりはるかに優れていたパトロクロスも死んだのだ⁵⁾。

さらにピュロンは、人間たちの不確かさと、虚しき熱心と、子供じみた仕業に関係するあらゆる詩句を引いてきたということである。（〔三三〕に続く）

〔三三〕 DL 9.68 (Edelstein Kidd F287; Caizzi 17A)¹⁾

（〔三二〕の続き）ポセイドニオス²⁾は、ピュロンについて何か次のような説明も行なっている。つまり、一緒に航海していた人たちが嵐のため沈痛な表情をしていたとき、ピュロンその人は心穏やかで、魂を強く保っていた。かれは船の中で子豚が餌を食べつづけているのを示し、知者はこのような無動揺（平静さ）を保持しなければならない、と語った。（〔三五〕に続く）

〔三四〕 Plutarchus¹⁾, Quomodo quis 82E-F (Caizzi 17B)

実際、ピオン²⁾とピュロンの態度は、進歩を表わす徴証であるよりはむしろ、それより優れていて、一層完全であるところの状態を示すものであると、人は考えることであろう。・・・（中略）・・・かれら³⁾が伝えるところでは、ピュロンは、航海中に嵐のせいで危険な目にあったとき、傍らに散らばっていた大麦を満足そうに食べている赤ん坊の豚を指さして、仲間たちに次のように言った、ということである — 降りかかってくる諸々の物事によって乱されることを望まない者は、言論（議論）と哲学とによって、このような無情態を具現しなければならない。

〔三五〕 DL 9.68 (Caizzi 42)

（〔三三〕からの続き）しかしヌメニオス¹⁾だけは、ピュロンが実際はドグマをもっていた、と伝えている。（〔六七〕に続く）

IV. アリストクレス『哲学について』と関連証言より

〔三六〕 Eusebius, Praeparatio evangelica, 14.17.10¹⁾ (Caizzi 25Bを含む)

クセノパネス²⁾一派は、以上述べたような人たちであった。このクセノパネスは、ピュタゴラス³⁾やアナクサゴラス⁴⁾の一派と同時代に活躍したと言われている。ところで、クセノパネスの弟子にはパルメニデス⁵⁾がおり、パルメニデスの弟子にはメリッソス⁶⁾がおり、メリッソスの弟子にはゼノン⁷⁾、ゼノンの弟子にはレウキッポス⁸⁾、レウキッポスの弟子にはデモクリトス、デモクリトスの弟子にはプロタゴラス⁹⁾とネッサス¹⁰⁾がいた。またネッサスの弟子にはメトロドロス、メトロドロスの弟子にはディオゲネス¹¹⁾、ディオゲネスの弟子にはアナクサルコスがいた。そしてピュロンは、このアナクサルコスの弟子となったのであり、このピュロンから、懐疑派と呼ばれる人たちの流派

が成立することになった。この懐疑派自身は、把握されうるものは、感覚のうちにも理性（言論）のうちにもまったくない、と規定し、あらゆる事柄において判断を保留したのであるが、かれらとは反対の見解に立つ人たちが、かれらをどのようにして論駁したかということは、先に示した著作¹²⁾から学ぶことができる。その著作では次のように語られている。（〔三九〕に続く）

〔三七〕Clemens Alex.¹⁾ *Stromata*, I 14.64.2 4 (Caizzi 25A)

エレア主義の創始者は、コロポンのクセノパネスであった。・・・（中略）・・・その後、パルメニデスがクセノパネスの弟子になり、ゼノンがパルメニデスの弟子になり、そして次にはレウキッポス、さらにデモクリトスへと続く。そして、デモクリトスの弟子になったのは、アブデラのプロタゴラスとキオスのメトロドロスであり、またメトロドロスの弟子になったのは、スミュルナのディオゲネスであり、そしてディオゲネスの弟子にはアナクサルコス、アナクサルコスの弟子にはピュロン、ピュロンの弟子にはナウシパネスがなった。またいく人かの人が語っているところでは、ナウシパネスの弟子としてはエピクロスがいた。

〔三八〕[Galenus] *Historia philosopha*, 3 (Diels, DG, p.601; Caizzi 25C)

（欠文に続いて）この学派 — それは多くの人々には、ドグマティスト的（ドグマティークー）というよりは、行き詰まり主義（アポレーティークー）な学派だと思われるが — を創始したのは、コロポンのクセノパネスであると言われている。またクセノパネスの後で、パルメニデスもかれの企図に賛成し、比較的不明瞭な物事の領域には足を踏み入れなかったと思われる¹⁾。またエレアのゼノンは、争論的（エリスティークー）哲学の創設者となった人として挙げられる。そして、この人の弟子であるアブデラのレウキッポスが、諸々の原子の発見に最初に思いいたった人である。デモクリトスは、このレウキッポスからドグマを継承し、それを一層確固なものとした。またプロタゴラスは、デモクリトスの信奉者であり、哲学的な諸技術の構築者でもあった。* * * ²⁾ またアブデラのアナクサルコスは、その人が行なった諸々の議論をまねて、かれ自身懐疑哲学の・・・であり³⁾、ピュロンにとってその導き手となった。

〔三九〕Aristocles apud Eus., *Praep. ev.*, 14.18.1 4

(Heiland fr.6; Caizzi 53の前半; Long & Sedley 1F)

ピュロンの徒である懐疑派、あるいは判断保留派と呼ばれ、何ものも把握できないと表明した人たちに対して。

（1）何よりもまず最初に、われわれ自身の認識について考察しなければならない。というのも、もしもわれわれ自身¹⁾自然本来的に何も認識できないということであれば、もはや他の諸々の物事について考察する必要はまったくなくなるからである。（2）ところで、古の人たちのうちにも、まさにこのとおりの発言をした人たちは何人かいて、そ

の人たちに対しては、アリストテレス²⁾が反論を行なった。エリスのピュロンも、そうした発言をすることで力を誇示した人の一人である。しかし、かれは自分では何も書き残さず、かれの弟子であるティモンが、幸福になろうとする者は次の三つの事柄に目を向けねばならないと言っている³⁾。第一に、諸々の物事の自然のあり方はいかなるものであるか。第二に、われわれはそれらに対していかなる態度をとらねばならないか。最後に、しかるべき態度をとる人たちには何が結果してくるのか。(3)ティモンが語るころによると、ピュロンは次のように表明する。

— 諸々の物事は、等しく、無差別(adiaphora)で、不安定(astathmêta)で⁴⁾、判定不可能(anepikrita)⁵⁾である。したがって、われわれの諸感覚と、われわれが抱く諸々の思いなしのいずれも、真実を告げるものでも、虚偽を告げるものでもない。それゆえ、われわれは、それらのものを信用してもならず、むしろ無判断(adoxastos)、無傾向(aklinês)、無動揺(akradantos)でいて、それぞれ一つ一つのものについては、あらぬよりいっそう多くある、ということはない、あるいは、ありかつあらぬ、あるいは、あることもあらぬこともない⁶⁾、という言い方をしなければならない。

(4)ティモンは、そのような態度をとる人たちに結果として訪れるのは、第1に無主張(aphasia)⁷⁾であり、ついで無動揺(平静さ, ataraxia)であろうと言い、アイネシデモスは、快樂であろうと言っている⁸⁾。

Ibidem, 14.18.7 (Heiland fr.6; Caizzi 53後半)

さらに、もしもすべてが等しく、無差別であって、それゆえに、いかなる思いなしももってはならないとするならば、次のことも無差別であることになるだろう。つまりわたしの言うのは、差別があるか、無差別であるかということ、また思いなしをもつか、もたないか、ということである。というのも、いったいどうして、何々であらぬよりも、よりいっそう多く何々である、ということになるのか。あるいは、ティモンが言っているように、「何ゆえに然りなのか」、「何ゆえに否なのか」、また「何ゆえに」そのものが、何ゆえなのか⁹⁾。

[四〇] DL 9.76 (Caizzi 54, Long & Sedley 1G)

懐疑派は、「いっそう多くはない」という発言そのものも否認する。というのも、摂理が存在しないより、よりいっそう多く存在することはない、というのと同じ仕方で、「いっそう多くはない」も、そのとおりでないより、よりいっそう多くそのとおりであることはないからである。したがってその発言は、ティモンも『ピュトン』の中で言うように「いっさい何も規定しないで、無同意である」¹⁾ということの意味している。

[四一] Aulus Gellius¹⁾, XI 5.1 5 (Barigazzi fr.26 ; Caizzi 56)

(1)われわれがピュロン主義哲学者と呼ぶ人たちは、ギリシア語の名前では「スケプティコイ（懐疑主義者）」と呼ばれている。(2)その意味は「探求者」「考察者」といったところである²⁾。(3)というのも、かれらは何ごととも決定せず、何ごととも確定することなく、ぎゃくに、決定し、確定することが可能なものは、あらゆる物事のうちにいったい何があるのか、つねに探求し考察するのである。(4)それにまた、自分たちは何ものも明らかに見ることはないし、何ものも明らかに聞くことはなく、むしろ見たり聞いたりしているような情態を被り、作用を受けていると考える。しかし、そうした情態を、かれら自らのうちにもたらしものがそれ自体いかなるものであり、どのようなあり方をしているのか、ということについては疑いを抱き、歩みを止める。またかれらは次のように言う — あらゆる物事に関して、真なるものの徴証と偽なるものの徴証とは混ざり合い、混乱し合っているために、確信と真理はどうにも把捉しがたく、それゆえ、性急なわけではなく、判断に飛びつくこともない者はだれでも、この哲学の創始者のピュロンが口にしていただされる言葉「これが、かのようなあり方をしているとか、いずれのあり方もしていない、というよりも、よりいっそう多くこのようなあり方をしている、ということはない」³⁾という言い方をしなければならない。というのも、かれらはいかなる物事についても、それを示す証拠とそれがもつ純粹の諸属性とが知られ、認識されうることを否定し、ほかならぬこのことを、多くの方式を用いて教え、明らかに示そうと努めるからである。(5)この主題に関しては、ファウオリヌス⁴⁾もまた、きわめて緻密で、明敏な十巻の書物を著し、それを『ピュロン主義の諸方式』⁵⁾と題した。

[四二] Aristocles apud Eus., *Praep. ev.*, 14.18.6 (Heiland fr.6; Caizzi 46)

さらに、もしもわれわれが、かれらに譲歩して、すべてが等しく無差別であることを認めた場合には、明らかに、かれら自身、多くの人たちと差別はない、ということになるであろう。しかし、もしそうだとすると、かれらの知恵はいったい何なのであろうか。またどうして、ティモンは、他の人たちすべてのことを悪く言いながら、ピュロンのことだけを賛美するのであろうか。

[四三] Aristocles apud Eus., *Praep. ev.*, 14.18.14-15 (Heiland fr.6; Caizzi 52)

(14)実際ティモンが、『ピュトン』の中で長々と話を繰り広げて物語っているのは、まさしくそうしたことなのである。つまりかれは、ピュトの地¹⁾に向かって歩みを進めるピュロンに、アンピアラオス²⁾の神殿の傍らで出会った次第と、問答を交わした内容を物語っている。だが、それらの事柄を執筆しているティモンの傍らに、だれかが立って、次のように尋ねたとしたら、その質問は理にかなったものではないだろうか。「惨めな人よ、どうしてきみは、それらのことを執筆し、きみが知っていないことを物語って、自らに煩いを与えるのか。というのも、きみがかれに出会うことはなかった、というより、よりいっそう多く出会った、というのは、どういうことなのか？³⁾ また、きみが問答を交わさなかった、というより、よりいっそう多く問答を交わした、というの

は、どういうことなのか？」

(15)またかの驚くべきピュロンも、ピュティア競技を見物しようとして自分が何ゆえに歩いているのかを、その時⁴¹⁾、はたして知っていたのだろうか。それともかれは、気の狂った人のように道を彷徨っていたのであろうか。また、人間たちとその無知とを非難の対象にしはじめるときにも、かれは真なることを口にしていない、とわれわれは言ったものであろうか、それとも真なることは口にしていない、と言ったものであろうか。またティモンは、何らかの情態を被っており、語られた諸々の議論に承認を与えていると言うべきであらうか、それとも、それらの議論に心を留めてはいない、と言うべきであらうか。というのも、もしもかれが説得されていなかったとするならば、どうして舞踏家を止め、哲学者になったのであろうか、また、どうして終生、ピュロンのことを驚嘆し続けたのであろうか。他方、かれの議論を承認していたのであれば、自分は哲学をしておきながら、われわれにはそれを禁じるのだから、おかしい奴、ということになるであらう。

[四四] Aristocles apud Eus., Praep. ev., 14.18.16-17 (Heiland fr.6; Caizzi 57)

(16)まただれにせよ、ただただ驚くしかないであらう — ティモンの『シロイ』と、あらゆる人間に対する誹謗と、アイネシデモスの長々とした『概論』¹⁾と、そうした言葉の群れは、かれらにとっていったいどんな意味をもつのか、と。というのも、もしもかれらが、われわれをより善き者にしようと思ってそれらを記しており、それゆえ、あらゆる人を論駁しなければならぬと考えるその目的が、われわれが馬鹿話にうつつを抜かさないように、ということであるとすれば、かれらが願っているのは、明らかに、われわれが真理を知ること、そして、諸々の物事はピュロンが主張するとおりのものであると、われわれが想定すること、であることになる。したがって、もしもわれわれがかれらの説得を受け入れるならば、確かにわれわれは、より悪しき者であることを止め、より善き者になるであらうが、しかしそれは、われわれが、より有益な物事について判断を下し、より善く語ってくれる人たちを受け入れたから、なのである。(17)してみると、どうして諸々の物事が、等しく、無差別であり、判定不可能であることがありえようか。またどうして、無承認、無判断の態度をわれわれはとりえようか。

他方、かれらの議論に何の益もないのであれば、どうしてかれらはわれわれを²⁾煩わせるのであろうか。あるいは、何ゆえにティモンは「ピュロンに対しては、他のいかなる死すべき者も争いえないであらう」³⁾と言うのであろうか。というのも、その場合にはだれにせよ、愚かさの点で抜きん出ていると思われるかのコロイボスとか、メレティデスのことで驚嘆するよりも、よりいっそう多く、ピュロンのことで驚嘆することはないであらうから⁴⁾。

[四五] Aristocles apud Eus., Praep. ev., 14.18.18-19 (Heiland fr.6; Caizzi 58)

(18)さらにまた、次のことも心に留めなければならない。ああした輩は、どんな市民になることができるというのか。どんな裁判官に、どんな忠告者に、どんな友人に、あ

るいは一言で言って、どんな人間になりうるのでしょうか。あるいはまた、美しい（立派な）ことも、醜いことも、正しいことも、不正なことも、真実のところは何もない、と考える者は、悪行であれば、何であれやってみようと思うのではないか。というのも、法律とか法律が下す罰を、そうした者が恐れるということさえ、だれにも断言はできないであろう。かれら自らが語っているように、無情態(*apathês*)、無動揺(*atarachos*)であるとしたら、どうしてかれらが、法律や罰を恐れることがあろうか。(19)少なくとも、かのティモンは、まさにピュロンについてそんな風に言っているのである¹⁾。

しかし、このわたしが目にしたのは、何という謙遜な方²⁾、
あらゆるものの支配から何と自由な³⁾人。名なき者も、名ある者すべて含めて⁴⁾、
死すべき人間の軽き種族が、
種々被った情態やら、思いなしやら、気まぐれなる立法によって、
そこそこで重くせられて屈服せる、あらゆるものの支配から免れて。

〔四六〕セクストス『概要』第1巻223 225節

(223)また、たとえプラトン¹⁾が、かれらの言うところの練習に携わっている場合に、何ごとかを懷疑主義流のやり方で口にしたとしても、そのことによってかれが懷疑主義者である、ということにはならないであろう。なぜなら、ただ一つの物事についてでもドグマを立てたり、あるいは一般的に、信憑性と非信憑性という点で、ある表象を別の表象に優先させたり、あるいは何らかの不明瞭な物事について意見を表明をしたりする人は、ドグマティスト的性格をもつことになるからである。

この点についてはティモンもまた、クセノパネスについて語っていることを通して明らかにしている。(224)すなわちティモンは、多くの箇所でもクセノパネスを称え、諷刺詩『シロイ』をかれに献上さえしているのであるが、しかしまた、かれに次のような嘆きの言葉を語らせているのである。

ああこのわたしも、賢い知性を分けもって、
どちらの側にも目を配るべきであったのに。だがわたしは欺瞞の道に惑わされた。
なお未だ古い時代の人間で、あらゆる考究への
配慮が欠けていたのだ。なぜなら、わたしの知性をいずこに向けても、
すべてのものは解体して、同じ一つのものになったのである。
永遠に存在するすべてのものは、
いたるところで同質の一なる自然へと引き戻されて、静止した²⁾。

事実、このゆえにティモンは、クセノパネスを半謙遜家(*hupathupos*)と呼び、完全な謙遜家(*athupos*)とは呼ばない。すなわち、かれは次のように言っている。

クセノパネス、半謙遜家にして、ホメロスの欺瞞の嘲笑者。
人間とかけはなれた神、あらゆる方向に均等で、
不動、無傷、知性よりもさらに知性的な神を作ったとすれば³⁾。

つまり、かれがクセノパネスを「半謙遜家」と呼んだのは、「ある点では謙遜家」という意味であり、また「ホメロスの欺瞞の嘲笑者」と呼んだのは、ホメロス作品中の欺瞞を嘲ったからである。(225)クセノパネスは、他の人間たちの先取的認識に反して、すべては一なるものであり、また、神はあらゆるものと一つに結びついており、球形で、いかなる情態もこうむることなく、不変で、理性的であるというドグマを立てた。したがってまた、クセノパネスがわれわれと異なることを示すのは、容易なことなのである。

[四七] Aristocles apud Eus., Praep. ev., 14.18.27 (Heiland fr.6; Caizzi 23)

ところで、かれの弟子になった人たちがだれであって、またかれ自身だれの弟子であったか、ということを読んでおくのは、当を得たことである。ところで、ピュロンは、アナクサルコスなる人の弟子であったが、最初は画家であり、その方面ではうまく行かなかった。その後、デモクリトスの書物にたまたま出会ったが、そこには何も役に立つことを見出せず、自分でも役に立つことを執筆することなく、すべての者を——神々も人間もみな——、悪しざまに語ったのである。さらにその後、かの思い上がりを身にまとい、自らは思い上がりなき謙遜家と称したのであるが、かれは、何も書き物にして残すことはなかった。

[四八] Aristocles apud Eus., Praep. ev., 14.18.28 30

(Heiland fr.6; Caizzi 48Aを含む)

(28)かれの弟子になったのは、プレイウスのティモンであった。この人は最初は諸々の劇場でコロスの一員として踊っていたが、後にピュロンに出会い、小うるさく下品なパロディを著作中で記し、かつて哲学に携わった人たちをだれもかれも中傷した。というのも、『シロイ』を執筆して、

惨めな人間たちよ、悪しき恥¹⁾、単なる胃袋よ。

このような争いと、このような呻きとから汝らは作られているのだ²⁾。

とか

人間たちよ、空しき思いで満たされた革袋よ³⁾

と語ったのはこの人だったのである。

(29)しかし、かれらには注意を払う人はまったくだれもおらず、あたかもかれらが初めから生まれもしなかったかのようにであったが、ところがつい最近になって、エジプト

のアレクサンドレイアで、アイネシデモスとかいう男が、この馬鹿話にもう一度火を灯そうとし始めたのである。この道を進んだ者たちの中で、最も強力だと思われた人たちは、だいたい以上の人たちであった。

[四九] Theodoretus¹⁾, Graecarum affectionum curatio II.20 (Caizzi 48B)

ピュロンの友であったプレイウスのティモンも、哲学者たちを『シロイ』に登場させた。非常に多くある中から、ごく僅かだけここに引用してみよう。

惨めな人間たちよ、悪しき恥、単なる胃袋よ。

このような争いと、このような憶測とで汝らは満ちているのだ。

人間たちよ、空しき思いで満たされた革袋よ

[五〇] Eusebius, Praeparatio evangelica, 14.18.31 (Caizzi 26B)

以上が、ピュロンにならって哲学をしたとされる人たちに対する反論である。受動的にこうむる諸々の情態だけが把握可能であると主張し、キュレネのアリスティッポス¹⁾流の哲学を行なった人たちに対する反論も、これと同じようなものとなるであろう。

[五一] Eusebius, Praeparatio evangelica, 14.2.4 6 (Caizzi 26Aを含む)

(4)この体操競技のわれわれの競技場には、すでにわたしが示した人たちだけでなく、あらゆる真理を脱ぎ捨てて裸になり、ドグマティスト哲学者すべてに向かって、武具を取り上げ、戦いを挑んだ人たちも参集することであろうし — わたしが言っているのは、人間たちの間では把握可能なものは何もないと表明した、ピュロン一派のことである — 、アリスティッポスにならって、受動的にこうむる諸々の情態のみが把握可能であると言った人たちも、さらにはまた、メトロドロスやプロタゴラスに従って、身体に属する諸感覚だけを信用しなければならない、と主張した人たちも、集まってくるであろう。(5)またこの人たちと一緒に、クセノパネスとパルメニデスの一派、つまりかれらと対峙して陣を敷き、諸々の感覚を否認する人たちも、その服を脱がせて、われわれは競技に参加させるであろう。(6)さらにわれわれは、快楽の同盟者たちも見遇うことはしないで、先述の人たちとともに、快楽の同盟者たちの指導者、エピクロスも競技に登録するであろう。そして、一人も漏らすことなく、以上のものたちすべての反駁を、われわれは、かれら自らが用いる武器を手段として行なうであろう。

[五二] Eusebius, Praeparatio evangelica, 15.1.10 (Caizzi 26C)

先の記述において、明らかに、ある場合にはプラトン哲学は、ヘブライ人の言論と一致していたが、別の場合にはそれと隔たっていた。またその記述の中で、プラトン哲学は、自らの教えとも反目するということで論駁されたし、別の人たち — 自然学者と呼ばれた哲学者たちや、プラトンの流れを汲む人たち、さらにはクセノパネスとパルメニデスの一派、ピュロンと判断保留を導入した者たちの一派、またそれに続く他の人たち

すべて、つまり、およそ先の議論がその見解を論駁したところの人たち ― は、その立場が、ヘブライ人のドグマにもプラトンのドグマにも対立するものとして、すなわち真理そのものに対立するものとして、反駁されたのである。しかもかれらは、自分たち自身の武器によって、自らの立場の論駁を招いたのである¹⁾。

V. エピソード (2)

[五三] Hegesander¹⁾ apud Athenaeus²⁾, Deipnosophistae, 10.419CD

(Caizzi 18を含む)

コノンの息子のティモテオス³⁾は、ふだん贅沢な将軍用の御馳走に慣れ親しんでいたが、プラトンが、かれをそこから引き離し、アカデメイアの饗宴に招いて、質素で学芸の伴う食事にあずからせたところ、そのかれが語ったのは、プラトンのところで食事した者は、まさに次の日に調子よく（美しく）なる、ということであった。ヘゲサンドロスはその『覚書』の中で、次の日、プラトンに出会ったティモテオスが、「プラトンよ、あなたがたはその日のためによりむしろ、翌日のために良い食事をしていなさる」と語ったと伝えている。また同著者が記録しているところでは、エリスのピュロンを、かれの知り合いのある人が贅沢で〈はあるが卑俗な〉⁴⁾ 食事に招待したところ、ピュロンは、「あなたがこのような招待を続けるなら、これから先、わたしはあなたの所には行かないつもりだ。わたし自身、あなたが不必要に浪費するのを、不快な思いで見たくないし、あなたの方でも窮屈なことを強いられて、いやな思いをすることのないように。というのも、仕える者たちがそのほとんどを浪費するような多量の御馳走によって、好意を示すよりは⁵⁾、われわれ自身の交わりによってそうする方が、われわれにはよりふさわしいことだからである」と、語ったということである。

[五四] Stobaeus¹⁾, Anthologium, 4.53.28 (Caizzi 19)

ピュロンについて。ピュロンは、生きようが死のうが何も差別はないと語っていた。そこでだれかが「ではあなたはどのようにして死なないのですか」と尋ねたところ、かれの答えは「何も差別がないから」ということであった²⁾。

[五五] セクストス『論駁』第1巻270 273節 (Caizzi 21を含む)

(270)文字に関する技術のうち、詩人たちや散文作家に関わる分野もまた、われわれが実質的に否認したところである。・・・(中略)・・・しかし、その分野に属していて、より一般的な形で語られうる事柄もまた、われわれは考察することにしよう ― とりわけ、文字の技術が与える生活上の利益とか、幸福とかのためにそれが必要であることを確証しようとして、あえてこの分野を頼みとするほどに、文法学者たちはこれに大きな信頼を注いでいるのであるから。実際、かれらは次のように言っている。

詩は、知恵と幸福な生活に到達するための手段を数多く与えてくれるが、しかし、文

字の技術の光がなくては、詩人たちのもとに備えられてあるものも、それがいかなるものであるのか、はっきりと見てとることはできない。それゆえ、文字の技術が必要となってくる。(271)ところで、詩が幸福に到達するための多くの手段を提供してくれる、ということは、最も力あり、性格形成に貢献してくれる哲学が、詩人たちの格言にまでその根を下ろしており、したがって、哲学者たちは、何か勧告的なことを語る際に、自分たちの言葉を裏書きするいわば確認の印鑑として、詩人たちの発言を引用するものである、という事実からして明らかである。こうして徳の勧めを口にする人は、「人は死ぬけれども徳は滅びない」¹⁾と言うわけだし・・・(中略)・・・(272)ところで、他の哲学者たちがこうしたことをするのは、おかしいことではないけれども、しかし、文字の技術を非難する哲学者たち、つまりピュロンとエピクロスも、実はかれら自身、文字の技術の必要性を認めているのである。二人のうち、ピュロンは、いつでもホメロスの詩を読み上げていた、と報告されているが、しかし、もしもホメロスの詩は有益であり、それゆえ文字の技術が必要不可欠であるという認識に、かれが立っていなかったのであれば、そんなことはしなかったであろう。(273)またエピクロスは・・・(274)(中略)・・・しかし、もしもこれらのことや、またそれらと同様のことが必要不可欠であって、そして、文字の技術がなければそれらは認識されることがない、というのであれば、文字の技術もまた、生活上有益なものとなるであろう。・・・(中略)・・・

(277)文字の技術のうちで、詩人や散文作家に関わる部分が、ことのほか有益であることを示すために、以上述べたようなことが、多数語られているが、事例としては今提出されたもので満足することにして、これから、その一つ一つに対して反論を加えていくことにしよう。・・・(中略)・・・(278)まず第1に、・・・(中略)・・・格言や勧めの言葉のように、詩人の作品中に見出せる生活上有益で、必要不可欠であるところの事柄はすべて、詩人たちが明確な形で主張しているものであり、そこでは、文字の技術は必要ないのである。〈他方、〉異国の歴史に関わる事柄や、謎めいた仕方で表現された事柄のように、〈文字の技術を必要とするすべての事柄は〉²⁾、じつは役に立たないものであって、・・・(中略)・・・(279)さらに、格言というのは単なる主張にすぎない・・・(中略)・・・しかし、それが立派に語られた主張であるか否か、という問題について、知性は、主張されたところにそのまま従うことをしないで、証明を必要とするのである。しかるに、ふさわしく語られているか否かの証明は、文字の技術の所轄ではなく、哲学の仕事なのである。かくしてこの点においても、文字の技術は余計なものであって、中身の無いものであることになる。・・・(280)(中略)・・・また、詩人の証言を利用するのは、真正の哲学に携わっている人たちではなく ― というのも、かれらの場合は、議論だけで説得に十分であるから ― 、広場にたむろする多くの群衆を欺く者たちなのである。(281)というのも、詩人たちが相互に矛盾し、何でも好き勝手な歌を歌っていることを示すことは、指導的な哲学者たちも、互いに矛盾する事柄を多数語っている以上、困難なことではないからである。文字の技術を非難する人たちのうち、ピュロンはいつでもホメロスの詩を紐解いていたが、しかしそれは先に挙げた理由によるのではまったくなく、おそらくは楽しみのためであり、喜劇の上演に耳を傾け

るようなものであったであろうし、あるいはたぶん、詩の方法と類型を調べる意味ももっていたことであろう。(282)というのも、かれが、マケドニア王アレクサンドロス³⁾のために詩作にも手を染め、何万枚もの金貨を褒美にもらった、と言われているのである。それに、他にも理由があってもおかしくはないのであり、それについては、すでにわれわれが『ピュロン主義』⁴⁾において詳しく論じたところである。(283)またエピクロスは・・・。

[五六] Plutarchus, *De Alexandri magni fortuna aut virtute*, 331E (Caizzi 22)

知恵を愛し、知恵ある人を他にまさって賛嘆することは、哲学者の魂の特質である。この特質は、他のいかなる王とも比較しようのないほどに、アレクサンドロスに具わっていたものであった。かれがアリストテレスに対していかなる態度をとったか、ということは、すでに述べたところである。また、調和ある¹⁾アナクサルコスを、友人たちのうちでとくに大切にしたということも、エリスのピュロンが最初に拜謁した折りに、この人に何万枚もの金貨を与えたということも・・・(中略)・・・複数の人たちによって報告されている。

VI. 原子論との関係^(*)

[五七] Eusebius, *Praeparatio evangelica*, 14.19.8 10 (Caizzi 24を含む)

(8)さて次にはかれら¹⁾だけでなくまた、反対の道を進んで、身体の諸感覚を全面的に信用しなければならない、と規定した人たちをも、吟味しなければならない。そのうちには、キオスのメトロドロスやアブデラのプロタゴラスも属している²⁾。(9)語られているところでは、メトロドロスは、デモクリトスの弟子であって、原理は充実体と空虚である — これら二つのうち、前者が「有るもの」で、後者が「有らぬもの」 — と、表明していた。また少なくとも、かれは『自然について』を著し、その導入部で次のように語っていた。「われわれのうち、だれ一人として何も知らない — われわれが知っているか、知っていないかというこのことさえも知らない。」³⁾ この導入部が、かれの後で生まれたピュロンに悪いきっかけを与えることになった。だがじつは、メトロドロスはもっと先では、あらゆる物事は人がそうみなすとおりのものであると、語っているのである。(10)他方、プロタゴラスは、伝えられるところでは無神論者と呼ばれていた。実際まさにこの人も、『神々について』を執筆した際、その導入部で次のように言っている。「神々について、存在するということも、姿形がいかなるものであるかということも、わたしは知らない。というのも、わたしがそれらの一つ一つを知ろうとしても、妨げとなる多くの要因があるのだから。」アテナイ人は、罰としてプロタゴラスを国外追放に処し、かれの著作を広場の真ん中で公に燃やした。ところで、これらの人たちは、感覚だけを信用しなければならない、と主張していたのであるから、今からわれわれは、かれらに対してなされた反論を見ていくことにしよう⁴⁾。

(〔五七〕 続き)

セクストス『論駁』第7巻87 88節 (Long & Sedley 1D)

(87)わたしが先に述べたように⁵⁾、実に多くの人が、メトロドロスと、アナクサルコスと、モニモス⁶⁾とは規準を否認した、と語っていた。(88)ただし、メトロドロスについては、「われわれは何も知らない — われわれが何も知らないという、まさにそのこともまた、われわれは知らない」⁶⁾とかれが主張していたという理由によるし、また、アナクサルコスとモニモスについては、かれらが、諸々の存在する物事を書き割りの絵にたとえ、それらは夢や狂気の中で出会われる物事に似ている、と想定していたからであった。

〔五八〕 [Galenus] *Historia philosopha*, 7 (peri haireseôn)

(Diels, DG, pp. 603-604; Caizzi 27を含む)

ある人たちの想定によると、「ハイレシス」¹⁾は三つの意味で用いられている。つまり、一般的な意味と、固有の意味と、最も固有の意味とである。一般的な意味においては、実生活に関わる何らかの物事を承認することがハイレシスであり、固有の意味では技術における承認がそれであり、最も固有の意味では、哲学における承認がそれである。また概念的には、相互的に調和する多くのドグマ、あるいは一つの目的に関係づけられた多くのドグマへの傾倒が、ハイレシス(学派)である²⁾。諸学派の区別を行なった人たちは、最上位の類のハイレシス(学派)には、四つのものがあると考えている。一つは、ドグマティスト学派 — 多くの事柄を承認し、確言する学派 — 、第二は、懐疑学派 — あらゆる物事を探求する学派 — である。さらにこれに加えて、第三の学派として争論学派 — 諸々の詭弁を通して、探求での勝ちを収めようと躍起になる学派 — があると、かれらは考える。かれらが詭弁とみなすのは、例えば「きみは、わたしがまさにそれであるところのものではない。しかるに、わたしは人間である。したがって、きみは人間ではない」とか、そうした若者好みの争論的な議論のことである。また、いくつかのドグマは承認するが、しかし多くの問題については行き詰まりの態度をとっており、あらゆる事柄を承認的に論ずるわけではないところの学派を、かれらは混合学派と呼んだ。ドグマティストは***、エピクロスの追随***である³⁾。懐疑派は、エレアのゼノンと、アブデラのアナクサルコスと、行き詰まり学派を非常に厳密に整備したと考えられるピュロンとである。また、かれらが争論派と呼んでいるのは、エウクレイデスと、メネデモスと、クレイノマコスである。そしてさらに、混合学派の道を進んだ人としては、クセノパネスがいるし — かれは、他のすべてについては行き詰まりの態度をとっていたが、あらゆるものは一なるものであり、限定され、理性的で、不変なる神として存立している、という一点においてはドグマをもっていた — 、またデモクリトスもいる。このデモクリトスも同様に、ほかのことについては何も表明しなかったが、ただひとつ、諸原子と、空虚と、無限なるものについては、ドグマを残したのである。

[五九] Eusebius, *Praeparatio evangelica*, 19.20.14 (Caizzi 29)

ある人たちの言うところでは、エピクロスはだれの弟子にもならず、古えの人たちの著作に出会って、そこから学んだということであるが、しかし別の人たちが述べているところでは、まずクセノクラテス¹⁾に習い、ついでピュロンの仲間であったナウシパネスから教わった、ということである。

[六〇] DL 10.8 (Caizzi 30)

エピクロスはさらに、プロタゴラスを「荷持」¹⁾、「デモクリトスの書記」と呼び、村の文字教師だ²⁾と言った。またヘラクレイトスは「引っ掻き回し屋」³⁾、デモクリトスは「レロクリトス」⁴⁾、アンティドロスは「サンニドロス」⁵⁾と呼び、さらに犬儒派⁶⁾は「ギリシアの敵」、問答派は「大壊滅屋」、ピュロンは「無学問」「無教養」と呼んだ。

[六一] セクストス『論駁』第1巻1-2節 (Caizzi 31を含む)

(1) 諸々の学者に対する反論は、エピクロスの徒も、ピュロン主義者たちも共通に行っていたと思われるが、しかし、かれらが反論を行なうもとにある状態は、同じものではなかった。エピクロスの徒は、学問は知恵の完成にまったく貢献しないと考えたか、あるいは、いく人かの人たちが推測しているように、反論が自分たちの無教養を隠す覆いになる、とみなして反論を行なった(というのも、エピクロスは、多くの領域で学問無き人として論駁されているし、また一般的な交わりにおいても、生粋のギリシア語を使用していなかったのである)。(2) またおそらくは、プラトンの徒や、アリストテレスの徒や、その他同様の博学者たちに対して、悪意を抱いていたせいもあるであろう。ピュロンの弟子であったナウシパネスへの敵意のため、ということもありそうな線である。というのも、ナウシパネスは多くの若者を引き付け、諸々の学問、とくに弁論術に真剣なる配慮を払っていたからである。(3) かくして、エピクロスは、ナウシパネスの弟子であったのだが、自分で学習し、自分で自然に哲学者として成長したかのように思われようとして、あらゆる仕方で弟子であった事実を否定し、師の名声を消してしまおうと努力し、そして師がそこにおいて重んじられていた諸学問に対する、強力な批判者となったのである。

VII. アルケシラオスとの関係

[六二] DL 4.33 (Caizzi 32)

ある人たちの伝えるところによれば、アルケシラオス¹⁾はピュロンをも称賛していたし、問答法にも習熟し、さらにエレクトリア学派²⁾の議論にも手をつけていた。そこからして、アリストン³⁾はかれについて次のように語っていた。

前部はプラトン、後部はピュロン、胴体はディオドロス⁴⁾。

ティモンもまた、かれについて次のように言っている。

ほら、胸の下に鉛のメネデモスを伴って、かれは走るであろう。

それとも肉づきのよいピュロンか、あるいはディオドロスを伴って⁵⁾。

またティモンは少しおいて、かれに次のように言わせている。

わたしは泳いで行こう — ピュロンの許へ、またひねくれたディオドロスの許へ⁶⁾。

[六三] Numenius apud Eus., Praep. ev., 14.5.11 14

(Des Places fr. 25; Caizzi 33)

(11)アルケシラオスとゼノン¹⁾は、ポレモン²⁾の弟子となった。・・・(中略)・・・わたしは、ゼノンがまず、クセノクラテスのところへ通い、次いでポレモンの許へ通って、さらにクラテス³⁾のところで犬儒派の生活をした、ということを述べたことを記憶している。しかしまた、スティルポンや、ヘラクレイトスの議論ともかれが親しむにいたったと考えられたい。(12)というのも、アルケシラオスとゼノンとは、一緒にポレモンのところに通った仲間として功名を競い合い、相互の戦いにおける援軍として、ゼノンは、ヘラクレイトスと、スティルポンと、さらにクラテスを選び、この内、スティルポンを通じて戦闘的になり、ヘラクレイトスを通じて厳しくなり、クラテスを通じて犬儒家となったのである。他方、アルケシラオスは、テオプラストス⁴⁾と、プラトン派のクラントル⁵⁾と、ディオドロスを味方にし、さらにそれについて、ピュロンを援軍としたが、これらのうち、クラントルを通じて説得力ある者となり、ディオドロスを通じてソフィストとなり、ピュロンを通じて多種多様な者、向こうみずなる者、そして無なる者になったのである。(13)そしてそれゆえ⁶⁾かれについては、次のように、何かパロディ形式で、横柄な態度の詩が読まれていた。

前部はプラトン、後部はピュロン、胴体はディオドロス。

またティモンの伝えるところでは、かれは、メネデモスの助けも得、争論術を獲得して備えるにいたった — 少なくとも、ティモンはアルケシラオスについて、次のように述べているのである。

ほら、胸の下に鉛のメネデモスを伴って、かれは走るであろう。

それとも肉づきのよいピュロンか、あるいはディオドロスを伴って。

(14)かれはこのように、問答学派のディオドロスの精密な言葉遣いに、ピュロンの推論

と懷疑主義を編み合わせ、また、しゃべり散らした一種のたわ言を、プラトンがもっていた議論の力で見栄えよくして、何か語ってはそれに反論し、こちらからあちらへ、あちらからこちらへ、さらにはどちらからでも行き当たりばったり、次々と転がり回り、自分の言葉は撤回し、どうにも判断をつけにくく、変わりやすく、また同時に大胆極まりなく、高貴なところもあって、かれ自身言っていたところでは、まったく何も知らぬ人だったのである。ところが、どうしたものか次の機会には、知っている人に似た者へと姿を変えるのであるが、それは議論による錯視画法（書き割り、スキアグラピアー）によって、多種多様な者として現われていたせいであった。

[六四] Numenius apud Eus., Praep. ev., 14.6.4 6

(Des Places fr. 25; Caizzi 34を含む)

(4)アルケシラオスは、子供のころ、テオプラストスという穏やかで、愛の道に通じた人に出会ったが、その後、美しく、まだ若者であったところから、アカデメイアのクラントルに寵愛され、この人のところに赴いて行ったが、生来豊かな素質は、競争心によって熱せられ、容易に伸びていった。またかれは、ディオドロスとの交わりを通して、かの巧妙で見境のない説得的な事柄を学び、ピュロンとも交わりをもった（このピュロンは、デモクリトスか、あるいはその当たりから出発した人であった）。かくして、アルケシラオスはここを訓練の場とし¹⁾、名前を別とすれば、あらゆる物事を否認するピュロンに忠実だったのである²⁾。

(5)実際、懷疑主義者であったムナセアス³⁾と、ピロメロス⁴⁾と、ティモンとは、アルケシラオスを、自分たちがそうであるような「懷疑主義者」という名で呼んでいたのであるが、それはアルケシラオス自身、真なるものと、偽なるものと、説得的なるものを否認していたためであった。

(6)こうしてかれは、そのピュロンの議論からするとピュロン主義者と呼ばれてしかるべきではあったが、しかし、寵愛してくれた人に対する恥ずかしさの気持ちから、アカデメイア派という呼称で呼ばれつづけたのである。したがってかれは、名前を別とするなら、実質はピュロン主義者であり、また、呼称は「アカデメイア派」でも、アカデメイア派ではなかったのである。というのわたしには、クニドスのディオクレス⁵⁾が、『ディアトリバイ』と題された書物の中で主張しているところのことは、信じられないのである。つまり、アルケシラオスが、ドグマ的なものは何も口にせず、イカの墨のように、判断保留を自らの前に煙幕として張りめぐらす現われを見せていたのは、哲学者たちに攻撃をしかけ、論駁のためにあらゆる手段に訴えるテオドロス⁶⁾一派や、ソフィストのピオンを恐れたためであり、やっかいなことに巻き込まれないよう、前もって用心をしたためである、と、ディオクレスは言っているのであるが、しかしそれは、わたしには信じられないのである。

[六五] セクストス『概要』第1巻232-234節 (Caizzi 35)

(232)これに対して、中期アカデメイア¹⁾の代表者であり、創始者であるとわれわれ

が先に述べたアルケシラオスは、たしかにピュロン派の議論との共通点をもっており、かれの主義（生き方）とわれわれの主義（生き方）とは、ほとんど同一のものであるように、わたしには思われる。というのも、何かの存立あるいは非存立について、かれが表明を行なっているところは見出せないし、また信憑性と非信憑性という点で何かを別なものより優先させるということもなく、むしろ、あらゆる物事について、かれは判断を保留しているのである。またかれは、判断保留が目的であると言っているが、この判断保留に続いて無動揺（平静さ）がやってくると、われわれは語っていたのである。（233）かれはまた、個々の判断保留は善いものであり、個々の承認は悪いものである、と言っている。

ただしこれに対しては、われわれの方はわれわれへの現われに従ってそうした発言をしているだけで、確言するのではないけれども、アルケシラオスの方は、自然本来のあり方としてそう語っており、だからまた、判断保留は善いものであり、承認は悪いものである、とかれは言っているのだ、と言う人がいるかもしれない。

（234）また、かれについて語られている事柄も信用すべきであるとすれば、かれは一見したところピュロン主義者のように見えただけでも、真相はドグマティストであった、と言われている。さらに、弟子たちがプラトンのドグマを受け入れるだけの素質をもっているかどうかを調べるために、行き詰まりの技術を用いてかれらを試したので、かれは行き詰まり主義者であると思われていたが、しかし弟子たちのうちの、少なくとも素質ある者には、プラトンの教えを伝えていた、ということである。こういうわけでアリストンも、かれについて、

前部はプラトン、後部はピュロン、胴体はディオドロス

と言っていたのである。アリストンがこう語ったのは、アルケシラオスがディオドロス流の問答法を用いながら、しかし正真正銘のプラトン主義者であったからである。

〔六六〕 Suda s.v. Θεόδωρος (Caizzi 36)

呼び名は「アテオス（無神論者）」。キティオンのゼノンの講義を聴き、ブリュソンと、判断保留主義者のピュロンからも学んだ。無差別説を説いて、自分の学派を開いた。その学派は、テオドロス学派と呼ばれた。

VIII. ピュロンの弟子たち

〔六七〕 DL 9.68-69 (Caizzi 37)

（〔三五〕の続き）（68）かれには他にも弟子はいたが、名前のよく知られた弟子たちもあり、その一人がエウリュロコス¹⁾であった。この人については、次の点が欠けたる

点として伝えられている — ある時かれは、激怒のあまり、肉がついたままの串を振りあげて、広場まで料理人を追いかけて行った、ということである。(69)またエリスにおいて議論した際には、探求を止めない者どもにうんざりして、着物を脱ぎ捨て、アルペイオス河を泳いで渡った。実際かれは、ティモンも語っているように²⁾、ソフィストたちに対し、この上なく敵対的であった。(〔六八〕に続く)

〔六八〕 DL 9.69 (Caizzi 38)

(〔六七〕の続き) 他方、ピロンは、ほとんどいつも自分一人で問答をしていた。それゆえティモンは、かれについても次のように言っている。

あるいは、人間たちから離れ、一人遊び、一人お喋り、
思わくや争いには拘らわない人、ピロン¹⁾。(〔六九〕に続く)

〔六九〕 DL 9.69 (Caizzi 39Aの一部)

(〔六八〕の続き) さらに以上挙げた人たちに加えて、ピュロンに習った人としてはアブデラのヘカタイオス¹⁾や、『シロイ』を著したプレイウスのティモンがいた。このティモンのことは、後から²⁾述べることにしよう。さらにエピクロスの師として、いく人かの人が指摘しているテオスのナウシパネスも、ピュロンから教えを受けた人である。(〔七〇〕に続く)

IX. ピュロンとピュロン主義

〔七〇〕 DL 9.69 70 (Caizzi 39Aの一部)

(〔六九〕の続き) (69)これらの人たちはすべて、かれらの師に因んで「ピュロン主義者」と呼ばれたし、またかれらのドグマとでも言えるもののゆえに、「行き詰まり主義者(アポレーティコイ)」、「懷疑主義者(スケプティコイ、考察者)」、さらには「判断保留主義者(エペクティコイ)」「探求主義者(ゼーテーティコイ)」と呼ばれていた。

(70)かれらの哲学が「探求主義」と呼ばれたのは、真実の探求につねに邁進していたからであるし、「懷疑(考察)主義」と呼ばれたのは、いつでも考察し、けっして発見に至ることがなかったからであり、「判断保留主義」と呼ばれたのは、探求の後にかれらがこうむる情態のためであった — わたしの言う「情態」とは、判断保留のことである。さらに「行き詰まり主義」とも呼ばれたが、それは、ドグマティストたちが行き詰まり、かれら自身も行き詰まったせいである。またかれらがピュロン主義者と呼ばれたのは、ピュロンにちなんでのことである¹⁾。(〔七一〕に続く)

[七一] Suda s. v. Πυρρωνεύεσι (Caizzi 39B)

ピュロンの徒たる学派は、その師に因んでそのように呼ばれていたし、また「行き詰まり主義者（アポレーティコイ）」、「懐疑主義者（スケプティコイ、考察者）」、さらには「判断保留主義者（エペクティコイ）」「探求主義者（ゼーテーティコイ）」とも呼ばれていた。「探求主義者」と呼ばれたのは、真実の探求につねに邁進していたからであるし、「懐疑（考察）主義者」と呼ばれたのは、いつでも考察し、けっして発見に至ることがなかったからであり、「判断保留主義者」と呼ばれたのは、探求の後にかれらがこうむる情態のためであった——わたしの言う「情態」とは、判断保留のことである。さらに「行き詰まり主義者」と呼ばれたが、それは、ドグマティストたちが行き詰まり、かれら自身も行き詰まったからである¹⁾。

[七二] セクストス『概要』第1巻7節 (Caizzi 40)

懐疑的な生き方（懐疑主義）はまた、探求と考察を事とするその活動から、「探求主義（ゼーテーティケー）」とも呼ばれているし、探求の後に考察者に生ずる情態から、「判断保留主義（エペクティケー）」とも呼ばれている。また「行き詰まり主義（アポレーティケー）」とも呼ばれているが、これは、いく人かの人々が主張しているように、何事につけても行き詰まりを見出し、解決を探求するためか、あるいは、承認しようにも、否認しようにも行き場を失ってしまうためである。さらに「ピュロン主義」とも呼ばれているが、これは、ピュロンがかれ以前の誰よりも実質的に、かつ顕著に懐疑（考察）に専心したとわれわれに現われ（思われ）ることに由来するものである。

[七三] Theodos. apud DL 9.70 (Deichgräber fr. 308; Caizzi 41)¹⁾

（[七〇]の続き）しかしテオドシオス²⁾は、『懐疑主義要綱』³⁾の中で、懐疑主義を「ピュロン主義」と呼んではならない⁴⁾と言っている。なぜなら、他人の思考の動きが捉えられないとするならば、ピュロンがいかなる（心の）状態にあったか、われわれは知ることができないであろう。しかるに、それを知らないのであれば、われわれは「ピュロン主義者」とは呼ばれないであろう。それにそもそも、ピュロンが、懐疑主義を最初に発見したわけでもないし、かれはいかなるドグマももっていなかったのである⁵⁾。しかし、だれであれ同じような仕方で生きる人は、「ピュロン主義者」と呼ばれるであろう⁶⁾。

[七四] DL 1.16 (Caizzi 43)

哲学者たちのうち、ある人たちはドグマティストであったが、別の人たちは判断保留主義者であった。ドグマティストというのは、諸々の物事に関して、それらが把握可能だとして意見を表明する人たちのことであり、判断保留主義者というのは、諸々の物事を把握不可能とみなして判断を保留する人たちのことである。また哲学者たちのうちで、ある人たちは、書き物を残したが、別の人たちはまったく何も著さなかった。ある人たちによれば、何も著さなかった人の中には、ソクラテス、スティルポン、ピリッポス¹⁾、

メネデモス、ピュロン、テオドロス、カルネアデス²⁾、ブリュソンがいる。

[七五] DL 9.102 (Caizzi 44)

かれらに共通の生き方(主義)¹⁾の全体像は、現存する著作集から見てとることができる。というのも、ピュロンその人は何も書きのこさなかったが、しかしかれの仲間であるティモン、アイネシデモス²⁾、ヌメニオス、ナウシパネス、その他が書物をのこしたのである。

[七六] セクストス『論駁』第1巻53-54節 (Caizzi 45を含む)¹⁾

ともかく、われわれが初等文法(グランマティケー)を廃棄しようと思っても、自らを反転させる(覆す)ことになしには、それは不可能であろう。というのも、初等文法が役に立たないことを教えようとする反論の試みが有益であるとしても、初等文法なしには、その反論を覚えることもできないし、後の人に伝えることもできないとするならば、初等文法は、有益であることになるからである。しかし、ピュロンの議論の代弁者であるティモンが、次のように言うとき、むしろそれとは反対の考えに立ってかれが発言をしているように、ある人たちには思われるかもしれない。

文字の技術(グランマティケー)

— カドモスのフェニキアの印²⁾を教えられつつある人は、
考察してみることも、調べてみることもないもの³⁾。

しかし、かれらの考えのとおりであるとは思われ(現われ)ない。なぜならば、ティモンの「考察してみることも、調べてみることもない」という言葉は、カドモスのフェニキアの印を教えるための初等文法(グランマティケー)に向けられてはいないからである。というのも、だれであれ初等文法を教えられつつあるとき、それについて考察しないということが、どうしてありえようか。いやむしろ、ティモンが言っているのは、「カドモスのフェニキアの印を教わった人にとっては、その他のいかなる文字の技術も考察してみることはない」ということなのである。

X. ピュロンとティモン

[七七] ¹⁾ Apollonides apud DL 9.109-110 (Caizzi 47を含む)

(109)われわれの同郷人、ニカイアのアポロニデス²⁾は、かれがティベリウス帝³⁾に捧げた『「シロイ」のための覚書』第一巻において、ティモンは、ティマルコス(父)としてプレイウスで生まれた、と記している。かれは若くして両親を失い、コロスの踊り手となったが、後にその職を嫌って、メガラのスティルポンの許に移った。そして、この人の弟子として過ごしたのち、故郷に帰って結婚した。その後、今度はエリスのピュ

ロンのところに妻と一緒に移住し、子供たちができるまでその地で過ごした。子供たちのうち、年上の子はクサントスと名づけ、医術を教え⁴⁾、生活を継ぐ相続人とした⁵⁾。(110)この人は⁶⁾、ソティオン⁷⁾も第11巻で述べているように、名の知られた人であった。さてところで、ティモンは、生活の糧に窮して、ヘレスポントスおよびプロスポンティスに船で渡った。またカルケドンではソフィストとして活動し、次第に受け入れられるようになった。そして一財産をなしたのち、そこからアテナイへと船で渡り、同地で死ぬまで暮らした。ただしその間、短期間ではあったがテバイに移ったこともある。かれは、かれ自身イアンボス調の詩の中で⁸⁾自分の経歴に関して証言をしているように、王アンティゴノス⁹⁾およびプトレマイオス・ピラデルポス¹⁰⁾の知遇を得た。

[七八] Suda s.v. Τίμων, Φιλίσκος (Caizzi 49A)

ティモン、プレイウスの人、かれ自身哲学者であり、ピュロン主義に属していた。『シロイ』と呼ばれる作品、すなわち哲学者たちに向けた風刺、全三巻を著す。

[七九] Suda s.v. Σίλλος (Caizzi 49B)

「シロス」とは、物まね、あるいは侮蔑、悪口、また冷やかしでもある。シロス集（『シロイ』）を執筆したシロス作家、ティモンはプレイウスの人であり、ピュロン主義の哲学者であった。

[八〇] Eusebius, *Theophania syriaca*, 2.47 (Gressmann, p.101; Caizzi 50)

しかし懐疑派は、ピュロンと判断保留を持ち出してきて、あらゆる人を笑い者にした。

[八一] Athenaeus, VIII 337A (Caizzi 65)

ティモンもまた非常に見事に、

あらゆる悪しき物事の内、第一のものは欲求である¹⁾、

と語っていた。

[八二] セクストス『論駁』第11巻162-164節 (Caizzi 66を含む)

(162)したがって、判断保留をする者が「無活動」とか、「矛盾」に追い込まれてしまう、と考える人たちに対しては、侮蔑的に、無視してやらなければならない。(163)かれらは、「無活動」の理由として、実生活はすべて選択と回避において成り立っている以上、何であれ選択することも、回避することもない人は、実質的に生活を否定する者であり、何か植物の状態にとどまっていることになる、という点を挙げている。(164)また「矛盾」の根拠としてかれらが指摘するのは、独裁者に従属し、何か語るのも憚られるようなことを行なうよう強制された人は、命令に従わず、自ら進んで死を選択するか、あるいは、拷問を回避して、命令を実行するかのいずれかであって、かくして、ティ

モンが言っているところの、

かれは無回避で、無選択であるだろう¹⁾、

という態度をもはや採ることはできず、一方を選び、他方を避けることになるだろうが、しかしそれはまさに、これは回避すべきもので、あれは選択すべきものであるということ、確信をもって把握している人の行ないである、という点である。(165)しかし、このように論ずる人たちは、懷疑主義者は哲学的議論に従って生きていくのではなく—— というのも、哲学的議論に基づくかぎりでは、かれは無活動の状態にあるのである——、非哲学的な観察に従って、あるものを選択し、別のものを回避できるということを理解していないのである²⁾。

[八三] Galenus, Subfiguratio emperica, cap. XI

(Deichgräber fr.10b, pp. 82 83; Caizzi 67を含む)

さらに経験主義者¹⁾口数多くもないし、長々と語ることもなく、懷疑主義者ピュロンがそうであったように、わずかの言葉を稀に発するだけであろう。このピュロンは真理を探究したが発見には至らず、あらゆる不明瞭な事柄に関して行き詰まりの態度をとった——つまり、日々の行為においては明瞭な事柄に従い、それ以外のあらゆる物事については行き詰まりの態度をとったのである。実際、懷疑主義者がその生活全般においてとるのと同じような態度で、経験主義者は医術に接する。かれは思い上がることなく、名声に事欠かず、またピュロンがそうであったとティモンが告げているような、虚飾なく、虚栄とは無縁の人である²⁾。しかし、行ないによってかれがその医術の偉大なることを明らかにして見せるときには、人々のかれの医術に対して、ヒッポクラテス³⁾に対して同時代の人たちが抱いたのと同じような驚きを感じることであろう。

[八四] Galenus, Subfiguratio emperica, cap. XI

(Deichgräber fr.10b, pp. 84 85; Caizzi 68を含む)

もちろんメノドトス¹⁾は、その多数の著作の中で何度となく、不明瞭な物事はすべて、ひょっとして真なるものとして存立しているかもしれないが、しかしまた、存立していないかもしれないものとして、取り扱うべきであると主張している。しかし、真理に関係して、アスクレピアデス²⁾を論駁する書物の中では、アスクレピアデスの発言は、それを基礎づける存在をまったく欠いているとして、自分が完全に否認し去ったと確信しているのである。しかし、かれが称賛しているピュロンはそんな人物ではなかった。むしろ静かで、明らかに穏やかで、そして³⁾そうあるのがふさわしいように、何かその必要が起こらないかぎりには口数の少ない人であった。しかし、多くの議論ではなく、むしろ行ないによって名声を勝ちとるところの、本物の経験派の医者にも、そうした口を開く必要は、時として生じてくることがある。

XI. キケロの評価
— ピュロン哲学の終焉 —

[八五] Cicero¹⁾, Academica, 2.42.130 (Caizzi 69A; Long & Sedley 2F)

われわれがこれらの者たち²⁾を見下し、もはや重要ではないと考えるとしても、かの者たちについては、確かにそれほどまでに軽蔑してはならない。すなわち、アリストンは、ゼノンの弟子であったが、その後、徳のほかには善きものではなく、徳と反対のもの以外に悪しきものはないという、ゼノンが言葉によって証明した説を、実際の行ないによって証明した。つまり、ゼノンが中間的な物事の間に価値の違いを認めようとしたにもかかわらず、アリストンの方は、それらの間にもまったく差異はない、とみなしたのである。かれにとって最高の善は、これらの物事の中にあってもどちらの側にも動かされないことであり、それをかれ自身は「無差別 (adiaphoria)」と呼んだ。これに対してピュロンは、知者はそれらの物事を感覚することさえないと語り、それを「無情態 (apatheia)」と呼んだ。

[八六] Cicero, De finibus, 2.11.35 (Caizzi 69M)

というのも、ピュロンとアリストンとヘリロス¹⁾は、すでに打ち捨てられて久しいのである。

Cf. Cicero, De oratore, 3.17.62

それに、哲学者たちの他の種族 — そのほとんどすべてが、自らをソクラテスの徒と称していた — 、すなわち、エレトリア派、ヘリロス派、メガラ派、ピュロン派の種族もあった。しかしかれらは、ずっと前に、かの人たちの力強い議論によって粉碎され、消滅したのである。

[八七] Cicero, De finibus, 2.13.42 3 (Caizzi 69B; Long & Sedley 2Gを含む)

(42)というのも、徳に追加すべきところのものを購入するように迫られている状況において、かれらはまず第一に、最も安価なものを追加しているし、しかも、自然が最初から良しと認めている物事を余すことなくすべて、道徳性と結び付けばよいのに、むしろそれらのいずれか一つだけを付け加えているのである。(43)アリストンとピュロンについては、これらの物事は何の価値もないとかれらには思われ、それゆえかれらは、完全なる健康と瀕死の病気の間にまったく異なるところがない、と言うほどであったから、当然ながらとうの昔に、かれらとは議論のしようがなくなっている。というのも、かれらは一なる徳それだけに、あらゆるものを依存させようとしたあまり、物事を選択を徳とは無縁のものにしてしまい、徳がそこから生まれ、そこに立脚する基盤となるものを徳に提供しない、という羽目に陥ったのであり、その点において、かれらが大事にしようとした徳そのものを放逐してしまったのである。またヘリロスは、あらゆるものを知識に還元し、ある一つの善だけに注目したのだが、しかし、この善は最高善でもな

ければ、それによって生活を導くことのできるような善でもなかった。かくして、ヘリロスその人も、斥けられて久しい。実際、クリュシッポス¹⁾以降、かれに対する反論の試みは、確かになされなかったのである。

[八八] Cicero, *De finibus*, 3.3.10-3.4.12 (Caizzi 69Dを含む)

(10)「・・・道徳的な善以外に何か希求されるべきものがある、とあなたが主張し、それを諸々の善の一つに数えるならば、あなたは道徳的な善そのものを、徳の光を消すように消し去ってしまい、徳を完全に滅ぼしてしまうことになるでしょう。」

(11)わたしはこれに答えて言った、「カトー¹⁾よ、その発言は確かに素晴らしいものではありませんが、しかしあなたは、あなたの立派な言葉が、あらゆるものを同等にしてしまうピュロンやアリストンの考えと共通のものであることに、気づいておられるのでしょうか。わたしは、あなたがかれらについてどのような考えをおもちなのか、お伺いしたいと思います。」

かれは言った、「わたしの考えを知りたいのですか。われわれが公の生活において、善き人、勇気ある人、正義の人、穏和人であるとの噂を聞き、またわれわれ自身、そのような姿を目の当りにしてきた人たち、つまり、いかなる教説の助けがなくても、自然そのものの導きによって、多くの称賛すべきことを成し遂げた人たちは、道徳的な善でなければ、善きものの中に数えず、道徳的な悪以外のものは、悪しきものの中に数えないところの哲学を受け入れるならば話は別であります。そうでなければ、それ以外の何らかの哲学による教育を受けるよりは、自然による教育を受けた方がよりよく教育される、というのがわたしの見解です。もちろん程度の違いはあるのですが、徳を欠いている物事を、何にせよ善きものに数えたり、悪しきものの内に数え上げたりする、他の哲学の体系はすべて、何の助けにもならないし、またわれわれがより善き者となるための手段を確立してはくれない、そればかりか、自然のあり方そのものを歪めてしまう、とわたしは考えるのです。というのも、道徳的な善が唯一の善であるという、このことがしっかりと維持されるか、さもなければ、幸福な生が徳によって達成されることが絶対に証明不可能であるか、そのいずれかなのです。そして、もしも後の方であるとすれば、どうして哲学に関心をもつ必要があるのか、わたしには分からなくなってしまいます。というのも、もしもだれかある人が知者でありながら不幸であることが起こりうるとしたら、あなたの素晴らしくて、注目すべき徳は、実は大きな評価を受けるべきものではない、と思われてくるのです。」

(4.12)わたしは次のように答えた、「あなたがこれまでに述べてきた言葉は、カトーよ、あなたが、ピュロンとかアリストンに従う者であるとしても口にしまうことです。というのも、お気づきのように、かれらには、この道徳的な善が最高の善と思われるだけでなく、唯一の善だと思われているのです。そして、もしもそのとおりであるとしたら、まさにあなたが望んでいらっしゃるわたしの目に映るところの事柄、すなわち、あらゆる知者が常に幸福であるということが、結論として導かれることになります。」わたしは続けて尋ねた、「しかしそうだとすると、あなたはこれらの人を誉め称え、か

れらのこの見解にわれわれは従わねばならない、と考えられるのでしょうか。」

かれは答えた、「いや、かれらの見解に従えなどとは、けっして言いません。というのも、自然にかなった諸々の物事の間で選択をなしうることは、徳に固有の事柄なのであって、だとすると、あらゆる物事をかくも同等のものにしてしまい、善悪という点からして、それらを選択の余地のないほど等しくしてしまう者たちは、徳そのものを捨て去ってしまう者であるのですから。」

〔八九〕 Cicero, *De finibus*, 4.16.43 (Caizzi 69C; Long & Sedley 2Hを含む)

「したがって、わたしには¹⁾、諸々の善きものの終極に位置する目的は、道徳的な生き方をする事である、と主張した人はすべて間違っていると思われます。しかし、人によってその程度には差があり、中でもとくに間違っているのはピュロンです。この人は、徳²⁾が成立したあとには、欲求すべきものは何も残らない、と考えていました。次に間違っているのは、アリストンです。かれは徳が成立したあとに何も残さないほど大胆ではありませんでしたが、しかし、知者がそれに促されて何かを欲求する原因として、「何であれその人の心に浮かぶもの」「何であれ、言わば出くわしてくるもの」を導入したのです。このアリストンは、ある種の欲求を認めた点で、確かにピュロンよりは優れていましたが、しかし、自然と完全に乖離している点で、他の人たちよりは劣っています。ところで、ストア派は、諸々の善きものの終極に位置する目的を、一なる徳に認める点で、以上挙げた人たちと似かよっています。しかし、諸々の義務の発する原理を探求する点で、ピュロンよりは優れています。また、それを「出くわしてくるもの」として考えたりしない点で、アリストンにもまさっています。しかし、かれらが、自然に適っており、それ自体のゆえに選択されるべきものとして指摘しているところの物事を、諸々の善きものの終極に位置する目的の内に含めない点では、自然に背いており、アリストンとそれほど異ならないのです。」

〔九〇〕 Cicero, *De finibus*, 4.18.48 49 (Caizzi 69Eを含む)

今わたしは¹⁾、あなたのかの短い証明 — あなたが、「論理的帰結（コンセクターリア）」²⁾と呼んでいたもの — を前にしています。その第一のもの、それ以上短いものはありえないものは、次の証明です。「すべての善きものは、誉むべきものである。しかるに、すべての誉むべきものは、道徳的な善である。したがって、すべての善きものは、道徳的な善である。」ああ、鉛の短剣よ。というのも、だれがその第一の前提を容認するのでしょうか。実際、これが容認されるなら、第二の前提は必要なくなります。というのも、すべての善きものが誉むべきものであるとすれば、すべては道徳的な善となるのですから。(49)実際、ピュロンとか、アリストンとか、あるいはかれらと同類の者たち — つまりあなたが同意を与えない人たち — のほかに、だれがそれをあなたに認めるのでしょうか。アリストテレスとか、クセノクラテスとか、かれらの仲間たちはすべて、それを容認しないでしょう。というのも、かれらは健康とか、力とか、富とか、名声とか、その他多くのものを善きものと呼びはしますが、しかし、それらを誉むべき

ものだとは言わないのですから。

[九一] Cicero, *De finibus*, 4.22.60 (Caizzi 69Fを含む)

しかし、カトーよ¹⁾、もしも議論が物事それ自体に関するものであるとしたら、実はわたしとあなたとの間に、意見の相違はありようがないのです。というのも、語る言葉をわれわれが変え、物事そのものをそれぞれ比較してみさえすれば、あなたとわたしの見解が異なっている点は、ひとつもないのですから。かの人ゼノンも、その点に気づいていないわけではなかったのですが、しかしかれは、大仰で、飾り立てた言葉に惑わされてしまいました — もしもかれが、自分が語っていることを、まったく文字どおりに考えていたとしたら、かれと、ピュロンなり、アリストンなりの間に、いったい何の違いがあるのでしょうか。他方、もしもかれがかれらの立場を認めないのであれば、たとえ言葉の点でかれらと対立してみても、それがどうだと言うのでしょうか — 事柄それ自体についてはかれらと一致しているのですから。

[九二] Cicero, *De finibus*, 5.8.23 (Caizzi 69Iを含む)

ところで、デモクリトスの無動揺(*securitas*)、つまり魂の平静さ(*tranquillitas*) — かれが「エウテューミアー(*euthumia*)」と呼んでいたもの — は、現在の議論から除外しなければならなかった。というのも、この魂の平静さは、それ自体がまさしく幸福なる生であるが、しかし、われわれの探求は、幸福なる生が何であるか、ということの問題にしていたわけではなく、むしろ、そのよって来る由縁を扱っていたのであるから。また、ピュロンや、アリストンや、ヘリロスの、すでに放逐され、斥けられた見解も、われわれが定めたこの範囲の中に入りうるのではないから、考慮に入れるべきではない。というのも、目的、ないしは、究極的な善と悪とでも呼ぶべきものに関するこの探求の全体は、自然に合致し、適っているとわれわれが言うところのもの、および、それ自体のゆえにまず欲求される最初のものを出発点として開始されるのであるが、しかるに、この出発点となるものは、道徳的な善とか、道徳的な悪の要素を含まない諸々の物事の中に、何か一つのものが別のものよりも優先されるような原因が存在することを否定し、それらの物事の中に何の差別も認めない人たちの手にかかると、完全に無効にされてしまうからである。またヘリロスも、もしもかれが、知識のほかに何も善きものはない、と本当に考えていたのであれば、選択の原因となるもの、および義務発見の手掛かりとなるものを、すべて捨て去ってしまったことになるのである。

[九三] Cicero, *De officiis*, 1.2.6 (Caizzi 69Hを含む)

そしてまた、道徳的な善のみが、それ自体のために欲求されると主張するか、あるいは、他にまさってそれ自体のために欲求される、と主張する人たちでなければ、確固としていて、変わることなく、また自然と結び付いている義務の概念を示すことは、不可能なことである。したがって、そうした義務の概念は、ストア派や、アカデメイア派、ペリパトス派に固有のものなのである。というのも、アリストンと、ピュロンと、ヘリ

ロスの見解は、すでにずっと以前に斥けられたのであるから。とはいえ、もしもかれらが、義務を発見することが可能になるように、物事を選択する何らかの能力をそのまま残していたとしたら、かれらにも義務について議論する権能はあったであろう。

[九四] Cicero, Tusculanae disputationes, 2. 6. 15 (Caizzi 69G)

それではまず最初に、多数の哲学者たちの弱々しさと、かれらの多様な体系について、語ることにしよう。かれらのうちで、権威と古さにおける第一人者、ソクラテス派のアリスティッポスは、苦痛が最も悪きものであると述べて、疑うことはなかった。またこれに続いてエピクロスも、この覇気に乏しく、女々しい見解に自らを捧げきってしまった。さらにエピクロスの後では、ロドスのヒエロニュモス¹⁾が、苦痛なきことを最高の善として主張し、それほどまでに多くの悪を苦痛に帰したのである。他の人たちは — ただし、ゼノン、アリストン、ピュロンは別として — 、今しがた、あなたが述べたのとほぼ同じこと、つまり、確かに苦痛は悪きものであるが、しかし、他のものにももっと悪いものがある、という意見を述べていた。

[九五] Cicero, Tusculanae disputationes, 5. 30. 85

(Caizzi 69L; Long & Sedley 1J)

以上述べたのは¹⁾、何かしら安定したものを含んでいる見解である。というのも、アリストンとか、ピュロンとか、ヘリロスとか、また他のいく人かの者たちの見解は、消滅してしまったのであるから。

XII. 前1世紀以降の証言

— ピュロン哲学の復興と再度の沈黙 —

[九六] Arius Didymus¹⁾ apud Stob. Anth. 2. 1. 17 (Caizzi 70)

というのも、哲学とは、真理を追い求める狩猟であり、また希求である。そして、知を求め、哲学した人たちのうち、いく人かの人たちは、エピクロスやストア派のように、獲物を発見したと主張している。また別の人たちは、その獲物はどこか神々の許にあるものであって、知恵というものは人間なみの物事ではない、という理由で、自分たちはなおも探求をつづけるのだ、と主張する。ソクラテスとピュロンは、そのように語っていた。

[九七] Seneca¹⁾, Naturales quaestiones, 7. 32. 2 (Caizzi 71; Long & Sedley 1K)

このように、かくも多くの哲学の学派が、後を継ぐ者なくして消えていった。アカデメイア派は、古いアカデメイア派も新しいアカデメイア派も、学派の代弁者を残すことはなかった。ピュロンの教えを伝える者は、一体だれがいるのだろうか。

（〔九七〕の続き）

Cf. Seneca, Epistulae morales, 88.43

細かい注意もそれが過ぎると、どんなに多くの害をもたらすか、また真理にとってどんなに危険なものであるか、ということは、わたしのすでに聞き及んでいるところである。プロタゴラスは「あらゆる物事について、肯定否定どちらの側にも同等に議論することができるし、『あらゆる物事をどちらの側にも議論しうるか』ということについても同様である」と語っていた。ナウシパネスは「あるように現われる諸々の物事のうち、いかなるものも、あらぬよりもいっそう多く、あることはない」と語った。パルメニデスは「諸々の現われる物事にあって、一なるものと別なるものは何もない²⁾」と言った。エレアのゼノン³⁾は、一つの問題から出発して、あらゆる問題を一掃してしまった——かれは、何もあらぬと主張したのである。またゼノンとほとんど同じやり方をとったのは、ピュロン派、メガラ派、エレクトリア派、アカデメシア派である。かれらは、何も知らないという新しい知識を導入したのである。

〔九八〕Plinius¹⁾, Naturalis historia, 7.19.79 80 (Caizzi 72)

けっして泣くことのなかった人たちは多くいるが、それと同じように、パルティア人によって殺されたクラススス²⁾の祖父、クラススス³⁾は、けっして笑うことなく、そのために「アゲラストゥス（笑わぬ人）」と呼ばれたということである。また、知恵に輝くソクラテスは、つねに同じ表情を保ち、特別に嬉しい様子とか、特別に苦しい様子を示さなかったと言われている。こうした魂の動きは、時としてある種の厳格さとか、あるいは、自然本来のあり方が硬直し、柔軟性を失ってしまった峻厳さとかに通じるものであり、人間的にこうむる諸々の情態（感情）を奪い去ってしまうこともある。ギリシア人はそのような者を「無情態なるもの（アパテース）」と呼んでいたが、かれらは、この種の人間を多数見聞きしていたのである。そして驚くべきことだが、特に知恵の権威なる者たちがそうだったのである。犬儒派のディオゲネス⁴⁾然り、ピュロン、ヘラクレイトス、ティモン然り。実際ティモンは、人類全体を憎みさえするようになったのである。

〔九九〕Tertullianus¹⁾, Apologeticum, 50.14 (Caizzi 73)

苦痛と死を耐え抜くよう勧告する人たちは、『トウスクルム談議』のキケロとか、『災厄からの癒し』²⁾のセネカとか、ディオゲネス³⁾とか、ピュロンとか、カリニコス⁴⁾など、あなたがたの許には多くの人がいるが、しかし、かれらが言葉の助けを得て獲得する信徒の数は、実際の行為をもって教えるキリスト者が見出す信徒の数ほどには、多くないのである。

〔一〇〇〕Quintilianus¹⁾, Institutio oratoria, 12.2.23 24 (Caizzi 74)

(23)しかし、このことから私には別の問題が生じてくる——それは、いずれの学派が弁論術に最も貢献できるかという問題である。ただし、この競技に名乗りをあげうる学

派は多くはない。(24)・・・(中略)・・・また、この企てにおいていかなる役割を果たすことが、ピュロンになしうるのであろうか。というのも、かれには、その前で語るべき陪審員がいること、その人のために語るべき被告がいること、そこで所見が述べられるべき元老院があることは、明らかではないであろうから。

[一〇一] Minucius Felix¹⁾, Octavius, 38.5 (Caizzi 75)

かくして、アッティカのひょうきん者ソクラテス²⁾、何も知っていないと認めつつ、欺くことこの上ないダイモンの証言を誇っていた人が、何ごとかを認識していたにせよ、またアルケシラオスと、カルネアデスと、ピュロンと、アカデメイア派のすべての群衆が³⁾、何ごとかを熟慮していたにせよ、そしてまた、シモニデス⁴⁾はたえず判断を先送りしていたのであるが、ともかくもわれわれは、哲学者たちの傲慢を軽蔑するのである。われわれは、かれらが人を墮落させる者、姦夫であり、僭主にして、いつでも言葉巧みに自分の欠陥を覆い隠す者であることを知っている。

[一〇二] Lucianus¹⁾, Bis accusatus, 13 (Caizzi 76)

ヘルメス：絵画術が、戦線離脱でピュロンを訴えております²⁾。

ディケー：九人の者が審判するように。

Ibidem, 25³⁾

ディケー：ピュロンを呼びなさい。

ヘルメス：絵画術はここにいるのですが、ピュロンは最初から来ておりません。ただ、そうするだろうとは思っていました。

ディケー：どうしてですか？ ヘルメスよ。

ヘルメス：かの者は、何であれ真なる規準が存在するとは、まったく考えておりませんから。

[一〇三] Lucianus, Icaromenippus, 25 (Caizzi 77)

つまり、二人の男が反対の祈りを捧げ、同等の犠牲を約束したところ、ゼウスはその者たちのどちらに向かって頷いたらよいのか分からなくなり、かのアカデメイア派の情態をこうむってしまい、何も表明できなくなり、ピュロンのように、なおしばし判断を保留し、考察を続けていたのである。

[一〇四] Lucianus, Vitarum auctio, 27 (Caizzi 78)

ゼウス：われわれの所に、あと残っているのはだれだ？

ヘルメス：この懐疑主義者が残っております。こらピュリアス¹⁾、前へ出てさっさと競りに懸かりなさい。多くの者がはや立ち去ってしまい、売り買いする者はごく僅かしが残っていないであろう。しかし、この者までも買おうとする人が、はたしてだれかいるのであろうか。

買い主：わたしが買いましょう。だがまず最初に、わたしに答えておくれ。お前は何を知っているかね？

Phil.²⁾：何も。

買い主：その意味はどういうことかね？

Phil.：何も存在しないようにわたしには思える、ということです。

買い主：してみると、われわれもまったく存在しないのかね？

Phil.：そのこともわたしは知りません。

買い主：お前が存在しているという、そのことも知らないのかい？

Phil.：そのことなら、いっそうわたしは知りません。

買い主：何という行き詰まり。ところで、お前のこの天秤には何の意味があるのだね？

Phil.：この天秤に諸々の議論をかけ、等しくなるように正して、正確に同等で、重さが等しいのを見てとると³⁾、その時、実際その時こそ、わたしは、どちらがよりいっそう真なるものか、知らないことになるのです。

買い主：ほかに、お前がうまく行なえることは、何があるのかね？

Phil.：逃亡奴隷を追いかけること以外のことなら、何でもできます。

買い主：どうしてそれはできないのだい？

Phil.：というのも、お前さま、わたしは把握しないのです。

買い主：もっともだ。実際、お前は遅鈍で、ウスノロのように思われる。しかし、お前が立ち止まる⁴⁾その目的は、何なのだ？

PHIL.：無学問⁵⁾と、聞きも見もしないことです。

買い主：してみるとお前は、目も見えないし耳も聞こえない、と言うのか。

PHIL.：しかも、少なくとも無判断であるし、また無感覚であって、要するに地虫と何ら差別がない⁶⁾のです。

買い主：それならば、お前を購入しなければならない。（ヘルメスに向かって）こいつはおいくら、と言ったものでしょうか。

ヘルメス：一アッティカ・ムナだな。

買い主：ではどうぞ、受け取って下さい。さあお前、何か言うことがあるかい？ わしはお前を買ったのだな？

PHIL.：それは不明瞭であります。

買い主：いや、けっしてそんなことはない。わしはお前を買って、ちゃんと現金を払ったのだよ。

PHIL.：わたしは、それについて判断を保留し、なお考察を続けております。

買い主：とにかく、わしの召し使いがそうしなければならないように、わしについて来なさい。

PHIL.：あなたの言っていることが真かどうか、だれが知っているのでしょうか。

買い主：伝令と、支払った一ムナと、この場の人たちじゃないか。

PHIL.：わたしたちのところにだれかいるのでしょうか？

買い主：そういうつもりなら、このわしは、お前を粉挽き小屋にほうり込んで、もっと

下等な議論で説得して、わしが主人であることを分からせてやろう。

PHIL. : その点については、どうか判断保留ください。

買い主 : それは神かけて、絶対にならぬ。すでにわしは意見を表明したのだ。

[一〇五] Schol. in Lucian. Vit. auct., 27 (Caizzi 79)

「逃亡奴隷を追いかけること以外のことなら、何でもできます。」かれがこう言うのは、無把握（把握不可能、アカタレープシア）を主張していたからである。この無把握——つまり、何かを捉えるに至ることは決してなく、すべてがその試みを逃れること——は、認識のためには何も貢献するところがないように思われる。だから、ピュロンは「逃亡奴隷を追いかけることができない」、すなわち「わたしには、認識から逃げて行くものを捉えることはできない」と言っているのである。

[一〇六] Anonym. In Plat. Theaet. ¹⁾ 60.48-61.46

(Caizzi 80; Long & Sedley, 71D)

テアイテトスは、知識が何であるか、ということについて試験されたとき、「少なくとも現在わたしに現われているところでは」²⁾と語ったので、ソクラテスは、テアイテトスがかれ自身に現われ、知識がそれであるとかれが考えているところのものを、躊躇なく語っていると考えて、テアイテトスの答えを歓迎した。なぜなら、かれが語っていたのは、人はだれも、何であれ確定的にドグマをもつことはできず、自分に現われていると言えるだけである、というピュロンの立場ではなかったからである³⁾。というのも、ピュロンによると、理性（ロゴス）は規準にはならないし、真なる表象も、説得的な表象も、把握的な表象も、他のそうしたものもみな規準にはならず、ただ現在自分に現われているものだけが規準となるからである。ピュロンは、現われているものがそのとおりにあるか、そうでないか、という点については、意見を表明しない。それはかれが、相互に反対し合う議論は力が拮抗していると考え、諸々の表象を均一にし、真実と虚偽、説得的と非説得的、明瞭と不明瞭、把握的と非把握的という点において、諸々の表象のうちに何の差別も残らないようにし、すべての表象を同等とみなすからである。ただしこのこと⁴⁾もかれのドグマであるわけではなく、それゆえかれは、その都度感取される表象にしたがって——ただしそれが真であるからという理由ではなく、現在自分にそう現われているからという理由で——生活するのである。

[一〇七] Plutarchus, Quaest. conv., 3.5.2, 652AB (Caizzi 81)

「・・・エピクロスも、『饗宴』の中で多くの議論を行なったが、その要点はわたしと思うに次の点にある。かれの言うには、ブドウ酒は絶対的な意味で温かくするものではなく、その内には温熱を引き起こす諸々の原子もあれば、冷却を引き起こす諸原子もあり、ブドウ酒は体内に入ると、われわれにおける混和と自然のあり方がいかなるものであろうとも、そのわれわれのあり方と適合するようになるまで¹⁾、諸原子のいくつかを放出し、また身体からも諸原子を受け取り、こうして酔っ払うことによって、ある人

たちは温かくされるし、別の人たちは反対の情態を受けることになるのである。」フロ
ルス²⁾は続けて言った。「以上のことは、プロタゴラスを通して直接われわれをピュロ
ンへと導く。というのも明らかに、われわれは、油や乳や蜜や、他のものについても同
様に論じて、それぞれのものが、その本性においてどのようなものであるか、というこ
とは語ることを避け、相互的な混合と混和によって、それぞれのものが生じてくるのだ、
と主張するからである。・・・」³⁾

[一〇八] Hippolytus¹⁾, Philosophoumena, prooem. (Diels, DG, p. 533)(Caizzi 82)

自然学に携わった人としては、タレス²⁾、ピュタゴラス、エンペドクレス³⁾、ヘラク
レイトス、アナクシマンドロス⁴⁾、アナクシメネス⁵⁾、アナクサゴラス、アルケラオス⁶⁾、
パルメニデス、レウキッポス、デモクリトス、クセノパネス、エクパントス⁷⁾、ヒッポ
ン⁸⁾がいる。

倫理学に携わった人としては、自然学者アルケラオスの弟子であったソクラテス、ソ
クラテスの弟子であったプラトンがいる。このプラトンは三つの哲学⁹⁾を一緒にした。

問答法に携わった人としては、プラトンの弟子であったアリストテレスがいる。この
人は問答法を組織化した。またストア派のクリッポスとゼノンもいる。

エピクロスが打ち出した見解は、だれの考えともほとんど対立するものであった。ま
たアカデメイアのピュロン¹⁰⁾ — あらゆる物事に関する無把握（把握不可能）を主張
した人 — もそうだし、インドのバラモンもそうであるし、ケルトのドルイドや、ヘシ
オドス¹¹⁾もそうであった。

Ibidem, 1. 23 (Diels, DG, p. 533)

哲学者たちのうちの、さらに別の学派は、アカデメイアで時を過ごしたところから、
アカデメイア派と呼ばれていた。その創始者はピュロンである¹⁰⁾ — かれにちなんで
かれらはピュロン主義哲学者と呼ばれていた。この人は、最初にあらゆる物事に関する
無把握（把握不可能）を導入し、それによって、相互に反するどちらの議論も行なうが、
しかし何も表明することはなかった。というのも、思惟の対象であれ、感覚の対象であ
れ、真なるものは何もなく、人間たちにそう思われているだけだからである。それにまた、
すべての実体（存在）が流動的で変化し、同じ状態にとどまることはけっしてない¹²⁾。
アカデメイア派のうち、ある人たちは、何に関しても、まったく何も表明してはならず、
ただ単純に議論を行なって、その後は放っておかねばならないと主張していたし、別の
人たちは、「よりいっそう多くはない」を付け足して、火が、他のものであるよりは、
よりいっそう多く火であることはない、と言っていた。かれらは、何であるか、という
ことは表明しなかったが、これこれ様のものである、ということは語っていた。

[一〇九] Joannes Philophonus¹⁾, In Arist. Categorias Comm., p. 2, 7 (Caizzi 83)

かれらが判断保留派と呼ばれたのは次の理由による。この学派の指導者であったピュ
ロンは、存在する諸々の物事については、無把握（把握不可能）が成り立つ、と言って

いた。かれが用いたのは次の事例である。かれの言うには、同じ河に二度入るのが不可能であるように — 二度目に入る前に河は流れ去ってしまうから — 、諸々の物事についても、それらの自然的なあり方は流動的であり、生成したり消滅したりすることの中で、その存在を保持しているのであるから、何であれ明確な表明をなすことは不可能である。かれらはこのゆえに、尋ねられてもうなずいたり、首を振ったりするだけであったが、それは、答える前に物事は変化してしまう、と考えてのことであった。ピュロンの弟子のヘラクレイトスは²⁾、この不合理をさらに押し広げ、同じ河には一度さえも入ることはできないと言った³⁾。というのも身体全体が水につかる前に、ほとんどの水が流れ去ってしまうからである。諸々の物事の自然のあり方はそのようなものだ、とかれは言うのである。というのも、あらゆるものは動きと流れのなかでその存在を保っているからである⁴⁾。それゆえ、かれらは、諸々の物事に関する回答を保留するところから、判断保留派と呼ばれていた。

[一一〇] Epiphanius¹⁾, Adversus haereses, 3.18 (Diels, DG, p.591) (Caizzi 84)

ピュロン。エリスの出身。かれは、他の知者たちのドグマをすべて集めて、それらに対する反対の論を記し²⁾、かれらの思いなしを覆して、いかなるドグマにも同意しなかった。

[一一一] [Clemens Roman.¹⁾], Homiliae, 13.286 (Caizzi 85)

われわれはまた、哲学者たちの見解も注意深く調べた。とりわけ無神論的な見解、つまり、エピクロスとピュロンの見解に注意を払ったが、それはかれらの見解をよりたやすく打ち壊すことができるようにであった。

[一二二] Clemens Alex., Stromata, 7.16.101.4 (Caizzi 86)

だれか人が、その心を専ら向ける相手がイスキマコス¹⁾であるならば、そのことによってその人は農夫になり、・・・ホメロスであるなら詩人になり、ピュロンであるなら争論家になり、デモステネス²⁾であるなら弁論家になり、クリュシッポスであるなら問答家になり、アリストテレスであるなら自然学者になり、プラトンであるなら哲学者になるように、そのように主に従い、主を通して与えられる預言のとおりに従われて進む者は、師の似姿に即して完全にされ、肉の姿をとった神として巡り歩くことになる。

[一二三] Himerius¹⁾, Or., 14 (=orat.48 Colonna) (Caizzi 87)

ムーサイの導き手²⁾は、エピクロスとデモクリトスとが共通に抱いていた思いなしも、かれらが自然について思い描いていた事柄も承知していた。さらにアカデメイアの各思想もすべて知っていたし、リュケイオンからリビュアやキュレネに伝えられた知恵についても、かれは知っていた。またピュロンの諸方式と、そこから発してあらゆる方面で繁茂した争いを、かれは調べ上げた。ただしそれらを重大で真面目な営みとは考えず、その他の哲学に対する一種のオードブルとみなしたのである。

([一一三] の続き)

Lamprias³⁾, cat., 158

プルタルコス『ピュロンの十の場 (トポス) について』⁴⁾

[一一四] Gregorius Naz.¹⁾, Orat., 32.25.596 (Caizzi 88)

もう一方の者は、思考弱く、言葉貧しく、議論のあやとか、知者たちの言葉や謎を知らず、またピュロンがなした反対 (エンスタシス)、あるいは留保 (エペクシス)、あるいは対置 (アンティテシス) も、クリュシッポスの三段論法の解決法も、アリストテレスの諸技術のいかさまも、さらにプラトンの巧みな弁舌による魔術も知ってはいない。今挙げた者たちは、悪しきことだが、エジプトの疫病のようにわれわれの教会の中に忍び込んでいるのである。

[一一五] Elias Cret¹⁾, Commentarii in S. Gregorii Naz. orationes,

Additamenta, in Or. 32. 596, col.901 (Caizzi 95)

ピュロンはエピクロスの弟子であった。あらゆる物事に関する無把握 (把握不可能) のドグマをもっており、そのためもあって、かれの議論と推論を、ある人たちは、あらゆる探求の妨げになるものとして「反対 (エンスタシス)」と呼び、別の人たちは、すべてが把握不可能であるというドグマは、探求を押し留め、阻むものであるとして、その議論と推論を「留保 (エペクシス)」と呼び、さらに別の人たちは、あらゆる人に対して反論をなす議論であるとして「対置 (アンティテシス)」と呼んだのである。ピュロンはそのような人であった。

[一一六] Gregorius Naz., Orat., 21.12.393 (Caizzi 89)

かつて、われわれに属する事どもが栄えていた善き時代があった。その時には、このよけいな物事、つまり、神学のうちでも淫らで技巧に長けた部分は、聖なる住まいに近づくこともできなかった。むしろ、耳新しく不必要な事柄を、神について語ったり聞いたりすることは、素早く小石を交換することによって視覚を欺く遊びにふけったり、あるいは多様に、また蠱惑的に身を振って、観客を魅了することと同じことであった。かつては、単純で素朴な議論が、敬虔なこととみなされていたのである。しかし、セクストスたちとピュロンたち、また対置的に論ずる舌が、何か恐ろしい悪性の病気のように、われわれの教会内部に巣くって以来、たわごとが教養とみなされるようになり、われわれは、『使徒行伝』の書がアテナイ人について語っているように、何か耳新しいことを話したり聞いたりすることのみに、時を費やしているのである¹⁾。

[一一七] Gregorius Naz., Carmina de se ipso, 2.1.12.303

(P.G. 37, 1188; Caizzi 90)

お願いだ、セクストスの言葉も、ピュロンの言葉も、紡ぎ出してくれるな。

もはやクリュシッポスはいない。スタゲイラの人¹⁾も立ち去って久しい。

プラトンの巧みな弁舌も受け入れるな。

[一一八] Agathias Murinus¹⁾, Historiae, 2.29 (Caizzi 91)

ウラニオスという名前のシリアの或る人が、・・・判断保留主義と呼ばれるところの経験をわが物にしよう、ピュロンの、セクストスの受け答えをしよう、また何ごととも捉えることができないと考えるという仕方、目的には無動揺（平静さ）を据えよう、と考えた。

[一一九] Julianus¹⁾, Anthologia Palatina, 7.576 (Caizzi 92)

ユリアノス²⁾、執政官から。

哲学者ピュロンへ。対話。

A：ピュロンよ、汝は死んだのか。

B：わたしは判断を保留します。

A：最後の運命が降りかかった後でなお、汝は判断を保留すると言うのか。

B：わたしは判断を保留します。

A：だが懐疑には、墓が終止符を打ったのだ。

[一二〇] Flavius Claudius Iulianus Imperator, Epistulae, 89B

言論によってある状態が魂のうちに生まれ、それは徐々に欲望を呼び覚まし、それから突如として恐ろしい炎を燃え上がらせる。われわれはその炎から遠く逃れねばならないと、わたしは考える。エピクロスの言論も、ピュロンの言論も、入り込ませるな。実際、神々はよくして下さって、すでにそれらを滅ぼしてしまわれ、結果として、それらの書物の大多数はもはや見当たらないのである¹⁾。

[一二一] Joannes Siculus¹⁾, In Hermogenis De ideis, p.397 (Caizzi 93)

しかし察するところ、プラトンは、多義的語法を頻繁に使用したがために、ソクラテスのことや、『メネクセノス』で記したこと²⁾、また問答法を判別の基準として示すために自ら語っていた事柄を忘れてしまったように思われる。そしてそこから、セクストスたちやピュロンたちの方に傾くことになったのである — かれらは実は、ペリパトスやアカデメイアを単なる影のように見せようとしている者たちであるにもかかわらず。

[一二二] Georgius Cedrenus¹⁾, Compendium historiarum, 1.283 (Caizzi 94)

第十三番目の学派、セクストスたちとピュロンたち。セクストスは、認識可能、把握可能ということは全然ない、というドグマを抱き、判断を保留し、反対をした。この人はまた、あらゆる技術と知識に対しても反論を行なった。ピュロンは哲学者であり、反対の立場の者に反対することにより、判断保留主義者（エペクティコス）と呼ばれていた。すなわち、ピュロンと反対の立場に立つ者も哲学者であったのだが、こちらの方は、すべてが認識可能であり、把握可能であると主張しており、こうして、両者は相互の論

戦の中で、相手の立場を否認しようとしたのである。

哲学者たちのうちの、さらに別の学派は、アカデメイア派とピュロン派である²⁾。かれらは、アカデメイアで時を過ごしたところから、アカデメイア派と呼ばれていた。その創始者はピュロンである — かれにちなんでかれらはピュロン主義哲学者と呼ばれていた。この人は、最初にあらゆる物事に関する無把握（把握不可能）を導入し、それによって、相互に反するどちらの議論も行なうが、しかし何も表明することはなかった。というのも、かれは、思惟の対象であれ、感覚の対象であれ、真なるものは何もなく、人間たちにそう思われているだけだ、と語っていたのである。

[一二三] Anonymus, in fine codicum Sexti Pyrrh. hyp.¹⁾

(Caizzi 96)

ピュロンよ。より大いなるものなき程の大いなる驚異として現われたるものよ。

他の者たちとは異なる驚くべきものよ。

汝、あえて反対の方向に進み行きしが、もしや思い上がってのことであれば、

知者という知者のうちで、汝こそ、この上なく惨めなるものなり。

もしやそれが、人間の知識を糾弾せしめなれば、

汝糾弾せし知恵を備えし者どもの中にありて、汝こそ第一の勝利を収めし者なり。

註

[一] への註

- 1) DL=ディオゲネス・ラエルティオス（略号については、文献・略号表を参照）は生涯不詳の哲学史・伝記作家。生きていた時代も、1-5世紀としか確定できないが、新プラトン派に言及していないこと、言及される最も新しい人物が、3世紀の懐疑主義者テオドシオス、セクストス・エンペイリコス、サトゥルニヌスであることから、3世紀前半の人と推測されている。哲学的立場については、エピクロスに関する詳しい記述から、エピクロス派とみなす説もあれば、各学派に対する偏りのない態度から、懐疑派に属するとする説もある。詳細はディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』加来彰俊訳、下巻解説を参照。
- 2) ペロポネソス半島北西部の平原に位置し、オリュンピアをその内に含む国。ヒッピアスやパイドンの出身地。[五]を参照。
- 3) マグネシアのディオクレス。具体的にどのマグネシアかは不明。前75年ころの生まれ？ DLにのみ現われる。おそらく同一著作であろうが、『哲学者伝』(Bioi tôn philosophôn, Peri biôn philosophôn, cf. DL 2.54; 82)あるいは『哲学者綱要』(Epidromê tôn philosophôn, cf. DL 7.48)を著す。全3巻であったと推定される。DLにおいて19箇所で利用されている。
- 4) アテナイのアポドロロス。前150年頃の生まれ。ストア派哲学者であるセレウケイアのディオゲネスや、アレクサンドレイア図書館長であったアリストアルコスの弟子であった。博識の人で、著作は、哲学、歴史、神話、宗教、地理にも及ぶ。『年代記』(Chronika, Chronikê suntaxis)は、エラトステネスの研究に基づき、歴史、哲学諸学派、伝記などを扱った著作。
- 5) ミレトス出身。前105年ころの生まれ。「博識家」(Polyhistor)と呼ばれていたが、その呼称が示すとおり、地誌、文学、哲学など多方面にわたる多くの著作を著した。『系譜』の名前は正確には『哲学者たちの系譜』(Philosophôn diadochai)。OCDはかれを評して“industrious and honest, he lacked taste and originality”と述べている。
- 6) スティルポンはメガラ派の第三代学頭。ストア派の創始者ゼノン（前334-262）はスティルポンに問答法を学んだ。スティルポンの生年、没年は、前380頃-300頃とも(Zeller, II/1, p. 248 n. 2; Praechter, RE XXVII 2527)、前360頃-280頃とも(Döring, p. 140)言われる。しかし、どちらを採用するにしても、スティルポンはピュロン(前365/0頃-270頃)と同年代の人になり、ピュロンが、そのスティルポンの息子（あるいは弟子？）である人（ブリュソン）の弟子となったと考えることは非常に困難である(cf. Long & Sedley, vol. 2, p. 1)。その意味でおそらくはニーチェ(Rheinisches Museum, 25, 1870, p. 223 n.)が提案した、touの代わりにêを読む読み方のほうがよいであろうが(cf. Caizzi, p. 132)、しかしその場合でも、ピュロンが自分と同年配で、しかもティモンの最初の師でもあった(DL 9.109)スティルポンの弟子になりえたかどうか、疑問は残る。Caizzi, p. 133; Giannantoni, pp. 26-30を参照。

- 7) ブリュソンは、例えばプラトンのものとされる『第13書簡』360Cでも言及されている人物であるが、生涯は不明。Suda s. v. Σωκράτης (Döring, fr. 34; その一部が〔四〕に含まれている)によれば、ソクラテスの弟子、あるいはメガラのエウクレイデス(前450頃-380頃)の弟子とされ、エウクレイデスとともに「争論的問答法」(eristikê dialektikê)を導入した人とも言われている。〔二〕においてはクレイノマコス(エウクレイデスの弟子)の弟子とされている。アリストテレス『動物誌』563a7(=615a10; cf. Döring, fr. 202)によれば、ポントスのヘラクレイア出身の歴史家、ヘロドロスの息子が、ソフィストのブリュソンであった。ヘロドロスが前400年頃に活躍した人であり、この人の子供が問題のブリュソンであるとしたら、生まれは前415-400年頃であることになるが、ピュロン(前365/0頃-270頃)の師であるという条件を考えて、生まれを400年頃とすると、かれを前450年頃の生まれのエウクレイデスの弟子(クレイノマコス)の弟子とする記述と合致する。しかし、ヘロドロスの息子であるとしたら、「スティルポンの息子」ではありえない。ひとつの解決は、これを「スティルポンの弟子」と解する方法であるが、しかしこの場合でも、生まれが400年頃のブリュソンが、前380頃-300頃、あるいは前360頃-280頃に生きたスティルポンの弟子になりうるか、という問題が残る。その意味では、註6で指摘したようにtouをêに読み替え、「ブリュソン、あるいはスティルポンの弟子になり」という読み方を採用する方がよいであろう。
- 8) アナクサルコス(Anaxagoras)はアブデラ出身の哲学者。DL 9. 58-60にその生涯が簡単に記されている。前340-337ころが盛期。アパテイア(無情態)と人生に対する満足のゆえに、「幸福な人」(Eudaimonikos)と呼ばれていた(DL 9. 60) — これは(少なくとも表面的には)ピュロンと共通した特徴である。アナクサルコスは、インドで出会った裸の行者から影響を受けたと伝えられるが(〔一六〕)、キュプロス島でニコクレオンに殺されるときにも平然とした態度を保持したという報告(DL9. 59)は、その真偽はともかく、インドの行者の姿を彷彿させる。伝承によると、アナクサルコスはキオスのメトロドロスの弟子であったとも、あるいはスミルナ(Smyrna)のディオゲネスの弟子であり、このディオゲネスはメトロドロスの弟子であったとも伝えられているが(〔三六〕〔三七〕を参照)、メトロドロスは、デモクリトスの弟子、あるいは少なくともデモクリトス原子論の継承者であり、原子論の立場から「われわれは何も知らない、何か知っているか知っていないかも知らない」という懐疑主義的発言を行っていた〔五七〕。この事実に基づき、デモクリトス原子論中の懐疑主義的要素が、アナクサルコスを通してピュロンに伝えられ、開花したとする解釈もある。
- 9) アレクサンドロス大王によるインド遠征(前327-325)への随行。
- 10) それとも「真正のやり方」? gennaiosという語に関する詳しい議論についてはBrancacci, pp. 219-30を参照。
- 11) このアスカニオスは、ここにしか現われず、ほかに何も知られていない人物。そのためDL 9. 69に合致するように、「ヘカタイオス」に読みかえる案も出されているが(C. Müller, FHG II, p. 384)、しかしLong & Sedley, vol. 2, p. 2も指摘するとおり、どのようにして「アスカニオス」が「ヘカタイオス」に変わったのか説明ににくい。von Arnim (RE, II/2, 1614, 8)は、アスカニオスをピュロンの学派に属す人

と推測している。しかし、ピュロン、あるいはピュロンの思想について報告しているからといって、ピュロンの学派に属する人であることにはならないし、それに、もしもそうであれば、DL 9.115 116のピュロン主義者のリストに名前が挙げられていてもよかったように思われる。なお、「無把握・把握不可能(akatalêpsia)」も「判断保留(epochê)」も、用語としてはピュロン以降 — ゼノンやアルケシラオス — のものであると考えられる (cf. Long & Sedley, vol. 2, p. 2; Couissin, pp. 381 6)。

- 12) 「よりいっそう多くはない (ou mallon)」という表現のピュロン主義における用法については、セクストス『概要』(「一二」への註 1 を参照)第 1 巻188 191節を参照。

[二] への註

- 1) 『スーダ辞典』は10世紀末に、それ以前の辞典やテキスト、スコリア、『パラティオン詞華集』、種々の抜粋などに基づいて作成された辞典。
- 2) 前359 336年。ピリッポスの誕生は前383/2年、逝去は336年である。
- 3) 前336 333年。ピュロンの盛期のことか (cf. Caizzi, pp. 146 7)? もしそうだとすると、ピュロンの生まれは376 373年と推定されるが、しかし一般にはかれは365/0年頃に生まれ、270年頃になくなったと考えられている。
- 4) クレイノマコス(トゥリオイの出身、前4世紀初期から中期にかけて活躍)は、Suda s. v. Σωκράτης (Döring, fr. 34)、およびDL 2.112において、メガラのエウクレイデスの弟子として記され、またSudaの同じ箇所、メガラ派から派生した問答学派は彼に遡ると記されている (DL 1.19も参照。ただしここでは、間違っ「クレイトマコス」と記されている)。しかし「問答学派 (Dialektikoi)」という名を最初に学派の名前として採用したのは、カルケドンのディオニュシオス (おそらく前320年頃活躍) であるから (DL 2.106)、彼が問答学派を創始したと言うよりは、彼の思想の内に問答学派の中心的思想 — その一つはストア派において体系化された命題論理学 — が含まれていた、ということであろう (DL 2.112)。クレイノマコスと問答学派の関係について詳しくは、Sedley, pp. 76; 106 n. 16を参照。
- 5) ブリュソンについては、[一] への註 7 を参照。
- 6) キオスのメトロドロス (前4世紀に活躍) はデモクリトスの弟子、あるいは少なくともデモクリトス原子論の継承者であり、原子論の立場から「われわれは何も知らない、何か知っているか知っていないかも知らない」という懐疑主義的発言を行った ([一] への註 8 および [五七] を参照)。アナクサルコスのかれの弟子 (次の註 7 を参照)、あるいは孫弟子 ([三六] [三七]) であった。
- 7) 「アレクサンドロス」は「アナクサルコス」に読み替えられるべきである ([三六] [三七] および Caizzi, p. 148 を参照)。
- 8) 「アブデラのメトロドロス」は「アブデラのデモクリトス」に読み替えられるべきであると思われる ([三七] および Caizzi, p. 148 を参照)。

[三] への註

- 1) [一] への註 11 を参照。

[四] への註

- 1) プラトンの師のソクラテス（前469-399）。互いに異なった立場をとる種々の学派が、自分たちはかれの系譜に連なる、と主張していた。
- 2) エウクレイデス（前450頃 380頃）はメガラ派の祖。DL 2.106 112にその思想と逸話が記されている。ソクラテスやプラトンと親しい交わりがあり、ソクラテスの死の場面にも立ち会った人。プラトンの対話篇『テアイテトス』は、彼が友人に報告する形式で記されている。プラトンとその仲間はソクラテスの死後、かれのもとに一時身を寄せた。エレア派の影響を受け、善に関する一元論的な思想を展開、また論争にも優れ、「争論的問答法」を導入した人とされる（[一]註7を参照）。

[五] への註

- 1) ポントスのアマシア出身の地誌作家、地理学者（前64 後24以降）。一時期ストア派にも傾倒したようである。エラトステネスから大きな影響を受けた。
- 2) エリス出身、前418年頃の生まれと思われる。DL 2.105によれば、アテナイに奴隷として連れてこられ、ソクラテスの尽力で自由の身になった。ソクラテスの親しい弟子の一人で、プラトンの対話篇『パイドン』の題名はかれの名前による。エリス派（Ēliakoi, DL 2.105）の創始者。
- 3) ピュロンが属している人たち — 「かれら」 — は、メガラ派か、それともエリス派か？ 「エウクレイデスをも」という言葉は、「かれら」が、パイドンを受け入れた人たち、つまりエリス派であることを示唆する。しかし、ピュロン自身はパイドンに遡るエリス派に属していたわけではない。むしろ、[一][二][四]で記されているとおり、哲学史家の目から見れば、メガラ派の影響下にあったと考えられ、そして、メガラ派とエリス派は、客観的に見れば異なるのである。しかし、この証言においては、むしろ異なる二つの学派を結びつけ、関係づけようとする意図が働いていると考えられる。すなわち、ピュロンに着目し、ピュロンがエリス出身であるところからかれをエリス派として認定するが、しかしまた、その同じ人がメガラ派の影響を受けているところから、エリスにはメガラ派のサークルがあったと言える結論づけているように思われる。
- 4) メネデモス（前350頃 278頃）は、DL 2.125 6、および2.105によると、エレクトリア（エウボイアに位置する都市）で元々軍務についていたが、メガラに守備隊員として派遣された後、アカデメイアでプラトンに接し、その影響で哲学に向かう。メガラでスティルポンに学んだ後、エリスに赴いてパイドンが創始した学派の思想を学んだ。パイドンから数えて第三代目の後継者の一人であるが、かれ自身はエレクトリア派（Ēretrikoi）を創設した。争論的傾向の持ち主であった。

[六] への註

- 1) 「この師」は、メネデモスとも考えられなくはないが、パイドンに関する説明の箇所であるから、むしろパイドンとみなすべきであろう。Caizzi, p. 84もパイドンと考えている。

[七] への註

- 1) 「一〇二」に対するスコリア。ルキアノス（後115/20頃-180以降）はユーフラテス河流域のサモサタの生まれ。シリア系の人であり、母国語はアラム語であったが、ギリシア教育、とくに修辞学教育を受け、第二次ソフィスト運動の時期にソフィストとして活動、アジア、マケドニア、トラキア、イタリア、ガリアなどを転々とした後、40歳前後にアテナイに移り修辞学から哲学に向かい、哲学者を風刺した喜劇的な対話篇を著す。晩年はエジプトにおいてローマ官吏の地位を得た。

[八] への註

- 1) 「カリュストスのアンティゴノス一派の人たち」(hoi peri ton Karystion Antigonon) はここでは「カリュストスのアンティゴノス」と実質的に同じである。アンティゴノスは、前240年頃に活躍した青銅彫刻家にして著述家。出身地のカリュストスはエウボイアの南端の都市。やはりエウボイアの都市であるエレクトリアのメネデモスの影響を若くして受けたと推測される。その後、アテナイにしばらく滞在し（その際にアカデメイアとも接触したかもしれない）、またギリシアを広く旅行した後、ペルガモンのアッタロス1世（前241-197）のもとで文筆活動、芸術活動に従事したとされる。主要著作としては、『哲学者伝』(Bioi)、『奇異物語集成』(Historiôn paradoxôn synagôgê) があり、前著はDLやアテナイオスにおいて引用されている。DLを見るかぎりアンティゴノスは、ヘラクレイデス(2.136; 143)、ポレモン(4.17)、クラテスとポレモンとアルケシラオスとクラントルの関係(4.22)、リュコン(5.67)、ストア派のゼノン(7.12)、ピュロン(9.62-3)、ティモン(9.110-112)について半ばゴシップ的な話を伝えており、思想にはほとんど触れていない。これは一般的に言って、伝記執筆者——かれらは哲学の系譜作家と対比される——の顕著な特徴であるが(Mejer, pp. 90-91)、しかし、アンティゴノスはとくにこの傾向が強いように思われる。DL 7.188を見ると、かれは著作目録作成にも関心があった。

[九] への註

- 1) アイネシデモスはクノッソス出身の懐疑哲学者。おそらく前1世紀の人で、アレクサンドレイアで教えた。もとアカデメイアの一員であったが、当時のラリサのピロンを学頭とするアカデメイアの非懐疑的な姿勢に失望、アカデメイアを離れ、ピロンの名のもとにピュロン派懐疑哲学を推進しようとし、十の方式や、八つの方式を表わした。著作には『ピュロン主義の議論』(Pyrrhōneioi logoi)、『ピュロン主義哲学の概要』(Hypotypōsis eis ta Pyrrhōneia)、『知恵を駁する』(Kata sophias)、『探求について』(peri zētēseōs)などがあった(cf. DL 9.106)。『ピュロン主義の概要』の要約が、ポティオスの『蔵書』第212冊に収められて現存する。

ピュロンに関するアンティゴノスの証言とアイネシデモスの証言とは、明らかに食い違っているが、われわれはどちらを採用すべきであろうか。アンティゴノスは時代的には近いが、思想よりもゴシップへの関心が強く、またアイネシデモスは哲学的洞察に優れてはいるが、アンティゴノスより約200年後の人である。またアイ

ネシデモスがピュロンの名を掲げて、懐疑主義を唱えた理由として、思想的な共通性よりむしろ、時代的に古く、著名でもあった人を創始者に据えようとした政策上の配慮を読み取る解釈もあり、詳細な研究を要する問題である。

[一〇] への註

- 1) ピュロンの弟子。前325/20-235/30の人。DL 9.109-115(「七七」)にその一部がある。[四八]も参照)にその伝記が記されている。プレイウスで生まれ、元々合唱隊の踊り手であったが、メガラでスティルポンの弟子となり、後にエリスに移って、ピュロンの弟子となった。ピュロンは何も著作を著さなかったが、ティモンが師の哲学を記した。後の人のピュロンに関する知識は主に、このティモンの著作から得られたものと考えられる。叙事詩、悲劇、サテュロス劇、詩など非常に多作であったが(DL 9.110)、題名さえもほとんど伝わっていない。散文で記されたピュロンとの対話篇形式の『ピュトン』、エレゲイア詩型の『インダルモイ』、またクセノパネスの風刺詩『シロイ』(横目、斜視の意)にならって制作され、クセノパネス自身が第2、第3巻において対話者として登場し、重要な役割を果たす『シロイ』(第1巻は独白形式)などの断片が現存する。『シロイ』では、ピュロン以外の哲学者をすべて、過去の哲学者も同時代の哲学者も含め、懐疑主義の立場から攻撃しているが、『アルケシラオスへの追善会食』という作品では、『シロイ』において攻撃の的にしたアルケシラオス(アカデメイアを懐疑主義に向け変えた学頭(前315頃-240頃))に称賛の詞を捧げている。

[一一] への註

- 1) 習慣から外れることのなかったのは、ティモンであるのか、それともピュロンであるのかという問題については、ここからだけでは不明。
- 2) 『インダルモイ』は「現われ」「幻影」を意味するが、これを懐疑主義者であるピュロンが行為の規準とした「現われ」とみなすべきか、それとも、哲学者たちの偽りの知恵が与える欺く幻影とみなすべきかという点については解釈が分かれている。詳しくはCaizzi, p. 251を参照。
- 3) 「行く」の主語は、Long & Sedley, vol. 2, p. 8に従って「現われ」と解さないで、「だれか人」と解した。
- 4) この点についてはセクストス『概要』第1巻19-20節を参照。

[一二] への註

- 1) セクストス・エンペイリコス(おそらく後2世紀)は、生涯不詳のピュロン派懐疑主義に属する哲学者、経験派の医者。ピュロン主義哲学を要約的に説明した『ピュロン主義哲学の概要』全3巻と、ピュロン派懐疑主義がドグマティスト諸派に対して起こった批判的議論を記した『学者たちへの論駁』全11巻を著した。『学者たちへの論駁』11巻の内、より具体的には、第7-8巻はより『論理学者たちへの論駁』と呼ばれ、第9-10巻は『自然学者たちへの論駁』と、第11巻は『倫理学者たちへの論駁』と、そして第1-6巻は固有の意味で『学者たちへの論駁』と呼ばれる。

ここでは『ピュロン主義哲学の概要』は『概要』と略記し、また他の著作はまとめて『学者たちへの論駁』全11巻とし、それを『論駁』と略記することにする。

- 2) 『概要』第1巻21-24節を参照。

[一三] への註

- 1) ガレノス（後129年頃 3世紀初頭）はペルガモン出身の医者にして哲学者。膨大な量の著作を著した。医学上の著作は多くが現存するが、哲学関係の著作はその多くが失われてしまった。
- 2) 医学上の経験派は、身体内を走る通路（細孔、poroi）等の不明瞭な物事は把握不可能であるとし、観察される物事の体験と、それから成立する経験に基づいて医学を構築しようとした。経験派の立場については、金山(2)を参照。

[一五] への註

- 1) パウサニアスは『ギリシア案内記』(Hellados periêgêsis)の著者。生涯不詳。小アジアのリュディアで生まれ、160年頃に活躍したと考えられる。
- 2) [一] では父の名はプレイスタルコスとされていた。
- 3) 「ソフィスト」という語は、前4世紀において、またティモンの証言においても、否定的意味合いをもった言葉である。しかし、後2世紀の第2次ソフィスト時代においては、弁論家（修辞学者）、文人、法律家など、広い範囲の教養人が、肯定的な意味で「ソフィスト」と呼ばれていた。パウサニアスが「ソフィスト」という語を像の台座の碑文から引用したにせよ、そうでないにせよ、後者の肯定的な意味でかれがこの語を用いたという可能性は高い(cf. Caizzi pp.162-3)。

[一六] への註

- 1) 欠文があると考えられる。

[一七] への註

- 1) Caizzi, p. 42は、この部分もアンティゴノスの書物に基づくものであると考えている。またHicks, vol. 2, p. 480, n. cも、DL 9. 67の終わりまで、おもに、アンティゴノスを最終的出典とする記述が続いているとみなす。DLに対するアンティゴノスの影響を大きく考えるこうした解釈は、Wilamowitz, pp. 28-29に遡るものである。かれは、DL 9. 63においてアンティゴノスの引用が始まり、ディオクレソスやエラトステネスに基づく記述も付け加えられるが、しかし基本的には、ティモンからの引用も含めて、アンティゴノスを典拠とする叙述が9. 67の終わりまで続いていると考える。確かにthêrathênai(「一七」), timêthênai, psêphisasthai(「一八」)など、不定法の使用は、引用が続いていることを示唆するし、またアリストクレスにおける同様の叙述(「二九」)との比較も、ここでの記述がアンティゴノスの書物に基づいている、という想定を促す。しかし、アンティゴノスの名前は、9. 62で現われて以来——9. 63において、phêsiの主語として考えられることは明らかなとしても——、9. 110まで、一度も現われないという点など（もちろん、はっきりとアンティゴノス

の名前を挙げる必要はないが)、アンティゴノスを典拠とする箇所を、WilamowitzやHicksのように広く拡大しようとする傾向に対しては、疑問を感じざるをえない。Wilamowitzが、許容される範囲を超えて、アンティゴノスを典拠とする部分を広げているのではないかという疑念は、一般的な形において、Mejer, p. 92, n. 62も表明しているところである。

- 2) Caizzi pp. 94, 182は、これを「質問に対する場合にも、長々と語ることができたから」と解している。しかし、このような解釈に対する反論として金山(1)を参照。
- 3) デモクリトスの伝統に連なる原子論者(cf. DL 1.15)。前360頃の生まれ。セクストス『論駁』第1巻2章(「六一」)によれば、ピュロンの弟子の一人であり、多くの学問、とくに弁論術に熱心であった。DL 9.69(「六九」), 102(「七五」)においてもピュロンの弟子に数えられているが、しかし、今取り上げている証言も語っているところであるが、学説的にはピュロンのそれを継承しなかったと考えられる。エピクロスの師であり(DL 9.69)、デモクリトス原子論とエピクロス原子論を連絡する人として注目されるが、しかし、エピクロス自身は師のナウシパネスを悪しざまに語っている(DL 10.78(「六〇」)); セクストス『論駁』第1巻2章(「六一」)。著作としては『三脚鼎』(Tripous)があった(DL 10.14)。
- 4) エピクロス(前341-271)はサモスの生まれ。デモクリトスの原子論を継承し、無動揺(平静さ、アトラクシア)を理想とする快楽主義を唱える。アテナイに落ち着いたのは前307年、庭園付きの家を購入し、思想を同じくする者たちとの友愛的共同生活を営んだ。

[一八] への註

- 1) [一七] への註1を参照。
- 2) 神官長については、例えばプラトン『法律』947ABを参照。

[一九] への註

- 1) pragmateuesthaiは「あれこれ手を出すこと、仕事に従事すること、苦勞すること、煩うこと」を意味するが、「無苦勞」と訳したapragmosunêはそれと反対の態度を指す表現である。「一七」において、ピュロンに対してナウシパネスが抱いた尊敬の念に言及されていたが、「一八」ではエリスの人たちがかれに注いだ敬意に触れられ、そしてここでは尊敬を勝ち得た理由が「無苦勞」を手掛かりにティモンの証言に言及しつつ具体的に述べられている。

ところで、「一七」への註1でも取り上げた問題であるが、このティモンの証言を、DLは、アンティゴノスから取ってきたのであろうか、それともティモンから直接引用したのであろうか、あるいは、他の人を介して引用したのであろうか。「無苦勞(apragmosunê)」との関連で言えば、アンティゴノスが、ティモンは自分のことに専念する人(idioprasmôn)であった、と述べていたという事実(DL 9.112)や、アンティゴノスはティモンの伝記を執筆したという事実は(DL 9.111)、アンティゴノスによる伝記を通してDLがこの箇所のティモンの証言を得た、という可能性を強く示唆する。しかし、DL 9.111と9.112の両方において、アンティゴノスの前に

「もまた (kai)」と記されているところからすると、DLは、アンティゴノス以外の人からも、ティモンに関する情報を得ることができたと考えられる。われわれとしては、差し当たっては判断を保留するしかないであろう。

なお「無苦勞 (apragmosunē)」について、Caizzi, p. 239は、デモクリトスの次の断片(DK 68B3)に注意を促している。

穏やかな(晴れやかな)心を保とう (euthumeisthai) とする者は、私的にも公にも、多くのことを行なってはならない。また何を行なうにせよ、自分に与えられた能力と自然のあり方を超えて、選択をしてはならない。むしろ大いに用心して、降りかかってきた運がさらにいっそう大きなものを指し示そうとも、自分の思いにおいてはそれを斥け、自分になしうる以上のことに携わってはならない。というのも、程よき荷は大いなる荷よりも安全であるのだから。(DL 9.45も参照。なお「降りかかって・・・斥け」の箇所は、「降りかかってきた運が、その人の思いにおいてはさらにいっそう大きなものを指し示す場合にも、それを斥け」と訳すことも可能。また「自分になしうる・・・」の箇所は、「自分になしうることに、必要以上に携わってはならない」とも訳しうる。)

この断片にはピュロンの懐疑的態度と通じるものが確かに認められる。とくに「選択をしてはならない」とか、「思いにおいてはそれを斥け」という言葉は、懐疑的態度を勧める言葉としても読みうる。さらに一般に「運」は幸運を意味すると解されるが、しかし幸運と悪運の両方を意味しうるものと解するならば、上記の断片はセクストスの『概要』第1巻27-28節と共通する点を多く含むことになる。Caizzi, p. 249も指摘しているように、ピュロンがこのデモクリトスの断片から何らかの示唆を得たということは十分ありうる。しかしその影響を過大視してはならないであろう。ピュロンとデモクリトスのeuthumiaに関しては[九二]も参照。

また「無苦勞」について、Caizzi, p. 249が参照している次の二つの断片も参照されたい(第二の断片については、Caizziが紹介するfr. 3だけでなく、fr. 4も訳出しておく)。

(1) メガラのエウクレイデスの言葉 (Döring fr. 11)

— 哲学者エウクレイデスは、だれかある人が、神々はいかなる方であり、だれのことを喜ばれるかと質問したとき、ほかのことは私には分からないが、しかし、苦勞の好きな人たち (philopragmones) をお嫌いになるというこのことは、確実に知っていると言った。

(2) オイノアンダのディオゲネス (後2世紀のエピクロス派) の断片 (Chilton fr. 3, 4)

— いく人かの哲学者たち、とくにソクラテス派の人たちは、自然学に携わり、空中の事柄に多くの苦勞を払うこと (polupragmonein) は余計なことである、と主張し、・・・こうした事柄に配慮するのを良しとしない。[しかし他のものたちは、] 自然学に携わってはならないということに同意するのを恥ずかしく思い、初めから[あえてそう発言をすることは] せず、自然学を振り捨てるための別の

やり方を採っている。というのも、かれらが「諸々の物事は把握不可能である」と主張することで意味しているのは、まさに「われわれは自然学に携わってはならない」ということ以外の何ものでもないからである。つまり、けっして発見できないものを、いったいだれが探求しようとするのであろうか。かくして、アリストテレス、およびアリストテレスと同じ立場に立つ人たちは、何ごとも知ることとはできないと主張する。というのも、かれらが言うには、物事はつねに流動し、流れの速さのゆえに、われわれの認識を逃れてしまうからである。しかしわれわれとしては、流動そのものには確かに同意するが、その流動が速すぎるため、各事物の自然的なあり方は、いついかなる時も感覚によって把握することはできないという点については、受け入れることはできない。というのも、もしもかれらの言うとおりであって、白さや黒さの自然的なあり方をあらかじめ知っているということが、かれらにないのであれば、そう考えるかれら自身、自分たちの主張、「ある時にはこれは白く、あれは黒いが、次の時にはこれは白くないし、あれも黒くない」を口にすることはとうていできなかつたであらうから。また、判断保留をされると言われている他の人たち——その人たちの明瞭な・・・（断片はここで途切れる）。

アリストテレスに関するディオゲネスの発言が奇妙であるため、ディオゲネスがAPK（アルケシラオス）とあるのをAPIC（アリストテレス）と間違えたとする解釈や（Sudhaus）、「アリストテレス」と「アイネシデモス」を取り違えたとする解釈（Usener, Crönert）が提出されているが、しかしまた「アリストテレス」で間違いなく、ディオゲネスは、プラトンの感覚世界の不可知性を主張していた初期のアリストテレスのことを考えていると推測する人（Bignone）もいる（cf. Chilton, pp. 40-41）。

- 2) Wachsmuth, pp. 28, 147、およびDiels fr. 48 (p. 196)は、この後に欠文を想定している。Caizzi, p. 249は、DLその人に欠文は遡ると推測している。Mejer, p. 16ff.をも参照。『ピュトン』と『シロイ』で同じ内容のことが記されているから、DLが一方を省略した可能性もある。その場合、該当する『ピュトン』の箇所は、断片は[三九][四三]が記している、ティモンがピュロンに対して、かれの生き方の秘密を尋ねる部分に相当すると考えられる。
- 3) 「ソフィストたちの思いなしと空しい知恵への奉仕から逃れる術」と訳すことも可能。「空しい知恵」と訳したのはkeneophrosunêであるが、この語は[二一]の「あれこれと思いをいたすことなく」（aphrontistôs）と同族の語である。「逃れる術」（ekdusis）については、[二八][二九]を参照。
- 4) Diels, fr. 48 (p. 197)は、自然学者たちの気象論および宇宙論を示唆すると解釈する。Lloyd-Jones & Parsons, p. 385は、むしろギリシア哲学者たちの間で流行している見解のことを言っているかもしれないと推測し、その場合は、Wilamowitz, p. 38に従い、「それぞれの物事（hekasta）」ではなく、「それぞれの流れ（風）（hekastê）」と書かれるべきであらうと言っている。なお、ホメロス『オデュッセイア』第16歌465行には「それらのことを調べてみたり、尋ねたりしようという気はわたしにはなかった」という、ティモンの手本になったと考えられる表現がある

が (cf. Caizzi, p. 250)、これが豚飼のエウマイオスの言葉であるという事実は、ティモンが意図していたかどうかはともかくとして、ピュロンが豚を市場に連れていくことも、豚を洗うことも意に介さなかったという証言〔二七〕と符合する。

〔二〇〕への註

- 1) Caizzi, p. 59にならって *anêr diageis* を読む。

〔二一〕への註

- 1) 〔二〇〕〔二二〕〔二三〕を元に復元された断片である。
- 2) 「あれこれと思いをいたすことなく」 (*aphrontistôs*) については〔一九〕への註 3 を参照。また、「静かに・・・あれこれと思いをいたすことなく (*meth' hêsuchiês . . . aphrontistôs*)」という表現は、Caizzi, p. 253 も指摘するように、プラトン『ゴルギアス』493Eにおいて、節度ある人は世にも稀な液体で甕をいったん満たすと、もはや「あれこれと思いをいたすことなく静かにしていられる (*mête ti phrontizoi, all' heneka toutôn hêsuchian echoi*)」と語られていた表現を思い出させる。
- 3) 「動かされることなく」という表現には次の二つの解釈が可能である。(1) いかなる感情も感ずることなく、(2) 動揺することなく。セクストスは『概要』第 1 巻 29 30 節において、ピュロン主義者も人間である以上、完全に煩いを逃れているわけではなく、寒さにふるえたり、喉が渇いたり、さまざまの情態をこうむるが、しかし、その状況が悪いものであると加えて思いなすことがないから、節度ある情態を保っていられると語り、このピュロン主義者の状態を「思いなされる事柄における無動揺 (平静さ、アトラクシアー)」と呼んでいる。解釈 (1) によれば、ピュロンは、後のピュロン主義者が人間であるかぎりは無理であるとみなし、自分たちも目的の位置に据えることはしなかった無感情の状態にまで到達していたことになる。他方、解釈 (2) によれば、ピュロンが体現していた状態は、ピュロン主義者が人間に可能であると考え、目的としていた状態と一致する。(1) と (2) のどちらを選ぶかという問題は、ピュロンの無情態 (*apatheia*) (〔二八〕〔三四〕〔八五〕) をどう解するかという問題とも重なる。
- 4) 「渦巻き」 (*dinois*) は Nauck の推測であり、写本は *deilois*。種々の読み方が提案されている。詳しくは Caizzi, p. 254 を参照。Long & Sedley, vol. 2, p. 10 も注意しているように、ここで記されているピュロンの生活態度は、静かで乱れることのない魂の状態を目的とするデモクリトスの立場 (DL 9. 45) と酷似している。ただし、その同じ DL 9. 45 において、デモクリトスはかれが「必然」と呼ぶところの渦動 (ディーネー) を万物の原因とみなしたと記されている。これは憶測の域を出ないが、もしも「渦巻き」をティモンが用いていたとすれば、ティモンは、ピュロンと共通した生き方を理想として掲げつつ、渦動・渦巻きに目を向けざるを得なかったデモクリトスを意識して、この言葉を用いたのかもしれない。
- 5) *helôn* ではなく、Stephanus による *elôn* を読む。
- 6) 太陽のこと。

[二三] への註

- 1) エペソス出身の哲学者。前540頃-480頃。箴言風の言葉が120余り現存する。ティモンはかれを「謎めいた物言いをする人 (ainiktês)」と呼んでいた (DL 9.6)。

[二四] への註

- 1) 「わたし」とはピュロンのことであり、ピュロンが「一九」「二〇」「二一」の問いに対して与えた答えであると、一般に解釈されている。
- 2) ここでは、「真理の物語り(muthon alêtheiês)」をereônの目的語として解した。この読み方については、Long, p. 85, n. 16; Burnyeat, p. 88, n. 10; Long & Sedley, vol. 1, p. 19; Caizzi, p. 109を参照。これに対して、例えばBrochard, p. 63は、この語をechônの目的語とみなし、「真理の言葉を正しい基準としてもちながら」と解する。しかしこの読み方だとピュロンは真理にコミットするドグマティストであることになってしまう — もちろん、あえてそうみなすのであれば話は別である。
- 3) 正しい基準について、Long & Sedley, vol. 1, p. 21は “the (i. e. ‘Pyrrho’ s’?) ‘correct yardstick’ the identification of divine and good with the constituents of equability... Equipose, not opinion or preference, is the yardstick he consistently employs” と言う。このLong & Sedleyの解釈はBurnyeatの解釈を踏襲したものであろう。Burnyeat, p. 89, “Grammatically, the clause hōs ktl. in 3 4 (つまり「神的なる・・・ということを」の節：筆者) is probably dependent on muthon alêtheiês in the first instance, but by implication it connects with kanona as well”を参照。しかし、わたしとしては（詳しい議論はまた別の機会に譲らざるをえないが）、「正しい基準」を「現われ」と解したい。これによれば、ピュロンの「正しい基準」は後のピュロン主義の規準と一致することになり、「正しい基準を手にして、その話がわたしに現われるままに」という言葉は、「現われが基準であるから、自分に現われるところを語る」という表明として理解される。
- 4) 「真理がわたしに現われるままに」と解する可能性もある(cf. Burnyeat, p. 88)。
- 5) Burnyeat, p. 88はこの部分について “The nature of the divine and the good <is> at any time [aiei] that from which [<tauta> ex hōn] a man’s life becomes most equable” という読み方を採る。これによれば、「神的なる物事と善なる物事の本性（神的なる物事、善なる物事というものは、いついかなる時も、人にとってこの上なく均衡のとれた生活が生まれるその元の物事のことなのである」という訳になる。しかしここでは別の読み方 — Burnyeatの表現にならって記すなら、“The nature of the divine and the good <comes> at any time [aiei] from that from which [<ek toutōn> ex hōn] a man’s life becomes most equable” — を採用した。

[二五] への註

- 1) Dielsは写本のnoôîを支持するが、「一」の内容と一致する表現としてnomôî(Hirzel)を読む。
- 2) Wachsmuth, p. 24, iv; Diels fr. 70; Lloyd Jones & Parsons fr. 844; Long &

Sedley 11. このティモンの言葉は『インダルモイ』からの引用と考えられる(cf. Long & Sedley, vol. 2, p. 8)。

- 3) ここから「第五章 諸々の善き物事と悪しき物事の自然的あり方について判断保留をする人は、あらゆる点で幸福であるのか」に入る。
- 4) Wachsmuth fr. 36; Diels fr. 63; Lloyd-Jones & Parsons fr. 837. おそらく『シロイ』からの引用。なおここで「支配していた」と訳したepeicheは、「判断を保留する」という意味でも用いられる言葉である。そこから、この用語はピュロン以降のものであるという説が有力ではあるが(「一」への註11を参照)、しかしなお、ティモンもこの意味でepochêを用いていたかどうかということが問題になりうる。Cf. Stough, p. 7, n. 10 (Caizzi, p. 248は否定的であるが)。
- 5) Wachsmuth fr. 37; Diels fr. 64; Lloyd-Jones & Parsons fr. 838. おそらく『シロイ』からの引用。「わたし」はティモンを、「その人」はピュロンを指す。

[二五(補足)] への註

- 1) アレクサンドロス大王(前356-323)。アリストテレスの教えを受け、アナクサルコスとも交わりがあったとされる。

[二六] への註

- 1) 「一」への註3を参照。
- 2) コテュスはトラキアの独裁者(前4世紀初頭の生まれ)。前360年(あるいは358年?)、アイノスのピュトンとヘラクレイデス(プラトンの弟子。DL 3. 46を参照)によって殺害された。したがって、[二六]の証言は間違いであって、「ピュロン」は「ピュトン」に訂正されるべきである。最初に誤記した人がだれであるか — ディオクレスか、それともMejer, p. 26, n. 54が指摘するように、DL自身、メモをとる際に符号を用いたことから混乱してしまったのか — は、不明である。誤記の一因は、ティモンがピュロンを称える著作のひとつが『ピュトン』であった点にもあるかもしれない。Caizzi, pp. 163-164を参照。

[二七] への註

- 1) エラトステネスは、前285/80頃-194頃のアレクサンドレイアの学者。キュレネで生まれ、キュレネとアテナイで学んだ後、プトレマイオス三世の招きでアレクサンドレイアに移り、宮廷の家庭教師となり、図書館長にもなった。自らをphilologosと呼んだ最初の人であり、文芸批評、文法、年代学、数学、天文学、地理学、哲学史などに関して多数の著作を著した。科学的手法に秀でた優れた学者であった。地球の回りの長さを非常に正確に計算したことでも有名。アテナイ滞在期間は約20年間であり、その際にキオスのアリストンの弟子にもなったと言われているが、それだけでなく、ティモンや他のピュロンの弟子とも交わった可能性は十分ある。このことからして、Caizzi, p. 164は、ここにカリュストスのアンティゴノスとは独立で、それよりも確かにより古い資料を認めることができていると考えている。アンティゴノスが、エラトステネスの資料を参考にしている可能性もあるかもしれない。
- 2) Caizzi, p. 34はこの最後の文も含めてEratosth. ap. Diog. Laert. IX 66と記し

ているが、しかし、最後の「言われている」がエラトステネスによって言われているかどうかは確実ではない。(1)エラトステネスによって言われている、(2)一般に言われている、(3)(あるいは次の「二八」がアンティゴノスの証言であり、「二八」で二回現われる不定詞eipeinがこの箇所の「言われている」によって支配されているとするならば)アンティゴノスによって言われている、という三つの解釈が可能。また(2)の場合でも、「一般に言われている」という報告をDLがだれから得たか、問題になりえ、(2-1)エラトステネス、(2-2)アンティゴノス、(2-3)不特定、という三つの可能性が可能である。

「二八」への註

- 1) Caizzi, p. 34はAntigon. ap. Diog. Laert. IX 66と記し、アンティゴノスの記事に基づくとする。確かに同様の記事をアリストクレスは、アンティゴノスに基づくものとして紹介している(「二九」)。しかしDLにおいては、はっきりとアンティゴノスを資料とするとは記されていない。むしろ、エラトステネスに基づく可能性もあるように思われる。エラトステネスの著作からアンティゴノスが引用し、アリストクレスはアンティゴノスを参考にしたが、しかし、同じ出来事に関して、DLはエラトステネスを直接参考にしていた、ということもありうるかもしれない。もちろん、DLがアリストクレス著作の内に、アンティゴノスによる証言を見出したという可能性もあるが、DLの中では一度としてアリストクレスの名前は挙げられておらず、したがって、DLはアリストクレスを用いることはなかったと考えるべきであろう(cf. Mejer, p. 28, n. 59)。「一七」への註1を参照。
- 2) Diels, p. 189およびCaizzi, p. 166は、妹に対して腹を立てたと解し、Caizziはさらに、腹を立てた事実にはピュロンの女嫌いの兆候を見る。しかし、姉妹のために怒ったと解する方がよいように思う(Hicks; Gigante; 加来を参照)。特にDL 9. 66で、姉妹の代わりに市場に行ったと記されているが、その事実にはピュロンの姉妹に対する気遣いが現われているとするならば、DLは、9. 67を9. 66の続きとして記している以上は、姉妹のために怒ったと解するのがふさわしいであろう。
- 3) ピュロンの言葉と考えられるが、しかし「完全に人間を脱却するのは困難である」と語った後、同じ場で続いて語った言葉であるのか、それとも日頃から語っていたからここで紹介されているのかは、よく分からない。

「二九」への註

- 1) アリストクレス(後2世紀)はシケリア、メッセネ出身のペリパトス派哲学者。アプロディシアスのアレクサンドロスの師。『哲学について』(Peri philosophias)を執筆、その中で過去の思想を振り返り、批判を加えるが、その断片がエウセビオスは『福音の準備』(Praeparatio evangelica)に引用されて現存する。「二九」もその一部である。
- 2) エウセビオス(後260頃-340頃)はパレスティナ出身。314頃、カイサレイアの司教となる。『教会史』が主要著作。『福音の準備』は異教哲学批判の書であるが、その中でヌメニオス、アリストクレスなどの哲学者や、歴史家、詩人の著作を多数引用しており、資料としても重要である。

3) 〈ti〉を補う (Wilamowitz)。

[三〇] への註

- 1) 「かれらは・・・伝える」とDLが言う場合に、一般の人のことを考えているのか、それともディオクレス (DL 9. 65)、エラトステネス (DL 9. 66)、あるいはアンティゴノスなど、特定のだれかのことも考えているのか、不明である。

[三一] への註

- 1) いかなる人かは不明。アポロンに三脚鼎を捧げた人として銘文に名前が残っている人か? (cf. Diels p. 270, addenda)。ティモンの説明はかれの著作『ピュトン』における説明だと考えられるが、『ピュトン』はピュト(Pythô)の地に向かう際にピュロンとティモンが交わした問答が記されているが([四三])、ピュトは古くはピュトン(Pythôn)とも言われており、ここで人名とされているピュトンが地名のピュトンであるという可能性は、ひょっとしてないであろうか?? (この場合には「ピュトに向かって進む際に語るその説明の中で」という意味になる。ただし、地名のピュトンはアクセントが最後にあるが、人名のピュトンは最初にある。) この可能性が斥けられるべきであるとしても、ティモンが、地名のピュトと、人名のピュトンの共通性を意識して、題名に後者を採用したということは、ありそうである。

[三二] への註

- 1) DL 9. 69([六八])で言及されているピロンと同一人物であろう。Caizzi, pp. 171-172は、ピロンの言葉がアンティゴノスから取られてきているという可能性も、[四七]からするとありえないことではないとしている。
- 2) おそらく前8世紀。『イリアス』『オデュッセイア』の著者。
- 3) 『イリアス』第6歌146行。
- 4) hoti節を理由を述べるものと解して、「またホメロスが人間たちをスズメバチやハエや鳥に譬えたことで、ホメロスをたたえた」と訳すことも可能である。『イリアス』第12歌167行や、第17歌570行に、そのような譬えは確かに見られる。本文では、hoti節を直接ピロンが述べた内容と解した (Caizzi, pp. 89, 173も同様)。ただしその場合でも、ピュロンが人間を虫や鳥に譬えたというピロンの言葉が、ホメロスの二つの詩句の間に位置しているという事実は、ピロンの考えでは、ピュロンの譬えはホメロスの影響を受けたものであった、ということを示唆する。
- 5) 『イリアス』第11歌106-107行。命乞いをするプリアモスの息子リュカオンに向かって、アキレウスが語る言葉。

[三三] への註

- 1) Caizziはこの証言を[三〇]の後に置き、アンティゴノスやエラトステネスの証言(つまり、[二七]と[二八])に対応するコメントであり — ただしポセイドニオスが、アンティゴノスとエラトステネスのどちらに依拠しているか正確には決めがたい — 、さらに、[三四]のプルタルコスの証言はこのポセイドニオスから得られたのであろうと推測する (pp. 169-170)。最初の点について言えば、確かに、[二八]

における「人間からの脱却」に対応させて、[三三]を、恐れを感じず人間的心のあり方を脱却したピュロンの態度を表わす証言として解することもできる。また子豚を例に用いている点も、[二七]との関係を示唆する。しかし、DLの叙述の流れからすると、むしろ、直前の[三二]のピロンの証言と関係づけ、不確かな生にしがみつき、諸々の虚しい物事を熱心に追い求め、死を前にして狼狽する人々のあり方との対比が意図されている、と考えるべきであろう。ピュロンは人間そのもの（人間の自然的あり方）を脱却し去っているというよりは、ピロンの言うとおり、人々の虚しい熱心、子供じみた仕業を超越しているものであり、そのことをDLは、ポセイドニオスからの直接の引用によって確認しているのである。Edelstein Kidd, vol. 2, p. 976は、DLが第7巻ではポセイドニオスを頻繁に引用するものの、第7巻以外の箇所ではこの箇所と9.34でしか、かれを引用していないことに着目、DLがポセイドニオスを引用せざるをえなかったのは、アンティゴノス等のうちにはこのエピソードを見出すことができなかったためであろうと推測し、また、ポセイドニオスは、さまざまな逸話を伝える前21世紀の著作から、自分の倫理学的著作において利用すべく引用したのである、と言っている。

- 2) ポセイドニオスは、前135頃 前50頃のストア派中期の哲学者、科学者、歴史家。シリアのアパメイア出身。アテナイでストア派のパナイティオスに学ぶ。後にロドスに定住し、ストア派の学校を開いた。ストア派には珍しく、実証的精神の持ち主であり、地理学、民族学、数学、天文学、気象学、歴史といった領域にわたり、広い関心をもっていた。また、他学派の思想も取り入れ、正統ストア派の批判も行った。研究分野の広さはアリストテレスにも匹敵し、キケロ、セネカ、ストラボン等にも影響を与えた。

[三四] への註

- 1) プルタルコス、後46頃 120頃の中期プラトン派に属する哲学者、伝記作家、歴史家。ボイオティアのカイロネイアの生まれで、『対比列伝』『倫理論集』で有名。
- 2) ボリュステネスのビオンは、前325頃の生まれ。かれの伝記については、DL 4.46 58を参照。アテナイで種々の哲学を勉強したが、犬儒派に一番親近感をもっていた。DL 4.51 52によると、最初、アルケシラオスの先代の学頭であるクラテスの弟子となったが、その後、無情態（apatheia）のための装いとしては他の何も必要ではないという理由で、擦り切れた衣服とずだ袋をもって、犬儒派の生き方を採用したということである。その後も、テオドロスの考えに向かったり、テオプラストスの講義を聴いたりしたようである。
- 3) 「かれら」と訳したが、ひょっとして特定の人たちを指すことなく、一般の人々を指すのかもしれない。[三三] への註1に記したCaizziの指摘のとおり、プルタルコスが、例えばポセイドニオスから情報を得て、自分流に書き換え、「かれら」という曖昧な言い方をしたという可能性もある。

[三五] への註

- 1) ここのヌメニオスの候補としては、二人の人が考えられる。一人は、[七五]で言及され、ピュロンの仲間の一人とされているヌメニオスである。もう一人は、アパ

メアのヌメニオス（後2世紀）であり、プラトン・ピュタゴラス的な思想をピュタゴラスにまで遡るものとして理解し、また発展させ、オリゲネスや、プロティノス、ポルピュリオスなど、後の新プラトン派に影響を与えた哲学者である。後者は、著作として、『善について』（*Peri tagathou*）や、アカデメイア派がいかにプラトンの精神から遠ざかっているかを記した『プラトンに対するアカデメイア派の隔たりについて』（*Peri tês tôn Akadēmaikôn pros Platōna diastaseōs*）がある。[三五]のヌメニオスが、ピュロンの弟子のヌメニオスであるか、アパメアのヌメニオスであるか、という問題については、アパメアのヌメニオスとする解釈もあるが、しかし、アパメアのヌメニオスは、DLより少し前の人であるものの、DLがこの人に言及している箇所が他に一カ所もないところからして、言及されているのは、ピュロンの仲間のヌメニオスであると考えられるべきであろう（cf. Caizzi, p. 204）。このピュロンの仲間のヌメニオスが、具体的にいつの時代の人であるかは、よく分らない。ピュロンの弟子の一人であるとも考えられるが、しかし、そこで挙げられている人の中にはアイネシデモスの名も見られるところから、もっと後の懐疑主義者である可能性も高い（cf. Zeller, III/1, 500, 1）。Dörrie（*Der Kleine Pauly*, vol. 4, p. 194）は、このヌメニオスを、ピュロンではなくティモンの弟子と記している。普通名詞としてのヌメニオス（*noumēnios*）は、鳥の一種（シギの仲間）を指すが、ティモンは、ヌメニオスを、やはり鳥の一種（シャコの仲間）を表わすアッタガス（*attagas*）とともに用い、思惟による確証を得た諸々の感覚を受け入れる人たちのことを「アッタガスとヌメニオスが集まってきた」（類は友を呼ぶ）と言っていた（DL 9.114）。古くから、アッタガスとヌメニオスは有名な泥棒の名前だとされているが、しかしまた、ティモンと同時代に生き、仲間でもあった懐疑主義者のヌメニオスが、懐疑に徹底せず、思惟によって確証された感覚を受け入れている点を皮肉っているとも解釈できる（cf. Wilamowitz, p. 32, n. 8; K. v. Fritz, RE XVII, 1295）。そしてここからさらに、次のような解釈もなされている — (1)ヌメニオスはピュロンの弟子であったが、ドグマティストに転向して、そればかりか、ピュロンもドグマをもっていたとあえて主張しようとした。あるいは、(2)ピュロンの弟子にとどまったものの、ドグマティズム的傾向のゆえに、ピュロンをも自分の思想の枠組みでとらえようとした。後者の解釈の一例としては、例えば、ピュロンが諸々の感覚のうち、思惟によって確証される感覚には従いつつ生きているのを見て（[九]を参照）、その点において、自分と同じくドグマをもっていたと考えたと推測することもできる。Caizzi, p. 204を参照。

[三六] への註

- 1) エウセビオス『福音の準備』は、『哲学について』でアリストクレスが行なっている議論を、次のような順序で引用する。

第17章：感覚を斥けたクセノパネス、パルメニデス、ゼノン、メリッソス、ステイルポン、メガラ派などに対する反論。

第18章：何ものも把握できないと主張したピュロンの徒に対する反論。

第19章：感覚だけが把握可能であると言った、アリスティッポスの学派に対する反論。

第20章：感覚だけが信用できると主張したメトロドロスやプロタゴラスの学派に対する反論。

第21章：善を快樂と規定したエピクロス派に対する反論。

〔三六〕は、第17章でアリストクレスの議論を紹介した後を受けて、エウセビオス自身が説明を加える部分である。それに先立つアリストクレスの議論においては、まず最初に、感覚と表象を斥け、理性（言論）だけを信用すべきであると考えた人々 ― クセノパネス、パルメニデス、ゼノン、メリッソス、スティルポン、メガラ派 ― の立場が、有るものただひとつだけを立て、異なるものを否定し、生成や消滅、動を否定する一元論の立場として、要約的に提示され、ついで批判が次のような仕方で行なわれていた ― 理性は最も神的なものであるかもしれないが、しかし、人間には感覚も必要である。感覚している人は、何かある情態を受動的に受け取っており、そして受動的情態を知っている以上、感覚が本来的に真実を告げるものであることは明らかである。さらにまた、感覚することが、何かから作用を受けることであるとするならば、作用を及ぼすものが別にあることになり、かくして、異なると言われるものは存在することになる。ここからして、存在するものは一つしかないわけではないし、また感覚がある以上、動もあることになる。また狂気に陥っているのでもなければ、人は感覚を捨てようとは思わないはずである。もしも、感覚を非難するその教えを、他の人たちにも信じてもらおうとするならば、感覚をまったく顧みないという仕方、実際の行為でその教えを示すべきである。もしもそうしないのであれば、かれらは言論（理性）では感覚が役に立たないと言いつつ、実際の生活においては感覚を使い続けていることになる。現われの存在を否定し、感覚を論駁するメリッソスも、実は現われそのものを利用しており、感覚も信用しているのである。こうしてアリストクレスは、メリッソスの議論はすでに廃れてしまった議論であると言ひ、正しい哲学のあり方は、感覚と理性の両方を認識のために用いる立場である、と主張する。そしてそれを受けて、エウセビオスは〔三六〕のように語るのである。

- 2) コロポンの人（前580頃 470頃）。懷疑主義的な発言もしたが、しかし思弁的な理論も推し進めたために、ティモンによって「半謙遜家」と呼ばれた（セクストス『概要』第1巻223-225節参照）。
- 3) ピュタゴラスは、前6世紀の哲学者。伝承によると、イオニア地方、ミレトス対岸のサモス島で生まれたが、40歳の時、ポリュクラテスの僭主政（540-22頃）を嫌って、南イタリアのクロトンに移住し、数学的神秘思想を奉ずる、宗教的学問的な教団を創設した。教団は南イタリアの一大勢力となるが、晩年、クロトンの有力者キュロンの一派の迫害に遭い、ピュタゴラスはメタポンティオンに逃れ、そこで没した。ピュタゴラス自身は何も書き残さなかったが、早くから神格化され、その教説がアークスマタ（字義通りは、聴かれた事柄）として、教団内で口伝えされていくにつれ、後の人の考えもかれのものとされるに至った。基本思想としては、魂の諸々の肉体への輪廻転生から、浄めによって魂を解放すべきことを説き、そのために、宇宙（コスモス、秩序）の内に成立している数学的、音楽的調和を認識することを重視した点を挙げることができる。プラトンに大きな影響を与えた。
- 4) アナクサゴラス（前500頃 428頃）は、クラゾメナイの出身、20歳頃から約30年

間アテナイで暮らしたが、友ペリクレスの政敵によって無神論のかどで訴えられ、ランブサコスに逃れ、そこで没した。無限に微小で、無限に多種多様な事物（アリストテレスが「ホモイオメレー（同質部分的なるもの）」と呼んだもの）を物質的原理として立て、それに動きを与えるヌース（知性）を設定して現象の変転を説明したが、実際の説明は、プラトン『パイドン』に登場するソクラテスにとっては、ヌースをせっかく生成消滅の原理として立てながら、肝腎の部分では利用しなかった点で、大きな失望を与えるものであった。〔三六〕において、アナクサゴラスを、クセノパネスやピュタゴラスと同時代の人としているのは正しくない。

- 5) パルメニデス（前515頃 450以降）は、南イタリア、エレア出身の哲学詩人。叙事詩形式（ヘクサメトロス）を用いた唯一の著作である哲学詩において、「ある」と「あらぬ」の厳格な区別のもとに生成消滅を否定し、その後の哲学者に、論理の要請に従いつつ、いかなる仕方で生成消滅を説明するかという問題を突き付けた。
- 6) メリッソス（前440年頃が盛期）はエレア派最後の重要な思想家。アリストクレスは間違っってメリッソスをゼノンより先に置いており、メリッソスとゼノンを混同しているように見受けられる。パルメニデスの思想を受け継ぎつつ、いくつかの細かい点を修正した。また、空虚の存在を否定し、そこから動は存在しないとする議論も行なった。
- 7) エレアのゼノン（前490頃 445以降）は、パルメニデスの弟子（約25歳年下）であり、生涯不詳であるが、プラトン『パルメニデス』によれば、存在を一とするパルメニデスの議論を擁護する書物を著し、多を想定する場合に相矛盾した帰結が導かれることを示してみせた。またアリストテレス『自然学』は、ゼノンの「動」に関するパラドクスを四つ（「二分分割」「アキレウス」「矢」「走路」）紹介しており、多の論駁の書と「動」のパラドクスの関係が、解釈上の大きな問題となっている。無限分割に関するかれの議論は、原子論者に分割不可能なアトモン（原子）を想定させる一契機となったし、前提から相矛盾する結論を導き出す議論法は、プロタゴラスに影響を与えた。アリストテレスによって「問答法（ディアレクティケー）の最初の発見者」と位置づけられている。また〔三八〕では争論的（エリスティケー）哲学の祖として語られている。
- 8) レウキッポス（前480/70頃の生まれ?）は古代原子論の創始者。具体的生涯は不明だが、おそらく、ミレトスの出身。エレアあるいはアブデラの出身という伝承もある。エレア派のメリッソスが、空虚の存在を否定することによって動の存在を否定した論理を継承し、逆に、空虚の存在を積極的に肯定することで動の存在を救ったが、その意味で、エウセビオスが、原子論の祖のレウキッポスを、ゼノン（実はメリッソス?、註6を参照）の弟子と認定しているのも理解可能である。
- 9) プロタゴラス（前490頃 420頃）は、トラキア地方アブデラ出身の長老格のソフィスト。アテナイを何度か訪れ、ペリクレスとも親交を結んだが、アテナイの援助によって南イタリアに植民都市トゥリオイが建設されるに際しては、かれが法律を起草したと伝えられる。著書の『神々について』の中では、「神々については、存在するとも存在しないとも、また、どのような姿であるかということも、わたしは知りえない」という、神に関する不可知論的立場を表明、また『真理』の中では、「人間は万物の尺度である。あるものについては、あるということの、あらぬものにつ

いては、あらぬということの」という、相対主義的立場を提唱した。プラトンの『プロタゴラス』に、彼の人物像がよく描かれている。また『テアイテトス』ではこの相対主義が検討、批判されている。

- 10) ネッサス（またはネッソス）は、ここで記されているとおり、デモクリトスの弟子、メトロドロスの師であり、またメトロドロスと同じくキオス出身の人である（DL 9.58）。
- 11) スミュルナ（一説ではキュレネ）のディオゲネスは、この箇所およびDL 9.58で語られているとおり、メトロドロスとアナクサルコスを結ぶ人物。レウキッポスやデモクリトスと同じく、感覚的諸性質はノモス（習わし）の上のことにすぎないと考えたとされる（Diels, DG, p. 397）。
- 12) アリストクレス『哲学について』のこと。

〔三七〕への註

- 1) アレクサンドレイアのクレメンス（後150頃 211/6）は神学者。おそらくアテナイの生まれ。異教の両親のもとに生まれたが、後にキリスト教に改宗、アレクサンドレイアの教理学校に学び、同学校を継いで教育にあたったが、202年、セウェルス帝による迫害に会い、アレクサンドレイアを追われた。『ギリシア人への勧告』、『教育者』、『ストロマテイス（雑録）』などが現存するが、かれの書のうちには、ギリシアの文献からの引用が多く認められる。

〔三八〕への註

- 1) Dielsが採用するou (AB)を読むと、ここに表わしたとおりの訳になるが、ouではなくhos(D)を読むと、「クセノパネスの後でかれの企図に賛成した人にはパルメニデスがいるが、このパルメニデスは、より不明瞭な物事の領域に足を踏み入れたように思われる」という反対の意味になる。
- 2) 次に来るアナクサルコスに関する記述は写本においては、エリスのパイドンへの言及の後に（Diels, DG, p. 600.18）位置していたものであるが、この箇所にDielsによって移された。しかしなお、Dielsが指摘しているとおり、欠落があると思われる、アナクサルコスへの言及の前には元々、「〔三六〕と〔三七〕の資料でプロタゴラスとアナクサルコスの間に置かれている人たちの名前があったことが推測される。
- 3) 「哲学 (philosophias)」の後、なお文が続くという想定のもと、このように訳したが、もしも文がここで終わっていたとしたら、「懷疑哲学に属しており」という訳になる。またDielsは、Aを採用してonを読んでいるが、もしもBNに従いontiを読むとすれば、「懷疑哲学の・・・である（あるいは懷疑哲学に属す）」はピュロンを修飾する語になる。

〔三九〕への註

- 1) auではなく、Dielsが推測しりautoiを読む。
- 2) アリストテレス（前384-322）の反論については、例えば『形而上学』第4巻1010b4-11を参照。
- 3) ティモンの対話篇形式の作品『ピュトン』であると考えられる。Cf. Long, p. 83,

n. 6; Caizzi, p. 220; Ferrari, p. 271; Stopper, p. 271; Long & Sedley, vol. 2, p. 6.

- 4) Long & Sedley, vol. 1, p. 15のように、“unmeasurable”と訳す可能性もあるが、しかし、LSJ, s. v.; Caizzi, p. 224を参照。
- 5) 「判定不可能」と訳したanepikritosの、ピュロンと同時代、あるいはそれ以前の用法は他に見当たらず、ティモンの作品中では用いられていない可能性が高い。Cf. Caizzi, p. 224.
- 6) 別の訳の可能性としては、「あらぬとか、ありかつあらぬとか、あることもあらぬこともない、よりも、よりいっそう多くある、ということはない」という訳し方も可能である。Long, HP, p. 81やLong & Sedley, ad. loc. は、本文で採用した訳をとっている。Stough, p. 17, p. 27, n. 23は両方の可能性を認める。詳細はCaizzi, p. 229; Stopper, pp. 272-4を参照。あるいは、どちらかの読み方に決定するのが、そもそも不可能であり、ティモンはここにou mallonの一例 — (この読み方よりも) よりいっそう多く (あの読み方であるということ) はない — を示そうとしたのかもしれない。なお、ou mallonが意味するところに関しては、セクストス『概要』第1巻第188-191節を参照。また次の〔四〇〕も参照。
- 7) 「無主張 (aphasia)」については、セクストス『概要』第1巻192-193節を参照。
- 8) この箇所の解釈については金山(1)を参照。
- 9) 「『何ゆえに』そのものは何ゆえなのか」と訳した部分について。ほとんどの写本はkai auto to dia tiとだけ記し、dia tiを二度繰り返していないが、Diels, p. 176はdia tiを二度繰り返し、kai auto to dia ti dia tiとしている。ここではDielsに従って訳した。しかし、kai auto to dia tiだけを読んで、「『何ゆえに』そのものは(どうなのか)?」という意味で解することも可能かもしれない。

なお、この箇所に関連して「『何ゆえに』そのものは何ゆえなのか」を、ティモンの言葉に含めるかどうかが問題になる。「『何ゆえに』そのものは何ゆえなのか」が反論の意味をもつとするならば、これはアリストクレスの反論的付け加えであると解されるであろう。他方、断言と解される表現の断言性を、ペリトロペー（反転・覆し）的に無効にしようというティモンの意図があるとすれば、この言葉をティモンの発言と解する余地もあることになるだろう。しかし、普通に考えた場合、「何ゆえに？」自体には断言性はないから（セクストス『概要』第1巻189節参照）、「何ゆえに？」という表現の断言性を無効にする必要を、ティモンは最初から感じなかったとも思われるのであり、やはりアリストクレスの反論的（言い掛かり的？）付け加えと考えた方がよさそうである。

〔四〇〕への註

- 1) Diels fr. 80. なお「無同意である」と訳したのはaprostheteinであり、内容的にはepecheinと同じであるが、ここでepecheinが用いられていないのは、まだこの語が懐疑主義の語として確立していなかったためであろうと、Long & Sedley, vol. 2, p. 7は推測している。

〔四一〕への註

- 1) アウルス・ゲリウス（後130頃-180頃）は『アッティカ夜話』(Noctes Atticae) 全20巻（一部を除いてほとんどが現存）の著者。同書には、哲学、歴史、法律、文法、文芸批評等の著作や議論を取り上げて論じた多数の小論が雑然と集められている。元の著作が伝わっていない著作について、その内容を知るための重要な資料である。
- 2) この文からアウルス・ゲリウスの生きていた頃（後130頃-180頃）には、「スケプティコス」(scepticの語源)の意味が「考察者」「探求者」から「懐疑主義者」に移行していたことが知られる。
- 3) 「 」の部分は、「これが、かのようなあり方をしているよりも、よりいっそう多くこのようなあり方をしていることはない、あるいは、いずれのあり方もしていない」と訳すこともできる (Rolfe, ad. loc. ; Caizzi, pp. 105-6)。
- 4) ファウオリヌス（後80/90頃-2世紀中頃）は、ゴール地方アレラテで「睨丸なくして生まれた」弁論家。ギリシア語は母国語ではないが、マルセーユでギリシア語教育を受け、ギリシア語で著作した。弁論術と哲学の高い知識ゆえにハドリアヌス帝の覚え、目出度かったが、しかし後に疎んじられて、130年頃キオスに追放されるが、ハドリアヌス帝の死後ローマに帰り、同地で没する。去勢状態であったにもかかわらず、姦通で訴えられたこと、ゴール地方の生まれにもかかわらず、ギリシア語で話し、著作したこと、ハドリアヌス帝の怒りを買ったにもかかわらず、生き続けたことを誇りとしていた。
- 5) Annas & Barnes, p. 28 (和訳48-49頁) 参照。

〔四三〕への註

- 1) デルポイのある地域。
- 2) アンピアラオスは、アルゴスの英雄、予言者であって、オイクレスの子供（アポロンの子という伝承もある）。七将のテバイ攻めにおいて、アドラストスしか生きて帰還できないことを予言していたが、妻エリピュレの説得で、かれ自身もいやいや出陣、敗走の際に、ゼウスの稲妻が開けた地面の裂け目に飲み込まれた。アッティカとボイオティアの国境にあるオロボスの町に、夢占いで有名なアンピアラオスの神殿があった。
- 3) 「どういうことか？(ti... ;)」という問いに関しては、セクストス『概要』第1巻189節を参照。
- 4) Caizziの採用する to dia tiではなく、DielsやHeilandが採用している tote, diotiを採用する。

〔四四〕への註

- 1) 『概論』(Stoicheiōseis)というのは、4. 18. 11の Hupotupōsis、つまり DL 9. 78の He eis ta Purrhōneia hupotupōsis であると思われる。
- 2) ti mēnではなく、ti hēminを読む。
- 3) Wachsmuth fr. 35; Diels fr. 8; Lloyd-Jones & Parsons fr. 782; Long & Sedley 2A. 『イリアス』第3歌223行「オデュッセウスに対しては、他のいかなる死すべき者も争いえないであろう」のパロディであり、『シロイ』からの引用と考えられる。

- 4) コロイボスは、プリュギアの人。プリアモスの娘、カッサンドラへの求婚のためトロイアに赴き、彼女と婚約するが、同市陥落の際に、ディオメデス（あるいはネオプトレモス、あるいはまたペネレオス）によって殺害される。カッサンドラの勧告に従わなかったため、プリアモスを救出できなかったところから、「コロイボスよりも間拔けな」(Koroibou êlithiôteros)とか「コリュボスよりも愚かな」(môroteros Korubou)という諺が生まれたと言われる。15世紀の俚諺家であるMichael ApostoliusのCollectio paroemiarum X. 3によると、「『コロイボスよりも間拔けな』というのは、この人が海の波を数えたため」ということである。メレティデス (Melêtidês) については、アリストパネス『蛙』989行に「メレティデスたち(Melitidai)」という表現が出てくる。具体的人物は特定できないが、五までしか数えることができなかったとか、親がだれか知らなかったとか、結婚のとき姑が怖くて花嫁に触れることができなかったといった逸話が伝えられている。

なお〔四四〕の最後の文で、「よりいっそう多くはない(ou mallon)」とか、「抜きん出ている(違いがある:dienenkein)」という表現——「無差別(adiaphoria)」の否定——を使うことで、アリストクレスは懷疑主義者を皮肉っているように思われる。

〔四五〕への註

- 1) Wachsmuth fr. 32; Diels fr.9; Lloyd Jones & Parsons fr. 783; Long & Sedley 2B.
- 2) all'hoion tonという書き出しは、ホメロス『オデュッセイア』第11歌（冥府行）519行のパロディ。「謙遜なる方」と訳したのはatuphosであるが、字義どおりには「tuphos（思い上がり）なき人」という意味。ティモンはクセノパネスのことをhupatuphos（幾分かatuphos、半謙遜家）と呼んでいる。〔四六〕を参照。
- 3) 「支配から自由な」と訳したのはadamastosであるが、この語はホメロス『イリアス』第9歌158行では、冥府の王を形容するために用いられている。
- 4) ヘシオドス『仕事と日』第3行を参照。

〔四六〕への註

- 1) プラトン（前427-347）のアカデメイアは、後にアルケシラオスのもと、懷疑主義に転ずることになったが、確かにプラトンの哲学には、初期対話篇では、ソクラテス（プラトン）が探求をアポリアーに終わらせる点、『テアイテトス』では知識探求が挫折に終わる点、さらに『パルメニデス』ではそれまで支持してきたイデア論に対して反論を行なう点など、懷疑主義的側面、あるいはむしろ、永遠に探求、考察（スケプシス）を続けようとする側面があった。しかしまた、〔四六〕本文を参照。
- 2) Wachsmuth fr. 45; Diels fr. 59; Lloyd Jones & Parsons fr. 833.
- 3) Wachsmuth fr. 40; Diels fr. 60; Lloyd Jones & Parsons fr. 834.

〔四八〕への註

- 1) kak' elencheaという表現についてはホメロス『イリアス』第5歌787行、またヘシオドス『神統記』26行には、ここと同じくkak' elenchea, gasteres oionという表現が現われる。
- 2) Wachsmuth fr. 33; Diels fr. 10; Lloyd Jones & Parsons fr. 784. なおエンペドクレス断片124、第2行 DKには「このような争いと、このような呻きとから汝らは生まれてきたのだ」という目下問題の断片の元にあると考えられる一節がある。
- 3) Wachsmuth fr. 34; Diels fr. 11; Lloyd Jones & Parsons fr. 785; Long & Sedley 3B.

〔四九〕への註

- 1) テオドレトスは、後393頃 466頃のキュロスの司教。

〔五〇〕への註

- 1) キュレネ出身のアリスティッポス（前435頃 355頃）は、ソクラテスの親しい仲間の一人であったが、ソフィストでもあり、仲間の中で最初に報酬をとって教えた。身体的快楽を人生の目的とする快楽主義で有名なキュレネ派の祖であるが、ただし同名の孫を祖とする説もある。

〔五二〕への註

- 1) 以上の記述は、エウセビオスが『福音の準備』第14巻を振り返って議論を要約したものである。

〔五三〕への註

- 1) ヘゲサンドロスはデルポイ出身の人。少なくとも6巻からなる『覚書』(Hupomnēmata)を著した。ほとんどの断片はアテナイオスを通して伝えられる。伝えている出来事のうち、最も新しいものでも前2世紀半ばのものであるところから、それ以前に活躍したと考えられる。
- 2) アテナイオス（160頃の生まれ）は、ナイル河口のナウクラティス出身。失われた諸々の作家の著作の引用も含め、情報満載の書物『ダイプノソピスタイ』全15巻（第1巻から第3巻の始めまでは失われた）を著した。
- 3) ティモテオスは、前4世紀のアテナイの将軍にして政治家。イソクラテスの弟子でもあった。前356年にキオスを攻めた際、同僚の将軍カレスを助けることができなかったため、裁判で100タラントンの罰金を課せられたが支払うことができず、アテナイを去って、前354に亡くなった。
- 4) Kaibelの推測により〈men, phortikōs〉を読む。
- 5) 写本のeuergetein（好意を示す）をそのまま読む。euairetein（Meyer）を読むと「多量の備えられたもので満足するよりは、われわれ自身の交わりで満足する方が・・・」という意味になる。Caizzi, p. 89は、テキストではeuergeteinを記しつつ、noi godiamo della nostra reciproca compagniaと訳している。

〔五四〕への註

- 1) ストバイオスは多くの作家からの引用を含むアンソロジーの作者。おそらく後5世紀。
- 2) DL 1.35では同様の問答をタレスが行なったと伝えられている。

〔五五〕への註

- 1) エウリピデス『テメノスの息子たち』(Frag. 734 Nauck)。
- 2) 〈hoposa de deitai grammatikês〉(Bury)を読む。
- 3) アレクサンドロス大王(前356-323)のインド遠征に、ピュロンがアナクサルコスとともに随行したという証言については、〔一〕を参照。
- 4) 『ピュロン主義』(Ta Purrhôneia)というのは、『ピュロン主義哲学の概要』のことであろう。セクストスは同書第1巻の第10の方式において、生き方と、習慣と、法律と、神話への信仰と、ドグマティストの想定の間で対置を行なうが、その際、神話への信仰の具体的な事例をもってくるために、頻繁にホメロスを引用しているのである。

〔五六〕への註

- 1) Menagiusは、「二五(補足)」との比較からharmonikon(調和ある)をeudaimonikon(幸福な)に読み替える提案をしている。
- (*) 固有名詞索引により、レウキッポス、デモクリトス、メトロドロス、アナクサルコス、ナウシパネス、エピクロスなども参照のこと。

〔五七〕への註

- 1) アリスティッポスなど、受動的にこうむる情態だけが把握可能であると主張する一派。〔五一〕を参照。
- 2) 〔五一〕を参照。
- 3) Eusebius, *Praeparatio evangelica*のヴァージョン(oudeis hêmôn ouden oiden, oud'auto touto, poteron oidamen ê ouk oidamen)と、次に示すセクストスのヴァージョンは少々形が違っており、後者ではouen ismen, oud'auto touto ismen hoti ouden ismenとなっている。さらにCicero, *Academica* 2.23.73-74では、is qui hunc maxime est admiratus Chius Metrodorus, initio libri qui est De natura, 'Nego', inquit, 'scire nos sciamusne aliquid an nihil sciamus, ne id ipsum quidem, nescire aut scire scire nos, nec omnino sitne aliquid an nihil sit.と記されており、DK 70B1は、Eusebius, *Praeparatio evangelica*の問題の箇所を、このキケロのテキストを参考にして、oudeis hêmôn ouden oiden, oud'auto touto, poteron oidamen ê ouk oidamen (oud'auto to mê eidenai kai to eidenai oidamen (hoti estin) oud'holôs poteron esti ti ê ouk estin) (Diels + Friedländer)と記している。
- 4) この後、アリストクレス『哲学について』からの引用が再開される。
- 5) 第7巻48節でセクストスはとりあえずこれら3人の名前を挙げていた。

- 6) モニモス（前4世紀）は、シュラクサイ出身の犬儒派哲学者。ディオゲネスとクラテスの弟子（DL 6.82）。すべてはtuphos（思い違い、自己欺瞞、思い上がり）であると主張していた。ピュロンよりも少し年下であったと思われる。

〔五八〕への註

- 1) 〔五八〕で説明されているとおり、hairesisには、選択、採用した立場、学派などの意味がある。
- 2) セクストス『概要』第1巻16-17節を参照。
- 3) ドグマティストの名前が記されていたのが欠落したと考えられる。

〔五九〕への註

- 1) クセノクラテス（前396/5-314）はカルケドン出身の人。プラトンに学び、前339-314にかけて、スペウシッポスの後を受けてアカデメイアの学頭となった。

〔六〇〕への註

- 1) 「荷持」についてはDL9.53を参照。
- 2) エピクロス自身、ティモンによってgrammadidaskalidêsと呼ばれていた。
- 3) ヘラクレイトスは「謎をかける人」「暗い人」と呼ばれていたが、それとほとんど同じ意味であろう。
- 4) 「レロクリトス」は「たわごと（レロ、擬声語）に強い人（クリトス）」の意味であろう。
- 5) アンティドロスは、DL 5.92において名前が挙がっているエピクロス派哲学者であると思われる。ただしDL 5.92のAntidôrosは、DL 10.8（〔六〇〕）との比較に基づくMenagiusの提案であり、元のテキストはAntodôros（BP）であり、またStephanusはAutodôrosと記している。ApeltもDL 5.92においてAutodorosとしている。なお、「サンニドロス」は、sannas（道化役）+dôron（贈り物）の造語であろうが、具体的にどういう意味になるのか、アンティドロスがどんな人であったか不明であるため、よく分からない。
- 6) 写本ではKuzikênousとなっているが、ここではKunikous（Reinesius）を読む。GassendiはKurênaikousを提案していた。

〔六二〕への註

- 1) アルケシラオス（前316/5頃-241/0頃）は、ピタネの人で、最初はペリパトス派でテオプラストスに学んだが、その後アカデメイアのクラントルの許に移った。かれは、クラテス（アテナイの）の次にアカデメイアの学頭となって（268と265の間）、アカデメイアを懐疑主義に向けかえた。いかなる書物も著すことはなかった。
- 2) エレトリア学派については〔五〕〔八六〕を参照。
- 3) アリストン（前250頃が盛期）はキオス出身。ゼノンの弟子になったが、ストア派としては正統には属さなかった。また自然学と論理学を顧みることなく、専ら倫理学に関心をもっていた。
- 4) ディオドロス・クロノス（284頃死去）は、小アジア南西部のカリア地方の町、イアソスの生まれ。問答学派に属し、アリストテレスより一世代後に、アテナイに

において活躍、当時アテナイに集まったストア派のゼノンや、アルケシラオス、エピクロスなどに影響を及ぼした。また問答学派のピロンの師であり、論理的な問題や詭弁を提起する中で、ストア派論理学の形成に寄与した。なお、ここに挙げられたアリストンの断片(SVF 1.343)は、ホメロス『イリアス』第6歌181行の怪物キマイラの描写「前部はライオン、後部はドラゴン、胴体は牡山羊」をもじったものである。同じパロディは、「六三」「六五」にも現われ、「六五」ではこことはほぼ同じく、アルケシラオスが三つの立場の影響を受けたことを言うものと解されているが、「六五」では、アルケシラオスが本当はプラトン哲学であることを言うものと解されている。前部、後部、胴体のそれぞれの部位が、アルケシラオスという全体の中でいかなる意味をもつか、ということに関する解釈の違いによって、アリストンのパロディの具体的な解釈も異なってくるが、頭部を公に標榜する立場、後部を裏に隠された真の立場、胴体を議論の中核になるものと考えれば、アルケシラオスの実際の立場は、ピュロンと同一であったとアリストンが考えていたことになる。詳細はJ. Glucker, pp. 35-36を参照。

- 5) Wachsmuth fr.16; Diels fr.31; Lloyd Jones & Parsons fr.805.「ほら、胸の下に鉛のメネデモスを伴って (têi gar echôn ... hypo sternoisi molubdon)」の部分は、『オデュッセイア』第5歌346行で、現在は海の神レウコテエとなっているイノが、溺れる危険の中にあるオデュッセウスに向かって語る言葉「さあ、胸の下にこのヴェールを巻きなさい (tê de, tode krêdemnon hupo sternoio tanussai)」を想起させる表現。

Wilamowitz, p.72, noteは、アルケシラオスが、懐疑主義の教えという底荷のお陰で、不安定に運ばれていくことを免れた船に譬えられていると考える。しかし、次の「わたしは泳いで行こう・・・」の断片からすると、アルケシラオスは船に譬えられてはおらず、むしろ泳いでいると考えられ、その場合には、泳ぎの邪魔になる鉛を身につけるとするのは、何とも奇妙である。このことからWachsmuth, pp.116-117は、molubdon (鉛)をkolubdon (水にもぐる鳥の仲間)に変える読み方を提案する。この解釈によると、アルケシラオスは、メネデモスという体格のよい水鳥や(メネデモスの体格の良さについてはDL 2.132を参照)、肉づきがよくて浮かびやすいピュロン、ディオドロスを頼りとして泳いでいっていることになる。

これに対してDiels, p.183は、『シロイ』第2巻に魚採りのモチーフを見て取り、アルケシラオスは、プラトンをリーダーとする魚の群れ(DL 3.7=Wachsmuth fr.7; Diels fr.30; Lloyd Jones & Parsons fr.804)の中の、小さな魚であるが、重々しいメネデモスや、肉づきのよいピュロンのお陰で、魚を採ろうと躍起になるフェニキアの欲深い老婆、ストア派のゼノン(DL 7.15=Wachsmuth fr.8; Diels fr.38; Lloyd Jones & Parsons fr.812)から守られていると解する(molubdon (鉛)はそのまま読む)。

さらにLloyd Jones & Parsons, p.379は、同様に魚釣りのモチーフを想定するが、ただしアルケシラオスは魚ではなく、むしろ魚を捕まえる側であるとみなし、かれが、釣りで使われる牛の角としてピュロンとディオドロスを用い、鉛の錘りとしてメネデモスを用いていると考える(ホメロス『イリアス』第24歌80-82行を参照)。そして、「肉づきのよい (to pan kreas)」ではなく、「全体が角である (to pan

keras)」を読むことを提案する。

Long, p. 90, n. 104は、アルケシラオスは魚取りよりもむしろ魚と考えられるという理由で、theusetai ... kreasという読み方を採ろうとする。

Billerbeck, pp. 130ff. は「六三」との比較から、魚釣りよりもむしろ戦い・競技がモチーフになっていると解釈し、アルケシラオスは、メネデモス、ピュロン、あるいはディオドロスという重りをつけ、陸上トレーニングをしていると考える。また「わたしは泳いで行こう・・・」の断片においては、水泳トレーニングもしているとみなし、さらには、「肉づきのよい」というのは、理想的レスラーの姿を表わす表現であると考ええる。

その他の読み方としては、theusetai é's Purrhôna (Meineke)とかtheusetai es Purrhônaという読みもされており、Apelt, Gigante, 加来は、この線にそった訳を提出している。Caizzi, pp. 188 189も参照。

- 6) Wachsmuth fr. 17; Diels fr. 32; Lloyd Jones & Parsons fr. 806. 「ひねくれた (skolios)」という形容詞は、問答家としてのディオドロスの活動を示唆するものと解釈される。

「六三」への註

- 1) ゼノン（前334/3 262）は、キュプロス島のキティオンの出身。ストア派の創設者。フェニキア人の血筋であったらしい。子どもの頃、父がアテナイから持ち帰ったソクラテス関係の書物に親しみ、22歳の時、アテナイに出て哲学を勉強、ペリパトス派以外ほとんどすべての学派の授業を受けた。犬儒派のクラテスからは、徳や自足を重んじる禁欲主義的な生き方を学び、メガラ派のスティルボンからは、普遍の存在を否定する認識論を、アカデメイアのポレモンからは、倫理学を中心としたプラトン主義思想を、問答学派のディオドロス・クロノスからは、論理学、特に命題論理学を学んだ。ヘラクレイトスの影響も受けた。アゴラに近いストア・ポイキレ（彩色柱廊）で教えたところから、かれの学派は「ストア派」と呼ばれるようになった。その教えの高い倫理性のゆえに人々から尊敬され、外国人であるにもかかわらず、アテナイの城壁の鍵を委ねられた。
- 2) ポレモンはアテナイの人で、クセノクラテスの後を継いで、前314/3頃 270頃までアカデメイアの学頭であった。
- 3) テバイのクラテス（前365頃 285頃）は、犬儒派の哲学者。アテナイに来てのち、メガラ派のブリュソンの授業も受けたが、後に犬儒派に転じ、シノペのディオゲネスの弟子となった。キティオンのゼノンはクラテスから影響を受けた。公衆の面前で妻のヒッパルキアと交わったと伝えられている。
- 4) テオプラストス（前370頃 288/5）は、レスボス島のエレソスの生まれ、アリストテレスの弟子であり、322年、師がカルキスへ退いた後、その後を継いで学園リュケイオンの後継者となり、多くの弟子を集めた。伝承では、約二千人の弟子が彼の講義を聞いたと言われる。アリストテレスの思想を基本的に継承しつつ、細かい点で批判も行なった。膨大な著作の中から、『植物論』9巻、『植物原因論』6巻のほか、『形而上学』や、いくつかの自然学関係の論文などが現存する。
- 5) クラントル（前335頃 275頃）は、キリキアのソロイ出身。アカデメイアでクセ

ノクラテスの弟子になり、ポレモン、クラテスと親しい交わりをもったが、特に、ペリパトス派のテオプラストスのところから、かれ自身がアカデメイアに連れて来たアルケシラオスに対して厚い友情を注ぎ、自分の財産をアルケシラオスに遺すほどであった。

- 6) ouden, hothēn kai elegeto ... という読み方を採用する。Wilamowitz, p. 72はoudenosを読んでいる。

[六四] への註

- 1) Wilamowitzの〈kanthen〉を読むと「其処此处で訓練を受け」となる。
- 2) 写本の読み方を採用する。WilamowitzのPurrōneiōsを採れば、「ピュロンのあらゆる物事を否認しつづけた」となる。
- 3) 関連するムナセアスとしては、
 - (1)ここで問題になっている懷疑主義者のムナセアス、
 - (2)医学上の方法主義者として知られていたムナセアス — ネロの治世（後54-68）の頃の人（cf. [Galenus], *Intr.*, 14.684 Kühn; Caelius Aurelianus, *Morb. tard.*, 2.97）、
 - (3)テュロス出身のアカデメイアのムナセアス — アスカロンのアンティオコス（前130/20-67頃）の弟子であった（cf. *Ind. Herc. ac.* 34.11, p.109 M.）が知られている。しかし、(2)方法主義者のムナセアスと(3)アカデメイアのムナセアスとは（もしも上記の年代的資料が正しければ）、時代的に言って別の人である可能性が高いが、この二人と、ここで問題になっている(1)懷疑主義者のムナセアスの異同については、実際のところ、確かなことは何も言えないのである。
- 4) いつの時代のいかなる人かは不明。DL 9.115-116のピュロン主義者のリストにも名前は見出せない。しかしともかく、アルケシラオスより後、ヌメニオスよりは前の人であることは間違いない。
- 5) クニドスのディオクレスについても、何も知られていない。Athenaeus 11.508f.で一度だけ言及されるクニドスのディカイアルコスと同一人物であるとか、あるいは、マグネシアのディオクレス（[一]への註3を参照）と同一人物であるなどと、いろいろ推測がなされているが、いずれも憶測の域を出ない。ただし、Dörrie, p. 422, n.1が言っているように、マグネシアのディオクレスが生きていたと推定される前1世紀、特に前80-50のあたりに、懷疑主義的アカデメイアがアイネシデモスの側からも、アスカロンのアンティオコスの側からも攻撃的になっていたことを考えると、アルケシラオスを懷疑主義者と考えるとはしないクニドスのディオクレスが、この時代に生きていたマグネシアのディオクレスと一致するという意見は魅力的ではある。
- 6) 「アテオス」（無神論者）と呼ばれたが、またからかいの意味を込めて「テオス」（神）とも呼ばれたテオドロスは、キュレネ出身の人であり、キュレネ派に属していた。キュレネ派のアリスティッポス（孫の方）の弟子であり（DL 2.86）、またキュレネ派のアンニケリスや、問答学派のディオニュシオス（最初に問答学派を名乗ったカルケドンのディオニュシオス）の弟子でもあった（DL 2.98）。前340年頃か、それ以前に生まれ、前3世紀にも活躍していたと思われる。[六六]を参照。

[六五] への註

- 1) ここでは(またDL 4.28でも)、アルケシラオスのアカデメイアが中期アカデメイアと呼ばれているが、今日の研究では、Cicero, *Academica* 1.12.46に従って、アルケシラオスに始まりラリサのピロンにいたる懐疑派のアカデメイアを、まとめて新アカデメイアと呼ぶのが、一般の傾向である。

[六七] への註

- 1) エウリュロコスについては、ここで記されていること以上のことは分らない。かれの怒りっぽさは、ピュロンとその仲間が理想とした無動揺(平静さ)と矛盾するものとして、からかいの気持ちを込めて言及されていると思われる。
- 2) Wachsmuth fr.62; Diels fr. 49; Lloyd Jones & Parsons fr.823.

[六八] への註

- 1) Wachsmuth fr.63; Diels fr. 50; Lloyd-Jones & Parsons fr.824.

[六九] への註

- 1) アブデラ、あるいはテオス出身のヘカタイオスは、プトレマイオス一世(前367/6頃-283または282)治下のエジプトに滞在した。『エジプト史』(*Aiguptiaka*)の著者。
- 2) DL 9.109-115.

[七〇] への註

- 1) この最後の文をCasaubonは削除する。Menagiusが注意しているように、この箇所をほとんどそのまま筆写している『スーダ辞典』[七一]には、確かにこの最後の文は認められない。

[七一] への註

- 1) 「探求主義」など、立場そのものを掲げて説明されるのではなく、「探求主義者」など、立場を採る人に焦点を据えて説明されていることを除けば、[七〇]と一字一句異ならない。

[七三] への註

- 1) 同様のテキストは、Suda s.v. Πυρρωνεϊοιの[七一]に直接続く箇所にも見出せるが、細かい点において註3、註4に述べられるような違いがある。
- 2) このテオドシオスは、「われわれはピュロン主義者とは呼ばれないであろう」という言葉から、ピュロン主義に属していたと考えられる。また、テウダス(またはテイオダス, cf. DL9.116)の著作への註釈を書いているところから(Deichgräber fr.307)、テウダス(後125年頃)よりも後の人であること、DL 9.70で言及されているところから、ディオゲネスよりも前の人であることが分かる。von Fritz (RE, Theodosios 3))は、2世紀終わり頃の人と推測、Deichgräber, p.268は、200年以降に活躍と、さらにBarnes, p.4284は、2世紀と推測している。またかれは、経験

派の医者であったと考えられる(Galenus, *Med. Exp.* 2.3, Deichgräber fr.7c)。

- 3) en tois skeptikois kephalaiois. 『スーダ辞典』ではen tois skeptikoisとしか記されていない。
- 4) Hicks, p.482; Deichgräber fr.308; Caizzi, p.49は、dein ... kaleisthai tēn skeptikēnと記しているが、Barnes, p.4284は、dein ... kalein ton skeptikonと記し、DLのtēn skeptikēnではなく、『スーダ辞典』のton skeptikonを自分は採用した、との註を付している。『スーダ辞典』ではdeinは欠落しており、また、kaleisthai ton skeptikonと記されている。ここでは、dein ... kalein tēn skeptikēnという読み方によって訳してみた。
- 5) したがって、かれとドグマを共通にすることはだれにもできず、だから懐疑主義者たちも、自らをかれの名前で呼ぶことはできない(Barnes, p.4285の解釈)。Bächli, p.6は、いかなる見解も表明しない哲学者については、かれが懐疑主義者であったかどうか、評価できないから、としている。なおニーチェは、テオドシオスが、ピュロン主義に敵対する立場に立ち、[七二]の最後の文に対する反論として[七三]のように論じていたと考えるが、これに対してBarnes, pp.4284-5は、テオドシオスの三つの理由 — (1)われわれには他人の心の動きは分からない、(2)ピュロンは懐疑主義の最初の発見者ではない、(3)ピュロンはいかなるドグマももっていないかった — の内には、ピュロン主義と敵対する点は見当たらず、テオドシオスは「ピュロン主義」という名前には反対していても、ピュロン主義そのものに反対しているわけではないこと、またテオドシオスが「われわれ」という言い方をし、むしろピュロン主義の立場に立っていることを指摘する。またかれは、
- (a) [七二]の最後の文の「現われ(思われ)る」という言い方は、(1)に対する答えとなりうる言い方であること — ピュロンの精神状態は分からなくても、ともかく「現われている」ことに基づいて発言できる — 、
- (b) [七二]の「実質的に、かつ顕著に」は(2)に対する答えであること — 最初でなくても、実質的であり、顕著である — 、
- (c) さらに[七二]の「懐疑(考察)に専心した」は(3)に対する答えとなっていること — ドグマはもっていないが、しかし、懐疑(考察)に専心していた — に注意し、テオドシオスがセクストスに反論しているというよりは、むしろ、セクストスがテオドシオスに応答していると考えべきであろう、と主張する。
- 6) この最後の発言をBarnes, p.4284は、意図してかどうか不明だが、テオドシオスの言葉に含めてはいない。ただかれは、pros tōi | inf. の構文が導入する部分(「それにそもそも、ピュロンが、懐疑主義を最初に発見したわけでもないし、かれはいかなるドグマももっていないだったのである」)において、DLがoratio rectaを止め、oratio obliquaを使い始めている可能性に言及している。またこの最後の文を、ピュロンのドグマはともかくとして、かれと同じような生き方をしている人は「ピュロン主義者」と呼んで構わない(したがって、懐疑主義者も、ピュロンと同じような生き方をしているかぎり「ピュロン主義者」と呼んで構わない)という意味で解するなら、この発言は、「ピュロンがかれ以前の誰よりも実質的に、かつ顕著に懐疑(考察)に専心したとわれわれに現われている」ということを含意するような発言であり、そのかぎりにおいて、もしもテオドシオスがこの発言をかれ自

身行なっていたとすれば、かれは実質的に〔七二〕の最後の点を認めていたことになるであろう（しかしこれは、註5に記したBarnesの解釈と一致しない）。なお、Caizzi, p. 49; Giannantoni, p. 17は、この最後の発言もテオドシオスの発言とみなしている。

〔七四〕への註

- 1) このピリッポスがいかなる人か不明であり、さまざまな推測がなされている。例えば、プラトンの弟子の一人であったオプスのピリッポス (DL 3. 37; 46) も一つの選択肢であるが、しかし von Fritz, RE, Philippos 45) が言うように、根拠となる点に欠けている。von Fritz は、DL 2. 113 で言及されているメガラ派のピリッポスである可能性に言及している。スティルボンとメネデモスの間に挟まれた人として、メガラ派のピリッポスを理解するのは魅力的ではあるが、しかしその場合には、von Fritz も指摘するとおり、「何も著さなかった」という言葉を、「哲学的な著作は何も著さなかった」という意味に限定して理解しなければならない。Gigante, p. 459, n. 51 は、ニーチェにならって、Philippos を Aristippos に読み替えるか、あるいは Roeper, Philologus, XXX, p. 560 に従って、Philôn に読み替えるべきである、と言っている。
- 2) 懐疑派アカデメイアの論客（前214/3 129/8）。ストア派、特にクリュシッポスの立場に反論した。かれ自身は何も著さず、弟子のクレイトマコスが師の議論を伝えているが、しかし、カルネアデスが、同一の問題について、肯定、否定両方の議論を行なったこともあって、クレイトマコスは、「自分には師の見解がいかなるものか分からなかった」と告白せざるをえなかった。

〔七五〕への註

- 1) sunagôgês ... tropon は、一般に mode of inference (Hicks), il modo delle loro deduzioni conclusive (Gigante), Art und Weise ihrer Schlußfolgerung (Apelt), 「結論を導き出す仕方」(加来) と訳されているが、agôgê の部分は、skeptikê agôgê (懐疑的生き方(主義)) の agôgê に相当すると考え、ここでは「共通の生き方(主義)」という訳を当てた。Caizzi の p. 100 における indirizzo という訳、また p. 206 でかれが引用している Phot. Bibl. 170bl: tēn holēn agôgēn hōs tupōi kai kephalaiōdōs tōn Purrōniōn paradidōsi logōn という言葉を見ると、Caizzi もこの線で解しているように思われる。しかし、辞書には sunagôgê のそのような意味は認められない。ひょっとして、sunagôgês ではなく agôgês を読むべきかもしれない。その場合には、この後に続く sunidein ... suntaxeōn ... sunêtheis という sun 付きの語の連続から、うっかりあやまって agôgês の前にも sun が付け加えられたと考えてみることも可能であろう。
- 2) 「仲間 (sunêthēs)」をピュロンの弟子という意味で解するならば、前1世紀のアイネシデモスはピュロンの仲間ではない。DL はアイネシデモスが、かなり後の人であることを少なくとも知ってはいた (DL 9. 116)。またヌメニオスも、ピュロンの弟子ではないかもしれない。〔三五〕への註1を参照。

[七六] への註

- 1) 一般的な意味での文字技術（グランマティケー）—— 読み書きの技術に相当するものでセクストスが、狭い意味での文字の技術（高等文法）と区別して「グランマティスティケー（初等文法）」と呼ぶもの—— は、生活のために必要不可欠であり、それが有益であることは万人の認めるところであって、ピュロン主義もそれを批判的に行うことはないと論ずる中での、セクストスの議論。
- 2) カドモス文字(Kadmēia grammata)(Herodotus, 5. 59) とは、アルファベットのこと。カドモスがフェニキアからテバイに伝えた、と考えられていた。実際、アルファベットの起源は、シリアで用いられたフェニキア文字にあった。
- 3) Wachsmuth fr. 58; Diels fr. 61; Lloyd Jones & Parsons fr. 835.

[七七] への註

- 1) ピュロンとティモンの関係については、他にも固有名詞索引の「ティモン」の項に挙げた箇所を参照。
- 2) ニカイアのアポロニデスは、デモステネスの演説に対する註釈や、Peri katapseusmenôn historiôn、Peri paroimiônなどを著したティベリウス帝（前42 後37）時代（後14 37）の文法学者。エピグラム詩人のアポロニデスと同時代の人であって、同一人物の可能性も皆無ではない。Barnes, p. 4243, n. 12を参照。なお「われわれの同郷人」と訳したho par'hēmônは「われわれと同じ立場の人」と訳されることもある。「同郷人」の意味で解する解釈についてはBarnes, p. 4243を参照。
- 3) 註2を参照。
- 4) それとも「学ばせ」？ 註5を参照。
- 5) 「生活」とは遺産のことを指すか、それとも医術のことか？ そもそも医術を教えたのはティモン自身か、それともだれかに教えてもらったのか？ ティモンを経験派の医者とする伝承（Deichgräber, p. 43. 3）もあることを考えると、かれには医者の心得もあったように思われるが、しかしその伝承は、かれの息子が医者であった事実に由来するものであるかもしれない。あるいは、「生活」とは、懐疑主義者としての生活（態度）のことを指すのか？ Caizzi, pp. 209 210も参照。
- 6) 「この人」をティモンその人とする解釈もあれば（Wilamowitz, p. 41）、ho d'を「他方、もう一方の人は」と訳し、年下の息子とする解釈（Wachsmuth, p. 12 and n. 1）もあるし、クサントスのこととする解釈（Diels, p. 173）もある。
- 7) ソティオンは、アレクサンドレイア出身のペリパトス派の人で、前200 170頃に活躍したと思われる。『哲学者たちの系譜』（Diadochai tōn philosophōn）全13巻を著した。この書をDLが直接参照できたかどうかはともかくとして、少なくとも間接的に、かれに大きな影響を与えたことは間違いない。
- 8) Wilamowitzはこれを『インデルモイ』に読み替えている(p. 42)。Cf. Wachsmuth, p. 26.
- 9) アンティゴノス二世（ゴナタス、前320頃 239、在位は284/3 239）はマケドニア王。かれ自身哲学者であり、回りに哲学者や、詩人、歴史家を集めた。ティモンが出会ったのは、DL 4. 39に記されている、アンティゴノスがアテナイにやって来た折りのことか？

- 10) プトレマイオス二世（ピラデルポス、前308-246）は、エジプト、プトレマイオス王朝の王、前285から2年間、父と共同で統治した後、246年まで王として君臨する。かれのもと、プトレマイオス王朝の財政的基盤は整備され、またアレクサンドレイアのムセイオンや図書館もつくられた。

〔八一〕への註

- 1) Wachsmuth, p. 24, v; Diels fr. 71; Lloyd-Jones & Parsons fr. 845. Wachsmuth, p. 24は、『インダルモイ』からの引用としているが、Diels, p. 204は出典不明とし、またLloyd Jones & Parsons, p. 394も出典不明としつつも、アテナイオスがしばしば『シロイ』を引用している事実を指摘している。

〔八二〕への註

- 1) Wachsmuth, p. 24, vi; Diels fr. 72; Lloyd-Jones & Parsons fr. 846.
Fabriciusは『インダルモイ』の引用と考えている。
2) セクストス『概要』第1巻21-24節を参照。

〔八三〕への註

- 1) 医学上の経験主義の立場については、金山(2)を参照。
2) Wachsmuth, p. 28; Diels, fr. 53; Lloyd Jones & Parsons fr. 827. Wachsmuth, p. 28は『ピュトン』の中の言葉に基づくと考えますが、Diels, p. 198はその可能性も認めつつ、『シロイ』に基づき、元の詩句はaplasmatos, ou kenodoxosであっただろう、と推測している。またJones & Parsons, p. 386も『シロイ』を支持、Dielsが推測する言葉の前には例えば、outh' huperauchos eôn（思い上がることなく）のような言葉があっただろうと言う。
3) ヒッポクラテス（前460頃-370頃）は、小アジア沿岸のコス島出身の、医学の祖と呼ばれる医学者。生涯は不詳であるが、ソクラテスと同時代人で、アスクレピオス派に属し、その名と教説は、生存中から、あるいは遅くとも死後間もなく、広く知られていた。ソラノス等が何世紀も後に執筆された信憑性の乏しい伝記によると、前460年、医者ヘラクレイデスの子としてコス島に生まれ、父と、養生法の創案者ヘロディコスに医術を学んだ後、ギリシア各地を遍歴しながら医療活動に従事、マケドニア王ペルディッカス二世や、ペルシア王アルタクセルクセス二世も診察したということである。デモクリトスとも交友があった。今日に伝わる少なくとも60に上る作者不詳の論文集『ヒッポクラテス集典』（Corpus Hippocraticum）の著者とされるが、しかし、外内科医術、婦人科学、養生法等、医学の各分野に関するものから、臨床歴、備忘録、一般向けの講義録、身体一般や健康と病気に関する哲学的議論まで、種々様々の内容を含むこの論文集は、大部分は前430-330年に書かれたものの、中にはもっと新しい論文も含まれ、おそらくは前5～4世紀の種々雑多な医学論文が、前3世紀に、アレクサンドレイアの図書館に収集され、ヒッポクラテスの名を冠せられ、これを核として更に新しい論文が付け加わって出来たものであると思われる。

〔八四〕への註

- 1) メノドトス（後120 125年が盛期）はビテュニアのニコメディア出身、経験派の医師で、またピュロン派懐疑主義者であった（DL 9.116）。膨大な量の著作を著したが、すべて失われてしまった。Cf. Deichgräber, pp. 212 214.
- 2) アスクレピアデス（前1世紀始め）はビテュニアのプルサ出身で、ローマで活動した医者。体液説を斥け、エピクロス原子論の影響を受けた哲学的立場にたって、ポントスのヘラクレイデスが物体の構成要素とした粒子説を継承、体内の細孔の粒子の通過によって身体諸現象を説明した。テミソン（後1世紀）の師であり、アスクレピアデスとテミソンの思想が、テッサロス（後79年以前に死去）による医学上の方法主義創始における重要な契機になったと考えられる。
- 3) Bonnetの挿入する〈et〉を読む。

〔八五〕への註

- 1) キケロ（前106 43）は、ローマの政治家、修辞学者、哲学者。新アカデメイアの立場から、ヘレニズム哲学の諸学派について、多くは対話篇の形で著作を著した。アンティオコス、ラリサのピロン、ポセイドニオスなどの哲学者とも面識があった。
- 2) エレトリア派とエリス派。これらの学派については〔五〕〔六〕を参照。

〔八六〕への註

- 1) ヘリロス（前3世紀）は、カルケドン出身のストア派哲学者、ゼノンの弟子であり、知識を究極の目的として立てる知識至上主義の立場から、正統ストア派とは異なる立場を採った。ヘリロス派は前3世紀終わりまでには消滅したと思われる。DL 7.165 166にヘリロスに関する簡単な説明がある。

〔八七〕への註

- 1) クリュシッポス（前280頃 206頃）は、キリキアのソロイ出身のストア派哲学者。最初、アカデメイアでアルケシラオスやラキュデスに問答法を学んだが、後にストア派のクレアンテスの弟子になり、クレアンテスの死後、232年から学頭になった。優れた理論家であり、初代学頭ゼノンの教説を確固たる一体系にまとめた。「クリュシッポスなくしては、ストアはなかったであろう」とさえ言われる。非常に多作家であり、論理学関係の論文だけでも311に上った。

〔八八〕への註

- 1) カトー（Marcus Porcius Cato, 前95 46）は、同名の著名な政治家を曾祖父にもつ政治家。ストア派哲学の信奉者であり、De finibusの第3、4巻において、ストア派哲学の代弁者の役割を果たしている。カエサルと一貫して対立、敗れて自決したが、その前夜にはプラトンの『パイドン』を読んで時を過ごしたと言われる。

〔八九〕への註

- 1) カトーのストア主義に対するキケロの反論が、以下に示される。
- 2) ピュロンが無動揺（平静さ）を徳とみなしていたと、キケロは考えている。

[九〇] への註

- 1) カトーのストア主義に対するキケロの反論の続き。
- 2) consecrariusはキケロのDe finibus, 3. 7. 26; 4. 18. 48; 4. 18, 50にのみ現われる用語。3. 7. 26では「ストア派の短く正確なconsecraria」という形で現われる。Oxford Latin Dictionaryは、この語の語源がconsequorにあると考えるが、同時にその用法からしてconseco (cut into pieces)との関連もあるかもしれない、と指摘している。

[九一] への註

- 1) カトーのストア主義に対するキケロの反論の続き。

[九四] への註

- 1) ロドスのヒエロニュモス（前290頃 230頃）は、ペリパトス派に属し、アテナイで活躍した文学史家。ティモンやアルケシラオスの同時代人であり、DL 4. 41ではアルケシラオスを非難攻撃したことが記され、またDL 9. 112には、ティモンについてかれが語った皮肉が記されている。『覚書雑纂』（Sporadên hupomnêmata）では、タレスがオリーブ搾油機を借りて占有し、金儲けをしてみせたという有名な話を伝えている（DL 1. 26）。また著作には『判断保留について』（Peri epochês）もあり（DL 2. 105）、そこではアルケシラオスや、ピュロン、ティモンなどの懐疑主義が取り上げられていたことが推測される。

[九五] への註

- 1) ストア派、エピクロス派、ペリパトス派、アカデメイアなどの見解。

[九六] への註

- 1) アレイオス・ディデュモス（前1世紀）は、アレクサンドレイア出身の人であり、皇帝アウグストゥスの哲学の師であり、友でもあった。哲学的にはアスカロンのアンティオコスの影響を受けた。学説誌を執筆、エウセビオス、クレメンス、ストバイオスを通して断片が現存し、ストア派の自然学と倫理学、プラトンのイデア論、アレクサンドレイアのエウドロスの倫理学などに関する資料となっている。特にストバイオスには、ストア派とペリパトス派の倫理学に関する、かれの長い断片が二つ含まれている。

[九七] への註

- 1) セネカ（前4～後1～後65）はスペインのコルドバ出身。子どもの頃にローマに移住し、修辞学と哲学の教育を受けた。ストア派哲学者であるが、哲学関係の著作のほかに悲劇も著した。ネロの家庭教師をつとめたが、次第に疎んじられるようになり、最後にはピソの陰謀に加担したとして、自殺を強要され、勇気ある死を遂げた。
- 2) 写本はnihil esse universoであるが、nihil esse ab uno diuersum (Schweigh)を読む。
- 3) エレトリア派、メガラ派については「五」「六」を参照。

[九八] への註

- 1) プリニウス（大）（後23/4 79）は、ローマの博物誌家。全37巻の『博物誌』を著す。
- 2) M. Licinius Crassus Dives（前115/4 53）。三執政官の一人。カッライで、前53年に亡くなった。Cf. RE, XIII/1, 295, Licinius (Crassus) 68).
- 3) M. Licinius Crassus Agelastus. 前105年にプラエトルになったところのクラッス。Cicero, *De finibus*, 5. 30. 92; *Tusc. disp.* 3. 31によると、Luciliusが、クラッススは一生涯に一度だけ笑ったと報告している。また、*Tusc. disp.* 3. 31では、いつも変わらず平静さ(tranquilla)と心穏やか(serena)な状態を保っていたソクラテスと、険しい表情のクラッスとが対比されている。Cf. RE, XIII/1, 269, Licinius (Crassus) 57).
- 4) ディオゲネス（前400頃 325頃）は、黒海南岸中央に位置するシノペ出身の哲学者。伝承によると、父または彼自身が通貨を変造し、彼は追放されアテナイに出てきた。自らを「犬」（キュオーン）と呼び、犬儒派（キュニコイ）の祖となった。14の対話篇と『オイディプス』等七つの悲劇を著したと伝えられる。

[九九] への註

- 1) テルトゥリアヌス（160頃 220以降）はカルタゴの生まれのキリスト教作家。文芸、修辞学、法律の教育を受けたのち、195頃にキリスト教に改宗。護教的著作、神学的著作を著す。禁欲的傾向の持ち主であった。
- 2) セネカの失われた著作、*Remedia fortuitorum*.
- 3) シノペのディオゲネス。
- 4) カリニコス (Kallinikos) は、ペトラ出身の著名なソフィスト。3世紀、テルトゥリアヌスと同時代に活躍した。

[一〇〇] への註

- 1) クィンティリアヌス（35頃 100頃）は、スペインのカリゲッリス出身の人で、ローマで教育を受けた後、弁論家、修辞学者として活躍した。95頃公刊された全12巻の大著『弁論家の教育』（*Institutio oratoria*）が現存する。この書は完全写本が1416年にスイスで発見され、1470に出版された後、ルネサンスの理念と合致した内容のため、当時広く受け入れられるところとなった。

[一〇一] への註

- 1) ミヌキウス・フェリクス（200 240の間のある時期が盛期）は、キケロを手本とした対話篇『オクタウィウス』を執筆、同書において、登場人物オクタウィウスを通して、登場人物のカエキリウス・ナタリスが具現する教養あるローマ人の異教徒に対して、キリスト教を哲学的、道徳的に擁護した。
- 2) エピクロス派のゼノン（キケロと同時代の人）は、ソクラテスを「アッティカのひょうきん者（scurra Atticus）」と呼んでいた（Cicero, *De natura deorum*, 1. 34. 93）。
- 3) Caizzi, p. 276は、ここにピュロンがアカデメイア派と混同されはじめた最初の形跡が認められると思われると述べる。しかし[一〇八]への註10も参照。

- 4) ケオス島出身の、ギリシア抒情詩人のシモニデス（前557/6 468/7）であるのか？それとも他のシモニデスであるのか？ プラトン『プロタゴラス』339において、シモニデスの意見が分からない、と言われていることと関係するのであろうか？

[一〇二] への註

- 1) 後115/20頃-180以降の人、詳しくは[七]への註1を参照。
- 2) ピュロンは最初は画家であった。[一][二]を参照。
- 3) [七]はこの箇所へのスコリアである。

[一〇四] への註

- 1) 「ピュリアス(Purrias)」は、トラキア出身の、髪の毛の赤い奴隷に対する呼び名であったが、奴隷によくある名前でもあった(cf. Aristophanes, *Ranae*, 730)。売られていく奴隷の名前が実際に「ピュリアス」であったというよりも、むしろ、当の奴隷の名前と関係なく、一般的な奴隷の名で呼んだか、あるいは、売られて行くのはピュロンであって、ピュロンと似た名で侮蔑的に呼びかけたのであろう。
- 2) PHIL. というテキストもあれば、PURR. というテキストもある。PHIL. であれば、Philôn ([三二][六八]を参照)の省略形か、Philosophosの省略形であるが、決定は困難である。PURR. であってこれがPurriasであるとすれば、「ピュリアス」という名前で、ピュロンを暗示していることになるだろうし、Philosophosの省略形であっても、おそらくは、「ピュリアス」という名で呼びかけていることからして、売られていく奴隷はピュロンであることになるだろう。他方、PHIL. がPhilônの省略形であるなら、ピュロンの弟子のピロンが売られていくことになる。Cf. Caizzi, p. 278.
- 3) [三九](3)および[一〇六]を参照。
- 4) epistasisは、Loeb Classical Libraryでは、wisdomと訳されているが、ここではむしろ「(把握しないで)立ち止まること」、つまり「判断保留(epochê)」の意味でとった。
- 5) 「無学問(amathia)」ではなく「無情態(apatheia)」をPappenheimは提案している。
- 6) 「無感覚(anaisthêtos)」は「無情態」を示唆するものであろうが、「地虫と差別がない」という言葉は「無差別」に引っかけたものか？

[一〇六]

- 1) 従来、『プラトン「テアイテトス」註釈』は2世紀中頃の作と考えられてきたが、Tarrant, pp. 67-69は、前1世紀後半の作品であることをかなり説得的に論じている。
- 2) kai hôs ge nuni phainetai (Pl., *Tht.*, 151e2).
- 3) 「少なくとも現在わたしに現われているところでは」のソクラテスの理解が、今日の用語で言うところのepistemic appearanceに相当し、ピュロンの理解が、non epistemic (or phenomenological) appearanceに相当する。
- 4) ここでは「このこと(touto)」を前述の内容と解したが、Long & Sedley, vol. 1, p. 470は、toutoを次に記される「その都度感取される表象にしたがって生活する

こと」と理解する。

〔一〇七〕への註

- 1) P. A. Clement (Loeb Classical Library)が採用するheôs an hopôsoun echousi kraseôs hêmin ê phuseôs homilêsêiという読み方を採用する。
- 2) フロルス (Mestrius Florus) は、ウェスパシアヌス帝の治世の時代 (69-79) に、consulをつとめたローマの有力者。プルタルコス親友であって、かれを通してプルタルコスはローマの市民権を得たと思われる。哲学的関心をもった博学の人で、『シュンポシアカ』には13回も現われる。
- 3) ここで語られているエピクロスの立場に関しては、Plutarchus, Adversus Colotem, 1109F 1110A (Annas & Barnes, pp. 120-121 (和訳198-199頁)) を参照。

〔一〇八〕への註

- 1) ヒッポリュトス (170頃-236頃) はローマの神学者。マクシムス帝の迫害に遭い、教皇ポンティアヌスと共にサルディニアに追放され、間もなく死亡した。ギリシア語による著作の多くが現存するが、異端の起源をギリシア哲学に認める『全異端反駁論』は、初期哲学者の貴重な断片を含む。この書の第1巻がいわゆる Philosophoumena である。
- 2) タレス (前六世紀頃) は、イオニア地方ミレトス出身の哲学者。アリストテレスによって、最初に万物の原理を尋ね、水をそれとして立てた人、最初の哲学者と認定されている。ギリシア七賢人の一人。政治家、技術者、天文学者、幾何学者としても優れ、前585年、年内に日食が起こることを予言したことから、この年がかれの盛期とされる。
- 3) エンペドクレス (前495頃-435頃) は、シケリア島アクラガス出身の哲学詩人、優れた弁論家、また医者でもあった。『自然について』、『浄め』と題された二作品の断片が約450行現存する。万物の四つの根 (火、水、空気、土のいわゆる四要素) が、愛と争いによって、混合したり、分離にしたりすると考え、それによって、生成消滅を説明した。
- 4) アナクシマンドロス (前610頃-546頃) は、タレスに続くミレトス生まれの哲学者で、万物の原理として、空気や水といったいかなる具体的事物とも同一視できない無限定なるもの、空間的にも無限であり、不死で神的な「ト・アペイロン」 (無限なるもの) を想定した。
- 5) アナクシメネス (前六世紀) は、ミレトス学派最後の哲学者で、生涯は不詳であるが、空気を万物の原理として立て、その希薄化と濃密化によって、諸々の事物の生成を説明したとされる。
- 6) アルケラオス (前5世紀に活躍) は、アナクサゴラスの弟子で、ソクラテスの師であったとされる人物。アナクサゴラスの思想を継承しつつ、根本的な点も含めていくつかの修正を行なった。
- 7) エクパントス (前4世紀) はシュラクサイ出身のピュタゴラス派哲学者。DK 51 を参照。
- 8) ヒッポン (前5世紀後半に活躍) は、エンペドクレスより若い自然哲学者。サモ

スの出身？ 水を原理とするタレスの立場を復活したが、また人間の発生のメカニズムや、病気と体内の水の量の関係など、生理学的、病理学的関心ももっていた。無神論者としてアテナイ人から弾劾された。

- 9) 自然学、倫理学、問答法（論理学）のことと考えられる。
- 10) [一〇一]への註3を参照。ヒッポリュトスとミヌキウス・フェリクスとどちらが正確に先か分からないが、ともかく3世紀初め頃には、ピュロンはアカデメイア派と混同されはじめていたことが伺われる。
- 11) ヘシオドス（前8世紀末頃）は、ギリシアの叙事詩人。『神統記』『仕事と日』の著者。
- 12) 懐疑主義と万物流転説を結び付ける解釈については、「一〇九」、および「一九」への註2に記したオイノアンダのディオゲネスの断片を参照。

[一〇九] への註

- 1) ピロポノス（490頃 570頃）は、キリスト教哲学者、アリストテレス註釈家。師のアンモニウスの講義をもとに、アリストテレス『カテゴリー』『分析論』『気象論』『生成消滅論』『靈魂論』『形而上学』などの註釈を著した。
- 2) 懐疑主義と万物流転説を一緒にしてしまう点（「一〇八」への註12参照）も含めて、ひどい混乱ではあるが、しかし、アイネシデモスを中心とする人たちが、懐疑主義はヘラクレイトス哲学に通ずる道である、と主張していたという事実（セクストス『概要』第1巻210節）と、この混同の間には何か関係があるのかもしれない。
- 3) むしろクラテュロスである（cf. Aristoteles, Metaphysica, 1010a13）。
- 4) プラトン『テアイテトス』153CD参照。

[一一〇] への註

- 1) エピパニオス（315頃 403）は、パレスティナのエレウテロポリスの生まれで、367年にサラミス（コンスタンティヤ）の司教になる。正統教義を守ることを使命として、異端やギリシア的教養を攻撃するためにPanarion (= Adversus haereses)を著したが、この書は、今日、批判相手となっていた思想について知るための重要な情報源となっている。
- 2) しかし実際は、ピュロン自身は何も書き遺さなかった。

[一一一] への註

- 1) ローマのクレメンス（96年頃が盛期）はローマの司教。ペテロから数えて3代目に当たると思われる。『ピリピ人への手紙』第4章3節に現われるクレメンスと同一人物である可能性もある。かれの名前で、手紙など多くの偽書が出回っていたが、その内の一つが、ここに引用されているHomiliae (Homiliai; 説教集)である。年代は不明で、これと内容的に重なる部分の多いRecognitiones (Anagnōseis; 211と231の間の作と思われる)との関係も含めて、さまざまな推測がなされている。Homiliaeを先にもってくる人もいれば、Recognitionesを先にもってくる人もいるが、第3の作品が両者の元にあったという可能性もある。その場合、その第3の作品は3世紀初頭のものと考えられる。なお、Caizzi, p. 282は、Homiliaeが4世紀に遡

ると記している。

[一一二] への註

- 1) イストマコスがだれか不明であるが、ひょっとして、Xenophon, *Oeconomicus*, 6. 17ff. に登場し、ソクラテスに立派な人になる道を教えようとするイストマコスであるかもしれない。このイストマコスが農夫であることについては、*Oeconomicus*, 11. 15-16を参照されたい。
- 2) デモステネス（前384-322）は古代ギリシア弁論家。

[一一三] への註

- 1) ヒメリオス（300と310の間-380以降）は、ビテュニアのプルシアス出身の弁論家、アテナイで学び、主に同地で修辞学教師として過ごした。ナジアンゾスのグレゴリオスやバシレイオスの師でもあった。
- 2) 「ムーサイの導き手」とは一般にアポロンのことだが、ここではヘルモゲネスのことを指している（Annas & Barnes, （和訳36頁）を参照）。ヘルモゲネスはポントスの出身。哲学と法律を学び、コンスタンティヌス帝のもとで要職についた。361年に亡くなったと思われる。
- 3) ランプリアスの目録は、プルタルコスの息子のランプリアスが記したプルタルコスの著作目録として『スーダ辞典』に記されているものであるが、しかし、プルタルコスにはランプリアスという息子はおらず、後に（3～4世紀?）、プルタルコスの名の元に集められた著作に関して、どこかの大きな図書館で作成された目録であると推測される。Cf. RE, XXI/1, 695-702.
- 4) Annas & Barnes, p. 28（和訳48頁）を参照。

[一一四] への註

- 1) グレゴリオス（ナジアンゾスの）(329/30-89/90) は、カッパドキアの三教父の一人。ナジアンゾスの主教の子として、近郊の村アリアンゾスに生まれ、アレクサンドレイアやアテナイで学んだ。修辞学に優れており、五つの『神学的説教』、自伝的詩、書簡、またバシレイオスと共に著したオリゲネスの著作の抜粋『ピロカリア』などが有名である。

[一一五] への註

- 1) クレタのエリアスは11世紀から12世紀の人と推定される。テキストは[一一四]に対する註釈である。

[一一六] への註

- 1) Nicephorus Gregoras, *Byzantina historia* (P.G. 148), 19. 930にも、このとおりまったく違わない言葉遣いで記されている。またグレゴリオスの言葉については Annas & Barnes, p. 18（和訳31頁）を参照。

[一一七] への註

- 1) スタゲイラの人とは、アリストテレスのことであろう。

[一一八] への註

- 1) アガティアス（531頃 580頃）はミュリナ出身、Scholasticusと呼ばれたところの、詩人にして、歴史家。自分の作品も含めて、近い時代のエピグラムを編纂して全7巻の『キュクロス』を著す。同著作から多くの詩が『ギリシア詞歌集』に収められている。また後年プロコピオスにならい、その後を継ぐ形で、552/3-558/9の時代を取り上げ、『歴史』全5巻を執筆した。[一一八] はそこからの引用。

[一一九] への註

- 1) このユリアノスは6世紀のエピグラム作家。Cf. RE, X/1, 12-13.
- 2) このユリアノスは332-363年に生き、キリスト教の広がりを阻止しようとした皇帝ユリアノス（Flavius Claudius Junianus Imperator）であろう。[一二〇] を参照。

[一二〇] への註

- 1) Annas & Barnes, p. 18（和訳31-2頁）を参照。

[一二一] への註

- 1) ヨハanneス（シケリアの）は、11世紀初頭に生まれ、弁論家のヘルモゲネス（2～3世紀）の著作、Peri ideôn logouの註釈を著した。Cf. Caizzi, p. 283.
- 2) 『メネクセノス』235a c?

[一二二] への註

- 1) 11世紀から12世紀にかけての人。おそらく修道士。種々の著作を参考にして、創世から1057年までの歴史を綴ったSunopsisî historîôn (Compendium historiarum) を著した。Cf. Caizzi, p. 284.
- 2) この後半の部分は[一〇八]の一部の、ほぼそのままの引用である。

[一二三] への註

- 1) セクストス・エンペイリコス『ピュロン主義哲学の概要』の古写本内、M以外の写本において、その最後に付けられたエピグラムであるが、Caizzi, p. 284は、アガティアス『キュクロス』より後の時代のものであろう、と推測している。

事項索引

アカデメイア、アカデメイア派：「五三」「六四」「六五」「九三」「九七」「一〇一」「一〇三」
「一〇八」「一一三」「一二一」「一二二」
悪(kakon, malum)：「二四」「二五」「四二」「四四」「四五」「四七」「四八」「四九」「五七」「六一」
「六五」「八一」「八五」「八八」「九二」「九四」「一一四」
争い(eris)、争う(erresein)、争論家(eristikos)、争論学派・哲学(eristikê)：
「三八」「四四」「四八」「四九」「五八」「六三」「六八」「一一二」「一一三」
現われ(phainomenon)、現われる(phainesthai)：「一〇」「一一」「一二」「一三」「二三」「二四」
「二四註3」「三六註1」「六三」「六四」「六五」「七二」「七六」「九七」「一〇六」「一二三」
行き詰まり、行き詰まる、行き詰まり主義(aporia, aporein, aporêtikê)：
「一二」「一三」「二二」「三八」「五八」「六五」「七〇」「七一」「七二」「八三」「一〇四」
エピクロス派：固有名詞索引「エピクロス」を参照
エリス派：「五」「六」
エレクトリア派：「五」「六」「六二」「八六」「九七」
穏やか(quietus, hêsukos)：「八四」
穏やかさ(晴れやかさ)(euthumia, euthumeisthai)：「一九註1」「九二」
思い上がって(huperphialôs)：「一二三」(「謙遜」も参照)
懐疑、懐疑主義、懐疑派：「一〇」「一一」「一二」「二一」「二三」「二五」「三六」「三八」「三九」
「四〇」「四一」「四六」「五八」「六三」「六四」「七〇」「七一」
「七二」「七三」「八〇」「八二」「八三」「一〇四」「一一九」
書き割り、錯視画法(skênographia, skiagraphia)：「五七」「六三」
規準(kritêrion)：「一〇」「一二」「一〇二」「一〇六」
基準(kanôn)：「二四」「二四註3」
犬儒派(キュニコイ)：「六〇」「六三」「九八」
経験(empeiria)、経験主義、経験派(empeirikoi)：「一三」「八三」「八四」「一一八」
謙遜(atuphos)、思い上がり(tuphos)：「四五」「四五註2」「四六」「四七」「五七註6」「八三」
考察(skepsis関係の語)：「二三」「三九」「四一」「五五」「七〇」「七一」「七二」「七六」「一〇三」
「一〇四」(「懐疑」も参照)
幸福(eudaimonia, eudaimôn, eudaimonikos)：「二五」「二五(観)」「三九」「五五」「五六註1」
「八八」「九二」
静けさ(hêsuchiê, hêsuchia)：「二〇」「二一」「二一註2」「二二」「二五」
自然、自然のあり方(phusis, pephukenai)：「一一」「一三」「一九註1(ディオゲネスの断片)」
「二四」
「二五」「三九」「六五」「八八」「八九」「九二」「九八」「一〇七」「一〇九」
習慣(ethos, sunêtheia)：「一」「二」「一一」「二四」
承認(sunkatathitesthai)：「四三」「五八」「六五」「七二」
真理、真実、真(alêtheia, alêthês, veritas)：「一」「二四」「三九」「四一」「四三」「四四」
「四五」「五一」「五二」「六四」「七〇」「七一」「八三」「八四」
「九六」「九七」「一〇二」「一〇四」「一〇六」「一〇八」「一二二」
ストア派：「八九」「九三」「九六」「一〇八」
静穏、心穏やか(galênê, galênôtês, galênos, serenous)：「二五」「三三」「九八註3」
生活(bios, diexagein)：「八」「一一」「一二」「二四」「二五」「二五(観)」「三六註1」「五五」
「五八」「七七」「七七註5」「八二」「八七」「一〇六」
善(agathon, bonum, honestum(道徳的な善))：「一六」「二四」「二五」「四四」「六五」「八五」「八七」
「八八」「八九」「九〇」「九二」「九三」「九四」「一一六」
選択：「一二」「一三」「八二」「八七」「八八」「八九」「九二」「九三」
存立(huparxis, huparchein)：「二四」「五八」「六五」「八四」
対置(antithesis)：「一一四」「一一五」「一一六」(「反論」も参照)
対立する議論(antilogia)：「一〇」
探求、探求主義(zêtêsis, zêtein, zêtêtikê, zêtêtikoi, quaerere)：
「一〇」「一七」「四一」「七〇」「五八」「六七」「七〇」「七一」「七二」「八九」「九二」「九六」
力の拮抗(isokrateis)、均一にする(exomalizein)、同等(にする)(homoios, exaequare)、
等しく(ep' isês, paria)：「三九」「四二」「四四」「八八」「九七」「一〇三」「一〇四」「一〇六」
動揺、乱される(tarattesthai, diatarattesthai)：「二五」「三四」
徳(arêtê, virtus, honestum)：「五五」「八五」「八七」「八八」「八九」「九〇」「九二」「九三」

ドグマ、ドグマティスト(dogma, dogmatizein, dogmatikos):「一〇」「一一」「二三」「二四」
 「三五」「三八」「四六」「五一」「五二」「五八」「六四」「六五」「七〇」
 「七一」「七三」「七四」「一〇六」「一一〇」「一一五」「一二二」
 熱心(spoudê):「三二(kenospoudon)」
 把握(katalambanein関係の語):「二三」「三六」「三九」「五〇」「五一」「七四」「八二」「一〇四」
 「一〇六」「一二二」(「無把握」も参照)
 反対(enstasis, enistasthai):「一一四」「一一五」「一二二」
 判断保留、判断保留派、判断保留主義(epochê, epechein, ephektikoi):「一」「一註11」
 「九」「一〇」「一一」「一九註1(ディオゲネスの断)」
 「二三」「二五註4」「三九」「四〇註1」「五二」
 「六四」「六五」「六六」「七〇」「七一」「七二」「七四」「八〇」「九四註1」
 「一〇三」「一〇四」「一〇四註4」「一〇九」?「一一四、一一五(ephexis)」
 「一一八」「一一九」「一二二」
 判定不可能(anepikrita):「三九」「四四」
 反目(diaphônein):「五二」
 反論、反対の論(antirrêsis, antilegein, antithesis):「六一」「六三」「一一〇」「一二二」
 否認(anairein, arnêsis):
 「七」「一一」「四〇」「五一」「五五」「五七」「六四」「七二」「八四」「一二二」
 ピュロン主義、ピュロン派、ピュロンの徒、ピュロンの(Purrrhônaios, Purrrhônaios,
 hoi kata (amphi) Purrrhônai, kata Purrrhônai):「四」「一〇」「一七」「三九」「四一」「五一」
 「五五」「六一」「六四」「六五」「七〇」「七一」「七二」「七三」「七八」「七九」「八六」「九七」
 「一〇六」「一〇八」「一一六(ピロンの断)」
 「一一八」「一二二(ピロンの断)」
 表象(phantasia):「四六」「一〇六」
 不明瞭(adêlon):「一一」「二三」「三八」「四六」「八三」「八四」「一〇四」「一〇六」
 ペリパトス派:「九三」「一二一」
 法、習わし、法律(nomos):「一」「二」「二五」「三六註11」「四五」
 無回避(aphugês):「八二」
 無学問(amathia, amathês):「六〇」「六一」「一〇四」
 無活動(anenergêsia):「八二」
 無感覚(anaisthêtos):「一〇四」
 無感情(astorgon):「一六」「二一註3」
 無苦勞(apragmosunê):「一九」「一九註1」
 無傾向(aklinês)、傾倒(prosklisis):「三九」「五八」
 向こうみず(thrasutês, itês):「二三」「六三」
 無差別(adiaphoria, adiaphoros):「一六」「二四」「二七」「二八」「三九」「四二」「四四」
 「四四註4」「五四」「六六」「八五」「八七」「九二」「一〇四註6」
 無主張(aphasia):「三九」
 無情態(apatheia, apathês):「一註8」「二一註3」「二五(観)」
 「二九」「三四」「三四註2」「四五」「八五」「九八」「一〇四註5、6」
 無承認(asunkatathetos):「四四」
 無選択(anaietos):「八二」
 無同意(aprosthetein):「四〇」「四〇註1」
 無動揺(akradantos):「三九」
 無動揺(平静さ)(ataraxia, atarachos, securitas, tranquillitas):「一〇」「一七註4」
 「二一註3」「二五」「三三」「三九」「四五」「六五」「六七註1」
 「八九註2」「九二」「九八註3」「一一八」
 無把握、把握不可能(akatalêpsia, akatalêptos):「一」「一註11」「三」
 「一九註1(ディオゲネスの断)」
 「七四」「一〇五」「一〇八」「一〇九」「一一五」「一二二」
 無判断(adoxastos, akritos):「三九」「四四」「一〇四」
 メガラ派:「五」「八六」「九七」
 目的:「七」「一〇」「四四」「五八」「六五」「八九」「九二」「一〇五」「一一八」
 よりいっそう多くはない(ou mallon):「一」「一註12」「三九」「三九註6」「四〇」「四一」
 「四一註3」「四三」「四四」「四四註4」「九七」「一〇八」
 留保(ephexis):「一一四」「一一五」
 論争(agôn):「二四」
 煩い、煩わせる(ochlêsis, enochlein):「二五」「四三」「四四」

固有名詞索引 (年代順)

(細かい点は必ずしも正確でない)

ホメロス:前8世紀→[三][四][五][一〇]
タレス:前585年が盛期→[-08]
アナクシメネス:前6世紀→[-08]
クセノパネス:前580頃 470頃→[三六][三七][三八][四六][五一][五二][五八][一〇八]
シモニデス:前557/6 468/7→[-0-?] ヘラクレイトス:前540頃 480頃→[三][六][九][一〇八][一〇九]
パルメニデス:前515頃 450以降→[三六][三七][三八][五][五二][七九][一〇八]
アナクサゴラス:前500頃 428頃→[三六][一〇八] エンペドクレス:前495頃 435頃→[-08]
ゼノン(エレアの):前490頃 445以降→[三六][三七][三八][五八][七九]
アルケラオス:前5世紀に活躍→[-08] ヒッポン:前5世紀後半に活躍→[-08]
プロタゴラス:前485頃の生まれ→[三六][三七][三八][五][五七][六〇][七九][一〇七]
メリッソス:前440頃が盛期→[三六] レウキッポス:前480/70頃の生まれ→[三六][三七][三八][一〇八]
イストマコス:[一〇?] ソクラテス:前469 399→[四][七四][八六][九四][九六][九八][一〇一][一〇八]
デモクリトス:前460頃 370頃→[二][三][三六][三七][三八][五七][五八][六〇][六四][九二][一〇八][一〇三]
ヒッポクラテス:前460頃 370頃→[八三] エウクレイデス(メガラ):前450頃 380頃→[四][五][五八]
アリスティッポス:前435頃 355頃→[五〇][五一][五二][九四]
プラトン:前427 347→[四六][五三][六一][六二][六三][六五][一〇八][一一二][一一四][一一七][一二一]
ネッサス(またはネッス):前5世紀 4世紀→[三六] パイドン(エリスの):前418年頃の生まれ→[五][六]
ティモテオス:前4世紀→[五三] クレイノマコス:前4世紀初期から中期に活躍→[二][五八]
エクパントス:前4世紀→[-08] メトロドロス(キオスの):前4世紀に活躍→[二][三六][三七][五一][五七]
ブリュソン:前400年頃の生まれ?→[-][二][四][六][七]
ディオゲネス(シノペの):前400頃 325頃→[九八][九九] クセノクラテス:前396/5 314→[五九][六三][九〇]
コテュス:前4世紀初め 360(358)→[二六]
アリストテレス:前384 322→[三九][五六][六一][九〇][一〇八][一一二][一一四][一一七]
デモステネス:前384 322→[一一二] ピリッポス(マケドニア王):前383/2-336→[二]
ディオゲネス(シキュラ、一説ではキレネの):前4世紀→[三六][三七]
スティルポン:前380頃 300頃 or 前360頃 280頃?→[-][六三][七四][七七]
アナクサルコス:前340 337頃が盛期→[-][二][一六][二五(補)] [三六][三七][三八][四七][五六][五七][五八]
テオプラストス:前370頃 288/5→[六三][六四]
クラテス(テバイの):前365頃 285頃→[六三] モニモス:前4世紀→[五七]
ディオドロス・クロノス:284頃死去→[六二][六三][六四][六五]
メネデモス(エトリアの):前350頃 278頃→[五][六][五八][六二][六三][七四]

ブレイスタルコス([-五]ではピストクラテス)(ピュロンの父)→[-][二][一五]

ピュロン:前365/0頃-270頃

ピリスタ(ピュロンの姉妹)→[二八][二九]

ピュロンの弟子

ナウシパネス:前360頃の生まれ→[-七][三七][五九][六一][六九][七五][七九]

ピロン:前4 3世紀→[三][六八] エウリュロコス→[六七]

ヘカタイオス:前300年頃→[六九] ?ヌメニオス?→[三五][七五]

((ティマルコス(ティモンの父)→[七七]))

ティモン:前325/20-235/30→

[-〇][一][一五][一九][二〇][二一][二二][二三][二四][二五][三〇][三九][四〇][四二][四三][四四][四五][四六]
[四八][四九][六二][六三][六四][六七][六八][六九][七五][七六][七七][七八][七九][八〇][八二][八三][九八]

クサントス(ティモンの長男)→[七七]

アレクサンドロス(大王):前356 323→[二五(補)][五五][五六]

テオドロス(無神論者):前340頃かそれ以前の生まれ→[六四][六六][七四]

エピクロス:前341 271→[-七][三七][五一][五五][五八][五九][六〇][六一][六九][九六]

[-〇七][一〇八][一一一][一一三][一一五][一二〇]

アンティドロス(エピクロス派?)→[六〇]

ポレモン:アカデメイアの学頭期間(前314/3 270頃)→[六三] クラントル:前335頃 275頃→[六三][六四]

ゼノン(ストア派):前334/3-262→[六三][六六][八五][九一][九四][一〇八]
 ビオン(ポリステネスの):前325頃の生まれ→[三四][六四] アンティゴノス二世(ゴタス):前320頃-239→[七七]
 アルケシラオス:前316/5頃-241/0頃→[六二][六三][六四][六五][一〇一]
 プトレマイオス二世(ピラデルポス):前308-246→[七七]
 ヒエロニュモス(ロドスの):前290頃-230頃→[九四]
 アリストン:前250頃が盛期→[六二][六五][八五][八六][八七][八八][八九][九〇][九一][九二][九三][九四][九五]
 ヘリロス:前3世紀→[八六][八七][九二][九三][九五]
 エラトステネス:前285/80頃-194頃→[二七][二八?]
 アンティゴノス(カリュストスの):前240年頃に活躍→[八][一六][一七?][一八?][二七?][二八?]
 クリュシッポス:前280頃-206頃→[八七][一〇八][一一二][一一四][一一七]
 ソティオン:前200-170頃活躍→[七七]
 カルネアデス:前214/3-129/8→[七四][一〇一] ヘゲサンドロス:前2世紀半ば以前→[五三]
 アポロドロス(アテナイの):前150年頃の生まれ→[一] ポセイドニオス:前135頃-前50頃→[三三]
 アイネシデモス:前1世紀に活躍→[九][一〇][三九][四四][四八][七五]
 ムナセアス(アカデミアの):前1世紀→[六四?]
 クラッス・アゲラストゥス:クラッス(前115/4-53)の祖父
 クラッス(Crassus Dives):前115/4-53→[九八]
 キケロ:前106-43→[八五][八六][八七][八八][八九][九〇][九一][九二][九三][九四][九五]
 アレクサンドロス(ミレトスの):前105年頃の生まれ→[一] アスクレピアデス:前1世紀始め→[八四]
 カトー:前95-46→[八八][九一] アレイオス・ディデュモス:前1世紀→[九六]
 ディオクレス(マグネシアの):前75年頃の生まれ?→[一][二六]
 『プラトン「テアイテトス」註釈』:前1世紀後半(それとも2世紀中頃?)→[一〇六]
 ストラボン:前64-後24以降→[五]
 ティベリウス帝:前42-後37→[七七] アポロニデス(ニカイアの):ティベリウス帝時代(後14-37)に活躍→[七七]
 セネカ:前4-後1 後65→[九七][九八]
 ムナセアス:後1世紀→[六四?] ピロメロス:?→[六四] ディオクレス(クニドスの):?→[六四]
 プリニウス(大):23/4-79→[九八] クィンティリアヌス:35頃-100頃→[一〇〇]
 フロルス:1世紀→[一〇七] プルタルコス:46頃-120頃→[三四][五六][一〇七]
 ファウオリヌス:80/90頃-2世紀中頃→[四一] メノドトス:120-125年が盛期→[八四]
 ルキアノス:115/20頃-180以降→[七(スコリア)][一〇二][一〇三][一〇四][一〇五]
 パウサニアス:160年頃に活躍→[一五]
 アリストクレス:2世紀→[二九][三九][四二][四三][四四][四五][四七][四八]
 ガレノス:129頃-3世紀初頭→[一三][八三][八四] アウルス・ゲリウス:130頃-180頃→[四一]
 (偽ガレノス→[三八][五八]) ヌメニオス(アパミアの):2世紀後半→[三四?][六三]
 クレメンス(アレクサンドレイアの):150頃-211/6→[三七][一一二] テルトゥリアヌス:160頃-220頃→[九]
 アテナイオス:160頃の生まれ→[五三][八〇] ミヌキウス・フェリクス:盛期は200-240の間→[一〇一]
 ヒッポリュトス:170頃-236頃→[一〇八] テオドシオス:2-3世紀→[七三]
セクストス・エンペイリコス:200年頃→
 [一二][二二][二三][二四][二五][二六][四六][五五][六一][六五][七二][八二][一〇六][一〇七][一一一][一二一][一二二]
 アスカニオス:年代不詳→[一]
 ディオゲネス・ラエルティオス:3世紀前半→[一][八][一〇][一四][一五][一六][一七][一八][一九][二〇]
 [二六][二七][二八][三〇][三一][三二][三三][三五][四〇][六〇][六二][六七][六八][六九][七〇][七三][七四][七五]
 カリニコス:3世紀に活躍→[九八] Homiliae (偽クレメンス(ローマの)):3~4世紀?→[一一一]
 ランプリアスの目録:3~4世紀?→[一一三]
 エウセビオス:260頃-340頃→[二九][三六][三九][四二][四三][四四][四五][四七][四八][五〇][五一][五二][五七]
 [五九][六三][八〇] ヘルモゲネス:361年に死去→[一一三]
 ヒメリオス:300と310の間-380以降→[一一三] エピパニオス:315頃-403→[一一〇]
 グレゴリオス(ナジアンゾスの):329/30-389/90→[一一四][一一六][一一七]
 ユリアノス(皇帝):332-363→[一一九][一二〇]
 テオドレトス:393頃-466頃→[四九] ストバイオス:おそらく後5世紀→[五四][九六]
 ピロポノス:490頃-570頃→[一〇九] ユリアノス(エピグラム作家):6世紀→[一一九]
 アガティアス:531頃-580頃→[一一八]
 『スーダ辞典』:10世紀末→[二][三][四][六][六六][七一][七八][七九]
 ヨハanneス(シリアの):11世紀初頭の生まれ→[一二一]
 エリアス(クレタの):11-12世紀→[一一五]

Caizzi (C)との対照表

C1A [一]	C1B [二]	C1C [三]	C2 [四]	C3 [五]	C4 [六]	C5 [七]	C6 [八]
C7 [九]	C8 [-0]	C9 [-四]	C10 [-六]	C11 [-八]	C12 [-五]	C13 [二六]	C14 [二七]
C15A [二八]	C15B [二九][四六]		C16 [三〇]	C17A [三三]	C17B [三四]	C18 [五三]	C19 [五四]
C20 [三二]	C21 [五五]	C22 [五六]	C23 [四七]	C24 [五七]	C25A [三七]	C25B [三六]	C25C [三八]
C26A [五一]	C26B [-五〇]	C26C [五二]	C27 [五八]	C28 [-一五]	C29 [五九]	C30 [-六〇]	C31 [六一]
C32 [-六二]	C33 [六三]	C34 [六四]	C35 [六五]	C36 [六六]	C37 [六七]	C38 [六八]	
C39A [六九][七〇]		C39B [七一]	C40 [七二]	C41 [七三]	C42 [-三五]	C43 [七四]	C44 [七五]
C45 [七六]	C46 [四二]	C47 [七七]	C48A [四八]	C48B [四九]	C49A [七八]	C49B [七九]	C50 [-八〇]
C51 [三一]	C52 [四三]	C53 [三九][四四]		C54 [四〇]	C55 [-一]	C56 [四一]	C57 [四四]
C58 [四五]	C59 [二五]	C60 [-九]	C61A [二一]	C61B [二〇]	C61C [二二]	C61D [二三]	C62 [二四]
C63A [-一]	C63B [-二]	C63C [-三]	C64 [二五]	C65 [八一]	C66 [八二]	C67 [八三]	C68 [八四]
C69A [八五]	C69B [八七]	C69C [八九]	C69D [-八八]	C69E [九〇]	C69F [-九一]	C69G [九四]	C69H [-九三]
C69I [九二]	C69L [九五]	C69M [八六]	C70 [-九六]	C71 [九七]	C72 [-九八]	C73 [九九]	C74 [-〇〇]
C75 [-〇一]	C76 [-〇二]	C77 [-〇三]	C78 [-〇四]	C79 [-〇五]	C80 [-〇六]	C81 [-〇七]	C82 [-〇八]
C83 [-〇九]	C84 [-一〇]	C85 [-一一]	C86 [-一二]	C87 [-一三]	C88 [-一四]	C89 [-一六]	C90 [-一七]
C91 [-一八]	C92 [-一九]	C93 [-二一]	C94 [-二二]	C95 [-一五]	C96 [-二三]		

Long & Sedley (LS)との対照表

LS1A [-一][八][九][一四]	LS1B [-五][一六]	LS1C [-二八][三〇][三二]	LS1D [五七]	LS1E [-二五(補足)]
LS1F [三九]	LS1G [四〇]	LS1H [-一]	LS1I [二五]	LS1J [-九五]
LS2A [四四]	LS2B [四五]	LS2C [-二四]	LS2D [二〇][二一][二二][二三]	LS2E [二四]
LS2F [八五]	LS2G [八七]	LS2H [八九]	LS2I [八一]	LSJ [八二]
LS3B [四八]	LS71A [-〇]	LS71D [-〇六]		

文献・略号表

- Annas, J. & Barnes, J., *The modes of Scepticism* (Cambridge, 1985)
 (和訳『懐疑主義の方式』金山弥平訳(岩波書店 1990年)).
- Bächli, A., *Untersuchungen zur pyrrhonischen Skepsis* (Bern/Stuttgart, 1990).
- Barigazzi, A. (ed.), *Favorino di Arelate, Opere. Introduzione, testo critico e commento* (Firenze, 1966).
- Barnes, J., 'Diogenes Laertius IX61 116: The Philosophy of Pyrrhonism'
 in W. Haase (ed.), *ANRW II*. 36.6.
- Billerbeck, von M., 'Faule Fische. Zu Timon von Phleius und seiner Philosophensatire', *Museum Helveticum*, 44 (1987).
- Brancacci, A., 'La filosofia di Pirrone e le sue relazioni con il cinismo',
 in *Lo scetticismo antico* ed. G. Giannantoni (Rome, 1981).
- Brochard, V., *Les Sceptiques grecs* (Paris, 1923²).
- Burnyeat, M.F., 'Tranquillity without a stop: Timon, frag. 68',
The Classical Quarterly, n.s. 30 (1980).
- Caizzi > Decleva Caizziを見よ.
- Chilton, C.W., *Diogenes of Oenoanda. The Fragments* (Oxford, 1971).
- Couissin, P., 'L'origine et l'évolution de l'εἰρηχή',
Revue des Études Grecques, 42 (1929).

- Decleva Caizzi, F., Pirrone testimonianze (Naples, 1981).
- Deichgäber, K., Die griechische Empirikerschule (Berlin, 1930).
- Diels Diels, H., Poetarum Philosophorum Fragmenta (Berlin, 1901).
- Diels, DG Diels, H., Doxographi Graeci (Berlin, 1976⁴).
- DL Diogenes Laertius, Vitae philosophorum
(和訳『ギリシア哲学者列伝』加来彰俊訳、岩波文庫、1984・1994年).
- Döring, K., Die Megariker. Kommentierte Sammlung der Testimonien
(Amsterdam, 1972).
- Dörrie, H., Der Platonismus in der Antike. Band 1: Die geschichtlichen Wurzeln des Platonismus (Stuttgart Bad Cannstatt, 1987).
- Edelstein Kidd Edelstein, L. & Kidd, I.G., Posidonius, 2 vols
(Cambridge, vol.1 1989², vol.2 1988).
- Ferrari, G.A., 'L'immagine dell'equilibrio',
in Lo scetticismo antico ed. G. Giannantoni (Rome, 1981), vol.I.
- Giannantoni, G., 'Pirrone, la scuola scettica e il sistema delle «successioni»',
in Lo scetticismo antico ed. G. Giannantoni (Rome, 1981).
- Gigante, M., Diogene Laerzio, Vite dei Filosofi (Bari, 1975²).
- Glucker, J., Antiochus and the Late Academy, (Göttingen, 1978).
- Heiland, H., Aristoclis Messenii reliquae (Giessen, 1925).
- Hicks, R.D., Diogenes Laertius, Loeb C.L. 2 vols, 1925.
- 加来→DLを見よ。
- 金山(1) 金山弥平,「ピュロンにおける事物の無差別性 — Eusebius, Praeparatio evangelica 14.18.1 4 —」『西洋古典学研究』37(1989).
- 金山(2) 金山弥平,「理論と経験 — 古代医学における経験派の方法論 —」
『名古屋大学文学部研究論集』123・哲学41(1995).
- Lloyd Jones & Parsons Lloyd Jones, H. & Parsons, P., Supplementum Hellenisticum
(Berlin, 1983).
- Long, HP Long, A.A., Hellenistic Philosophy (London, 1974).
- Long, A.A., 'Timon of Phlius: Pyrrhonist and Satirist',
Proceedings of the Cambridge Philological Society NS 24 (1978).
- Long & Sedley Long, A.A. & Sedley, D.N., The Hellenistic philosophers,
vol. I & vol. II (Cambridge, 1987).
- Mejer, J., Diogenes Laertius and his Hellenistic background (Wiesbaden, 1978).
- OCD The Oxford Classical Dictionary, Second Edition (Oxford, 1970).
- Rolfe, J.C., The Attic Nights of Aulus Gellius, Loeb C.L. 3 vols, 1927.
- Sedley, D., 'Diodorus Cronus and Hellenistic philosophy',
Proceedings of the Cambridge Philological Society, N.S. 23 (1977).
- Stopper, M.R., 'Schizzi pirroniani', Phronesis 28 (1983), pp. 265-97.
- Stough, C.L., Greek skepticism (Berkeley/Los Angeles, 1969).
- Tarrant, H., Scepticism or Platonism? (Cambridge, 1985).
- Wachsmuth, C., Corpusculum poesis epicae ludibundae, vol. II: De Timone Phliasio ceterisque sillographis commentatio (Lipsiae, 1885).
- von Wilamowitz Moellendorf, U., Antigonos von Karystos, Philologische Untersuchungen 4 (Berlin, 1881).
- Zeller, E., Die Philosophie der Griechen in ihrer geschichtlichen Entwicklung
(Leipzig, II/1⁵: 1922).